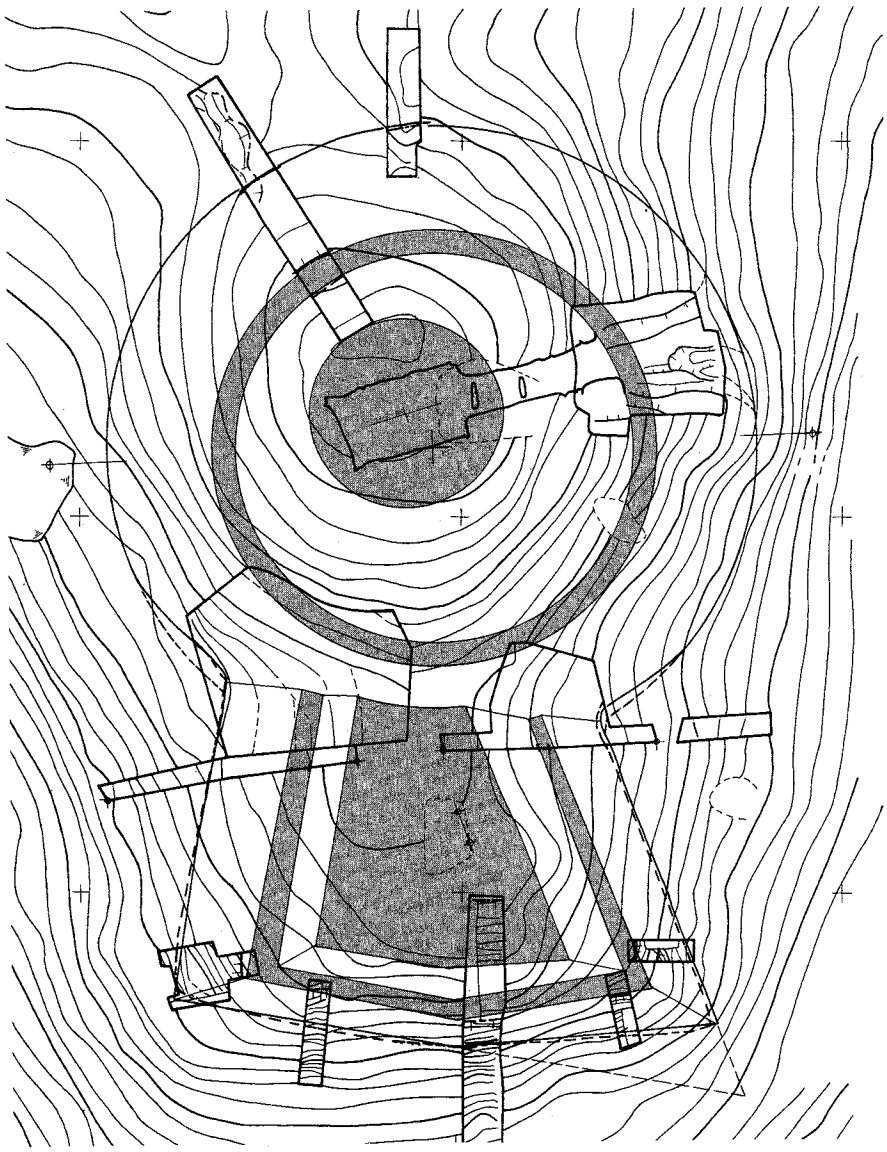
飯氏古墳群B群第14号墳調査報告書(2)

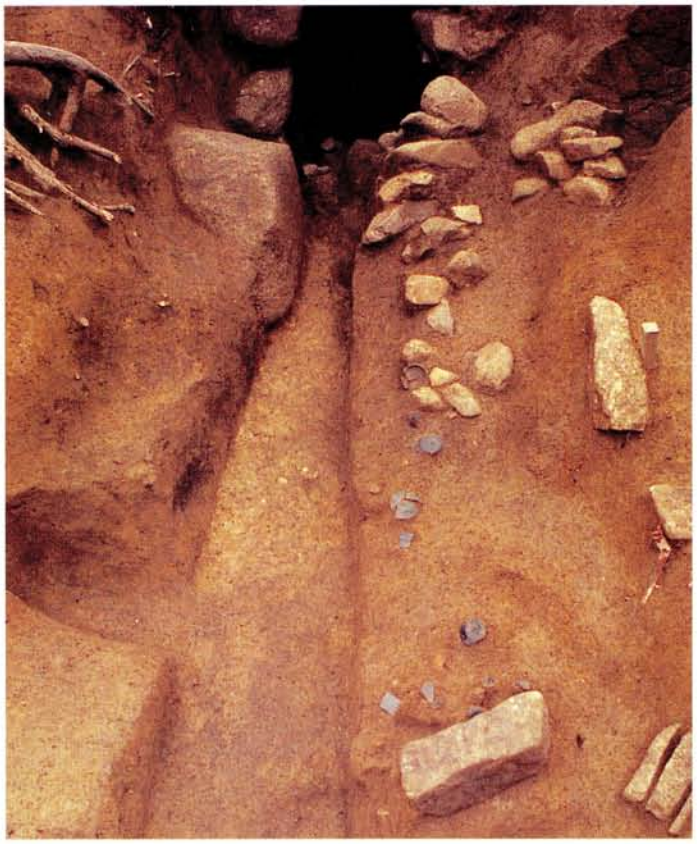
福岡市西区飯氏所在前方後円墳の第2次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集



1999

福岡市教育委員会



(1) 墓道追葬面（右半）
検出状況（北西から）

(2) Aトレンチ西壁墳丘土層
（南から）

(3) Bトレンチ東壁墳丘土層
（北から）

(4) 墓道部縦断
土層状況(北から)

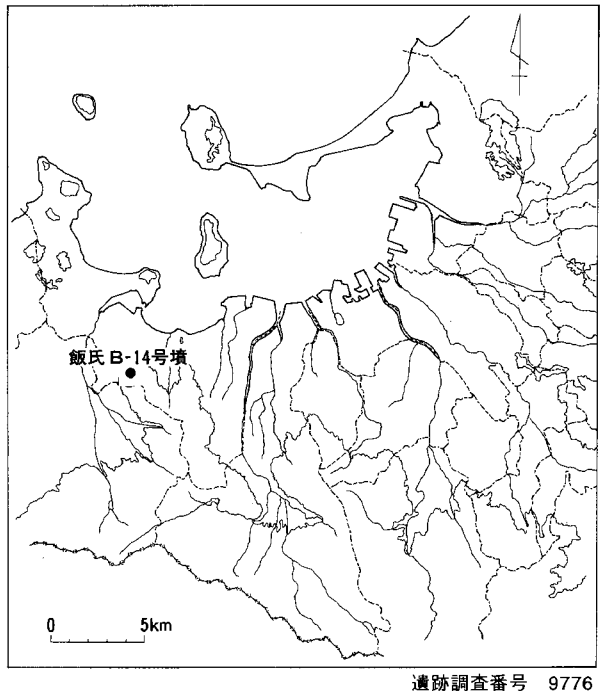
(5) 1次調査出土
銀環(左)・銅芯
銀箔張鍍金耳環(右)

(6) 1次調査出土
銅芯銀箔張鍍金
耳環拡大写真

飯氏古墳群B群第14号墳調査報告書(2)

福岡市西区飯氏所在前方後円墳の第2次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集



遺跡調査番号　9776
遺跡略号　IJK-B14-2

1999

福岡市教育委員会

序

福岡市西部に位置する今宿平野は、『魏志倭人伝』に見える「伊都国」に含まれることもあり、重要な遺跡が数多く残されています。特に、古墳時代には14基の前方後円墳をはじめとする多くの古墳が造られており、古墳時代の首長の系譜や、当時の社会体制を考える上で、大変重要な地域であります。

これまで福岡市教育委員会では、今宿平野に所在する前方後円墳の内容を把握し、歴史的意義付けを行うため、重要遺跡確認調査を行ってきました。今回報告する、飯氏Ｂ－14号墳の２回目の調査もその一貫で行われたものです。平成８年度と９年度の２回の調査により、飯氏Ｂ－14号墳は、今宿平野における最後の前方後円墳であることがほぼ明らかとなり、この貴重な成果をここに報告するものであります。

本書が、市民の皆様の埋蔵文化財への理解と地域の歴史を知る上での一助となり、また学術研究の資料としてご活用頂けましたら幸いであります。

最後に、発掘調査にご協力を頂きました地権者の田中亘様をはじめとする関係各位の方々には、心から謝意を表するものであります。

平成11年３月31日
福岡市教育委員会
教育長 町 田 英 俊

例　　言

1．本書は、国庫補助金を受け、福岡市教育委員会が、平成９年度重要遺跡確認調査として実施した福岡市西区大字飯氏に所在する飯氏古墳群Ｂ群第14号墳（以下、飯氏Ｂ－14号墳とする）の第２次調査の報告書である。
2．本書の編集は、久住猛雄が行った。執筆は、飯氏鏡原古墳について吉留秀敏が、第１次調査出土の耳環についての説明を西山めぐみが行った他は、久住が行った。
3．本書に使用した遺構実測図は（第２次調査）、久住・加藤良彦・加藤隆也・池田祐司・大塚拓史・辻節子・宮原邦江・永井大志・今塩屋毅行・坂元雄紀が作成した。また、一部第１次調査の遺構実測図も使用した。なお、飯氏鏡原古墳については、飯氏地区試掘調査を担当した吉留秀敏からの原図の提供を受けた。
4．本書に使用した遺物実測図（第２次調査）は、大部分を久住が作成したが、鉄製品については西山めぐみが作成した。第１次調査の遺物については、一部をそのまま使用しているが、観察・表現の統一を図るために多くについて久住が再実測し、耳環については西山めぐみが実測した。
5．本書に使用した遺構・遺物写真は久住が撮影したものである。
6．本書に使用した図面の整図は、久住・成清直子・平井裕子・西山めぐみが行った。
7．本書の図中の標高は、兜塚古墳周辺の測量基準杭標高より移動したものである。
8．本書における方位は、磁北を用いた。真北との偏差は西偏約06°21′である。また調査区の座標は、第１次調査の測量杭を生かした任意のものである。
9．本調査に関わる遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定である。広く活用されたい。

遺跡調査番号	9776	遺跡略号	IJK-B14-2	分布地図番号	121-0699
調査地	福岡市西区大字飯氏字正善寺地内		調査面積	42㎡	
調査期間	1998年3月6日～同年3月31日				

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の組織……1
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境……2
　1　飯氏Ｂ－14号墳の立地と古墳群の状況……2
　2　周辺の遺跡と古墳（群）……3
Ⅲ　調査の記録……6
　1　調査の経過……6
　2　第１次調査の墳丘トレンチについての補足……6
　3　墳丘の調査（第２次調査）……7
　（１）Ａ・Ｃトレンチ……7
　（２）Ｂトレンチ……10
　（３）Ｄ・Ｅトレンチ……12
　（４）Ｆ・Ｇトレンチ……12
　4　石室羨道・墓道の調査……13
　（１）石室羨道部の調査……13
　（２）墓道部の調査……16
　5　出土遺物……18
　（１）第２次調査出土土器……18
　・墳丘出土の土器……18
　・墓道部出土の土器……22
　（２）第２次調査出土の鉄製品……25
　（３）第１次調査出土遺物についての補足と追加報告……27
　・表１　飯氏Ｂ－14号墳第２次調査出土土器観察表……25
　・表２　飯氏Ｂ－14号墳第１次調査出土土器観察表……26
Ⅳ　飯氏鏡原古墳（仮称）について……28
　1　試掘調査の概要と墳丘の復元……28
　2　試掘調査出土の遺物……28
Ⅴ　調査の成果と今後の課題－今宿古墳群をめぐって－……31
　1　飯氏Ｂ－14号墳の墳丘の復元（案）……31
　2　築造と追葬の時期について……32
　3　今宿古墳群の前方後円墳の変遷と今後の課題……32

挿図目次

Fig. 1 今宿平野の主な遺跡 (1/40,000)……1
Fig. 2 今宿平野の古墳(1/25,000)……2
Fig. 3 飯氏古墳群周辺図(1/8,000)……3
Fig. 4 飯氏Ｂ－14号墳現況測量図(1/400)……4
Fig. 5 飯氏Ｂ－14号墳トレンチ位置図 (1/300)……5
Fig. 6 墳丘復元断面図(1/300)……5
Fig. 7 第１次調査１区（１トレンチ）、２区 (2トレンチ)平面図(1/200)……6
Fig. 8 第１次調査１トレンチ、２トレンチ 土層図(1/100)……6
Fig. 9 Ａ・Ｃトレンチ平面図(1/100)……7
Fig.10 Ｃトレンチ土器出土状況図(1/30)……7
Fig.11 Ａトレンチ西壁土層図（1/60)……8
Fig.12 Ｃトレンチ東壁土層図(1/60)……8
Fig.13 Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇトレンチ平面図 (1/100)……9
Fig.14 Ｂトレンチ土器出土状況(1/20)……9
Fig.15 前方部中央落ち込み壁面土層図 (1/40)……9
Fig.16 Ｂトレンチ東壁土層図(1/60)……10
Fig.17 Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇトレンチ土層図 (1/60)……11
Fig.18 石室・墓道実測図(1/80)……14
Fig.19 墓道実測図（完掘時）(1/50)……15
Fig.20 閉塞石・墓道右壁石列平面図（上段)、追葬面平面図（中段)、閉塞石・石列・追葬面見通し断面図（下段）(1/40)……16
Fig.21 墓道横断土層図(1/50)……17
Fig.22 墓道縦断土層図(1/50)……17
Fig.23 第２次調査出土土器（墳丘他）(1/3) ……19
Fig.24 第２次調査出土土器（墓道他）(1/3) ……20
Fig.25 第２次調査出土鉄製品(1/2)……21
Fig.26 第１次調査出土耳環(1/1)……21
Fig.27 第１次調査出土鉄製品(1/4)……21
Fig.28 第１次調査出土ガラス小玉(1/1)……21
Fig.29 第１次調査出土土器（１）(1/3)……22
Fig.30 第１次調査出土土器（２）(1/8)……23
Fig.31 第１次調査出土土器（３）※補遺編 (1/3、1/4)……24
Fig.32 飯氏鏡原古墳（仮称）現況図・想定復元図(1/600)……29
Fig.33 飯氏鏡原古墳試掘トレンチ土層図 (1/80)……29
Fig.34 飯氏鏡原古墳出土埴輪(1/4)・須恵器(1/2) 30
Fig.35 飯氏Ｂ－１４号墳墳丘復元平面図 (1/300)……31
Fig.36 今宿平野の前方後円墳(1/2,000)……32

巻　頭　図　版

巻頭図版１
1. 墓道追葬面（右半）検出状況（北西から）
2. Ａトレンチ西壁墳丘土層（南から）
3. Ｂトレンチ東壁墳丘土層（北から）

巻頭図版２
4. 墓道部縦断土層状況（北から）
5. １次調査出土銀環・銅芯銀箔張鍍金耳環
6. １次調査出土銅芯銀箔張鍍金耳環拡大写真

図　版　目　次

ＰＬ．１
1. 飯氏Ｂ－14号墳遠景（西から）
2. 前方部西側コーナーから後円部現況（南西から）
3. 後円部から尾根上方現況（北東から）
4. 尾根上方西斜面から後円部現況（南西から）
5. 墓道部表土除去検出状況（北から）

ＰＬ．２
6. Ａ・Ｃトレンチ掘削状況（北から）
7. Ａトレンチ盛土遺存面検出状況（南から）
8. Ａトレンチ盛土途中面掘削状況（南から）
9. Ａトレンチ北側壁面土層状況・石室掘方検出状況（南から）
10. Ａトレンチ西壁中部土層状況（東から）
11. Ａトレンチ東壁中部土層状況（盛土途中溝状部、西から）

ＰＬ．３
12. Ｃトレンチ掘削状況（地山整形面、西から）
13. Ｃトレンチ土器出土状況（北西から）
14. Ｃトレンチ東壁北半土層（北西から）
15. Ｂトレンチ地山整形面確認状況（北東から）
16. Ｂトレンチ東壁最上部土層状況（北から）
17. Ｂトレンチ東壁中部土層状況（墳端付近、北西から）

ＰＬ．４
18. Ｂトレンチ地山整形面完掘状況（南西から）
19. Ｂトレンチ上部南・東壁面土層状況、土器出土状況（北から）
20. Ｂトレンチ上部地山整形面土器出土状況（北東から）
21. Ｂトレンチ東壁上部土層状況（溝状遺構、北から）
22. 前方部落ち込み西壁土層状況（東から）
23. Ｄトレンチ南壁土層状況（北東から）
24. Ｅトレンチ西壁土層状況（東から）

ＰＬ．５
25. Ｄ（左）・Ｅ（右）トレンチ掘削状況（南から）
26. Ｆ（左）・Ｇ（右）トレンチ掘削状況（西から）
27. Ｆトレンチ東壁土層状況（西から）
28. Ｇトレンチ掘削状況（東から）

ＰＬ．６
29. Ｇトレンチ南壁土層状況（北東から）
30. Ｇトレンチ北壁土層状況（南西から）
31. 羨道部転落石材出土状況（墓道から、北西から）
32. 石室羨道部完掘状況・床面敷石出土状況（玄室から、南東から）
33. 羨道部右壁完掘状況（玄室から）
34. 羨道部左壁完掘状況（玄室から）

ＰＬ．７
35. 墓道完掘状況（北西から）
36. 墓道追葬面（右半）出土状況（北西から）
37. 墓道追葬面下半土器出土状況（南西から）
38. 墓道横断土層北半状況（西から）
39. 墓道縦断土層東半状況（北から）
40. 墓道追葬面出土須恵器一括（10～17）

ＰＬ．８
41. Ｂトレンチ出土須恵器甕？（横瓶？）（４）
42. 墓道出土須恵器坏蓋（７）
43. 墓道出土須恵器坏蓋（８）
44. Ｃトレンチ出土須恵器高坏（３）
45. 42（７）＋44（３）
46. 墓道追葬面出土脚付鉢（17）
47. 墓道出土土師器坩形土器外面（22）
48. 坩形土器（47に同じ）内面（22）
49. 墓道出土須恵器提瓶体部腹部ヘラ記号（９）
50. 提瓶（49に同じ）体部被蓋部外面（９）
51. 墓道出土須恵器坏蓋（６）
52. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（13）
53. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（10）
54. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（12）
55. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（11）
56. 墓道追葬面出土須恵器坏身（15）

ＰＬ．９
57. 墓道出土鉄製品（23・24・25・28）
58. 墓道出土鉄滓上面（29）
59. 鉄滓（58に同じ）下面（29）
60. 作業（埋め戻し）風景
（40～59の（　）内の番号は、報告書挿図における２次調査の遺物番号と同じ）

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

福岡市教育委員会では、今宿平野に点在する前方後円墳について、将来的に保存するための資料収集を目的に、これまでに今宿大塚古墳、鋤崎古墳、山ノ鼻１・２号墳、飯氏二塚古墳、兜塚古墳、谷上Ｂ１号墳の重要確認調査を行ってきた。またこれら以外に、若八幡宮古墳（福岡県教委調査）、丸隈山古墳（市教委調査）の調査が行われている。そして、これらの重要確認調査の一環として平成９年度末には飯氏古墳群Ｂ群第14号墳（以下、飯氏Ｂ－14号墳とする）の第１次調査が行われ、すでにその成果も公表されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集）。

今回の第２次調査は、１次調査が期間の関係上、現況地形測量と石室現況の清掃と実測、および墳丘両くびれ部の確認といった限定的な調査であったため、これを補うために行われたものである。具体的には、確認が不十分であった羨道の完掘と墓道の確認調査、墳形・規模の確定のための墳丘のトレンチ調査が目的とされた。調査は１次調査時と同様に、現状保存が前提であり、山林保全のため樹木の伐採はほとんどできず、トレンチの設定に制約を受ける部分もあった。また、今回も調査期間が年度末の限られた時期しかとれなかったために、調査にやや不十分な部分が残ったことも否めない。しかし結果的には、墳丘の復元も可能となり、築造から追葬までの時期やその幅が確定するなど、その成果も大であったことも記しておきたい。

2　調査の組織

調査は以下の組織構成で実施した。また調査に際しては、地権者の田中亘・美奈子御夫妻には調査の主旨をご理解いただき、快く調査に協力していただいている。記して感謝申し上げたい。

調査主体：福岡市教育委員会
　　文化財部埋蔵文化
　　財課（第一係担当）
埋蔵文化財課長：荒巻輝勝
　　第１係長：二宮忠司
　　調査担当：久住猛雄
　　・加藤良彦
　　庶務担当：（前）内野保基
　　（現）木原淳二

1. 飯氏二塚古墳
2. 飯氏B14号墳
3. 丸隈山古墳
4. 山ノ鼻2号墳
5. 山ノ鼻1号墳
6. 若八幡宮古墳
7. 下谷古墳
8. 女原C14号墳
9. 今宿大塚古墳
10. 谷上B1号墳
11. 本村A1号墳
12. 鋤崎古墳
13. 兜塚古墳
14. 山崎古墳（?）
15. 飯氏古墳群A群
16. 〃　J群
17. 〃　B群
18. 〃　F群
19. 〃　C群
20. 〃　D群
21. 〃　E群
22. 〃　I群
23. 〃　G群
24. 徳永古墳群A群
25. 〃　C群
26. 〃　D群
27. 徳永古墳群G群
28. 〃　H群
29. 女原古墳群A群
30. 〃　B群
31. 〃　C群
32. 〃　D群
33. 〃　E群
34. 新開古墳群B群
35. 〃　C群
36. 〃　D群
37. 〃　E群
38. 〃　F群
39. 谷上古墳群A群
40. 谷上古墳群B群
41. 〃　C群
42. 相原古墳群D群
43. 〃　B群
44. 〃　A群
45. 〃　C群
46. 〃　E群
47. 〃　F群
48. 〃　G群
49. 〃　H群
50. 〃　J群
51. 本村古墳群A群
52. 新開窯跡
53. 今山遺跡・今山下遺跡
54. 今宿遺跡群
55. 今宿五郎江遺跡
56. 鋤崎古墳群A群
57. 〃　B群
58. 飯氏鏡原古墳
59. 女原遺跡
60. 女原遺跡3次地区
61. 今宿青木遺跡
62. 大塚遺跡（今宿高田遺跡）
63. 飯氏遺跡群

Fig.1　今宿平野の主な遺跡（1/40,000）

調査補助：大塚拓史
調査作業：青木秀雄・阿比留治・犬童陽子・鬼塚友子・加島定次郎・栗木和子・小金丸ミネ子・小森公元・坂本隆二・柴田シヅノ・末松美佐子・高瀬孝二郎・橘良平・辻節子・黨修一・黨ツギノ・徳重コマキ・徳重忠子・徳永千鶴子・友池冨美恵・永井大志・西田マキエ・平野ミサオ・平野義雄・平野義光・松本ミツ子・真鍋キミエ・三谷朗子・宮原邦江・森友ナカ・脇坂レイ子、今塩屋毅行（福岡大学学生)・坂元雄紀（早稲田大学学生）
整理作業：甲斐田嘉子・富田輝子・成清直子・平井裕子・宮坂　環・森部順子
以上のほか、調査中は埋蔵文化財課・文化財部の諸先輩、同僚からは貴重な助言、協力を賜った。報告書作成においては、１次調査を担当した米倉秀紀（埋蔵文化財課）からは種々の教示・協力を賜り、飯氏鏡原古墳（仮称）の紹介では、試掘調査担当の吉留秀敏（埋蔵文化財課）の協力を賜った。また１次調査出土の耳環の再調査については、西山めぐみ（福岡大学大学院）の協力を受け、その写真撮影では、比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）の協力を得た。記して謝意を表する。また最後に、悪条件の中、発掘作業に従事して頂いた作業員の皆様には、あらためて感謝の意を申し上げたい。

II　遺跡の立地と歴史的環境

1　飯氏Ｂ－14号墳の立地と古墳群の状況（Fig.3）

飯氏Ｂ－14号墳は、福岡市西部の今宿平野の西端、糸島平野の東側に位置し、高祖山から派生する小丘陵の一つに立地する。古墳は、頂部の幅が５ｍ前後と幅狭い丘陵の尾根線上に築かれている。この丘陵の裾部は緩やかな起伏となり、その先端に兜塚古墳がある。さらに西側には飯氏二塚古墳、飯

a. 鋤崎古墳　b. 本村A-1号墳　c. 今宿大塚古墳　d. 谷上B-1号墳　e. 女原C-14号墳　f. 山ノ鼻２号墳　g. 山ノ鼻１号墳　h. 若八幡宮古墳　i. 下谷古墳　j. 丸隈山古墳　k. 兜塚古墳　l. 飯氏鏡原古墳　m. 飯氏二塚古墳　n. 飯氏B-14号墳　o. 山崎古墳　p. 今宿小塚古墳　q. 谷上C-1号墳　(a～nは前方後円墳)
1. 飯氏古墳群（1-A、1-B・・・・は支群を表す）　2. 徳永古墳群　3. 女原古墳群　4. 新開古墳群　5. 谷上古墳群　6. 相原古墳群　7. 本村古墳群　8.鋤崎古墳群　9. 焼山古墳群

Fig.2　今宿平野の古墳（1/25,000）

氏鏡原古墳といった計３基の前方後円墳が比較的近辺に立地する(Fig.3)。飯氏Ｂ－14号墳の墳頂部の標高は64.575ｍを測り、丘陵裾部との比高差は約40ｍを測る。現在は樹木に覆われているものの、往時はかなりの眺望であっただろう。飯氏古墳群Ｂ群は18基の古墳からなる。前方後円墳は14号墳１基で、盟主的位置を占める。このうち12・13号墳は小形の竪穴式石室で、低墳丘の古墳である。いずれも径10m弱程である。15号墳は、やや小形の横穴式石室を有し、墳丘の残りは悪いが、径１０ｍ以上であろう。17・18 号墳は隣接しており、あるいは後期の小形前方後円墳の可能性も考えられる。１号墳は丘陵高所に単独で位置し、主体部は不明だが、径10m前後の円墳と考えられる。墳丘は低く、立地的に前期古墳の可能性があろう。

Fig.3　飯氏古墳群周辺図（1/8,000）

1. 飯氏B-14号墳
2. 兜塚古墳
3. 飯氏二塚古墳
4. 飯氏鏡原古墳(仮称)
5. 飯氏B-１号墳
6. 飯氏B-17・18号墳
7. 飯氏B-15号墳
8. 飯氏B-13号墳
9. 飯氏B-12号墳
10. 子捨塚古墳（双円墳）

A. 飯氏古墳群B群
B. 飯氏古墳群J群
C. 飯氏古墳群A群
D. 飯氏古墳群C群
E. 飯氏遺跡群
F. 飯氏引地遺跡

２　周辺の遺跡と古墳(群)(Fig.1・2)

今宿平野は、『魏志倭人伝』の「伊都国」の領域の一角と思われ、これを裏付けるように弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺跡や古墳が分布している。今宿平野の遺跡の立地は、地形的に、海岸の砂丘上、平野東部の沖積・扇状地、高祖山北麓の丘陵に分けられ、それぞれに展開が見られる。砂丘上では、今宿遺跡がある。弥生時代前期～中期の甕棺墓・土壙墓・木棺墓が調査され、細型銅剣や磨製石剣、硬玉製勾玉が出土している。弥生時代から古墳時代の土器が多く出土するほか、蛸壺や滑石製漁錘といった漁撈関係遺物が多く、また製塩土器が多いのが特筆される。第５次調査では、古墳前期の濃密な住居址とともに、小規模ながら製塩炉の可能性のある遺構も検出された。漁業・製塩に係わる生産集落であろう。また、砂丘の西端には玄武岩製石斧の生産で著名な今山遺跡がある。平野東部の沖積地には、今宿五郎江遺跡がある。弥生中期後半から後期の大溝・環濠・掘立柱建物が調査された。弥生中期後半～後期の大溝からは大量の土器、木製品が出土したほか、「銅鐸型銅製品」が出土している。この地域の拠点集落の一つであろう。このほか、今宿青木遺跡では弥生中期の集落や弥生後期の甕棺墓が検出されているが、古墳時代でも有力な集落であると推定される。また平野西

部の扇状地から丘陵先端に立地する飯氏遺跡群では、ＪＲ筑肥線の拡幅工事に伴う調査で弥生中期後半の2条の並走する大溝が検出され、環濠と考えられるが、大量の祭祀土器が出土した。また、同時期の大形掘立柱建物群の一端も検出された。また、今宿バイパスの工事に伴う同遺跡群の調査では、弥生中期・後期、古墳前期・中期の各時期の集落遺構が多く検出され、また弥生中期・後期の甕棺墓も多く検出されている。後期中頃の甕棺墓の一つからは、舶載の雲雷文帯内行花文鏡も出土した。飯氏遺跡群はさらに、周辺の試掘調査のデータでは、弥生～古墳時代の遺構・遺物が広く包含していることが判明しており、この地域の中心的な遺跡であることが予想される。

丘陵上の遺跡では、丘陵の裾部から先端部で多くの集落遺跡が検出されている。大塚遺跡高田地区（今宿高田遺跡）では、弥生後期後半から古墳前期の住居址群が、その西側の大塚遺跡Ⅲ区や徳永遺跡Ⅲ区では、古墳後期（６－７世紀）の竪穴住居・掘立柱建物・包含層が検出されている。特に、徳永遺跡Ⅲ区ではいわゆる「赤焼土器」が多数出土し、須恵器工人集団との関連が指摘される。南側の丘陵には新開窯跡群があり、TK208 からTK10までの間に相当する須恵器を生産しているが、これらの「赤焼土器」の存在や、今宿平野を中心に、糸島平野から早良平野にかけては７世紀いっぱいまで、胎土がやや粗く、焼きの甘い須恵器の一群が確認できることから、他にも須恵器の窯跡が系列的に存在する可能性がある。女原遺跡３次調査では、布留式新相から初期須恵器併行期の竪穴住居や大形掘立柱建物が検出されている。陶質土器や軟質の韓式系土器、初期須恵器が多く出土し、鉄器未製品（？）も出土しており、特殊な集落といえる。丸隈山古墳築造頃の、古墳中期の首長の政治拠点のような中心的な集落の可能性がある。生産関係では、叶嶽～長垂山の西麓や高祖山の東側から北側の丘陵で、20ヶ所の鉄滓散布地が認められ、古墳時代から古代の製鉄遺跡とみられる。また、群集墳の鉄滓供献例も比較的多く、砂鉄を素材とした鉄生産も指摘されている。製鉄遺跡の調査例は少ないが、近年の鋤崎古墳群では、古墳後期から奈良時代にわたる炭窯と製鉄炉が検出され、炭窯には「ヤツメウナギ」と称される横口付式のものもあり注目される。

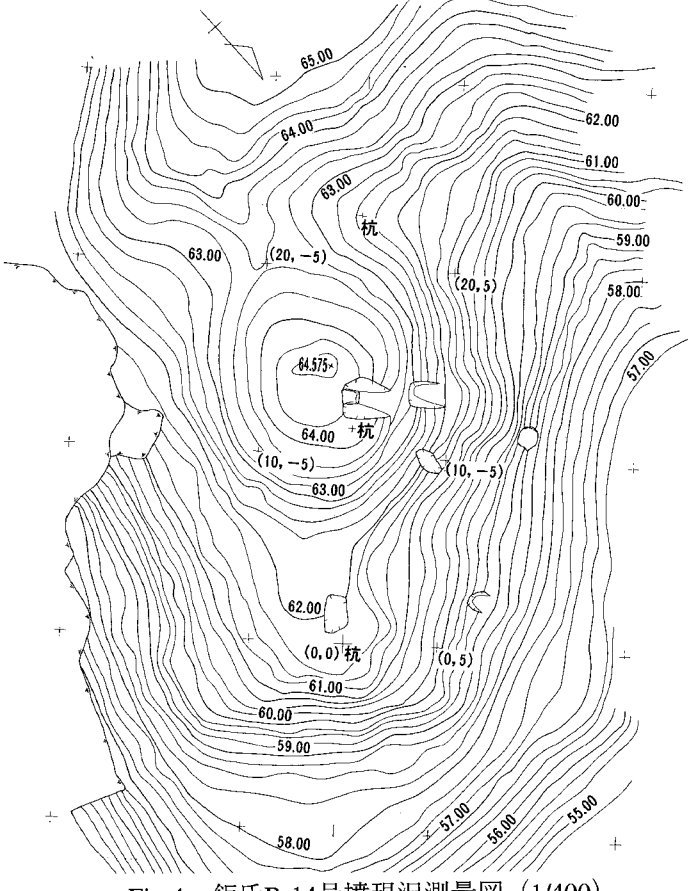


Fig.4　飯氏B-14号墳現況測量図（1/400）

以上のように、今宿平野の古墳時代の遺跡には、一般集落の他に、製塩、須恵器、鉄などの各種生産活動の痕跡が多く見いだされ、これらは、前方後円墳系列を築いた地域首長を中心とて、有機的に結びついて営まれたものであろう。また、こうした集落の営みや生産活動を背景として、高祖山北麓から長垂山西麓にかけての丘陵地には、14基の前方後円墳を含む、330基以上の古墳群が営まれている（Fig.2)。以下、主な古墳群について概観してみたい。まず西から、飯氏古墳群は高祖山北西側丘陵に広く分布し、13支群55基が確認されている。群中には飯氏Ｂ－14号墳、丘陵裾部西側には兜塚・飯氏二塚・飯氏鏡原古墳の４基の前方後円墳がある。また、飯氏山出土と伝える碧玉製車輪石（糸島高校蔵）があり、未知の前期の有力古墳（前方後円墳？）の存在も考えられよう。次に徳永古墳群は、現在の徳永の集落の西南側の谷を挟んだ丘陵上に立地する。８支群41基が知られている。丘陵先端には、山ノ鼻１・２号、若八幡宮、下谷古墳（削平）の４基の前方後円墳がある。D

群１・２号、Ｅ群１号（Ｄ・Ｅ群の旧称は徳永アラタ西古墳群)、Ｈ群（旧称徳永アラタ古墳群）６～９・15～21・26～28号墳が調査されている。Ｄ群では墳丘周囲に鉄滓が出土している。Ｈ群18号（旧３号）は全長7.8mの複室の横穴式石室を持つ。同16号（旧５号）はⅢＢ期（６世紀末）の古墳で、玄室から鉄滓が出土している。同26号墳は竪穴系横口式石室で、三葉環頭大刀が出土した。５世紀末の築造か。このように有力な古墳が多く、鉄滓（精練滓）の出土から製鉄集団との関連も考えられる。女原古墳群は、徳永古墳群から谷を隔てた東側丘陵の西側斜面に立地し、５支群81基が確認されている。Ｃ群には前方後円墳（14号墳）がある。古墳群の北側で調査された今宿小塚古墳は径30m前後の削平された円墳で、時期は６世紀中頃である。古墳群の西側には女原上ノ谷製鉄址があり、操業は６世紀に遡る。今後、古墳群の調査とともに注目される。新開古墳群は、女原古墳群の立地する丘陵の東側斜面に位置する。５支群43基が確認されている。古墳群自体はほとんど未調査だが、Ｃ群中の須恵器の窯跡が注目される。新開窯跡群は、1971年に日本考古学協会によって小田富士雄氏などにより調査されている。また、中村勝氏などによる資料の採集がなされ、その成果も公表されている。小田富士雄氏編年のＩＢ期に操業の中心がある。谷上古墳群は、新開古墳群とは谷をはさんで東側の丘陵上に立地する。３支群22基が確認されている。Ｂ群には前方後円墳がある（１号墳)。Ｃ群の３基は調査され、２号墳は竪穴式石室（短甲？出土)、３号墳は箱式石棺であり、前者は古墳中期中頃、後者は前期後半の築造だろう。１号墳は径約30mにおよび、横穴式石室をもつ。６世紀中頃の築造か。相原古墳群は、谷上古墳群とは谷をはさんで南東に分布する。10支群73基が確認されている。これまで、Ｂ群で３基、Ｃ群で７基、Ｅ群で１基が調査された。Ｃ群の造営は、６世紀前半から開始されている。この古墳群からも鉄滓が出土している。本村古墳群は、相原古墳群の南東に分布し、２支群８基が確認されている。Ａ群１号墳は前方後円墳である。標高45ｍに立地し、全長30ｍとされるが、削平が著しい。

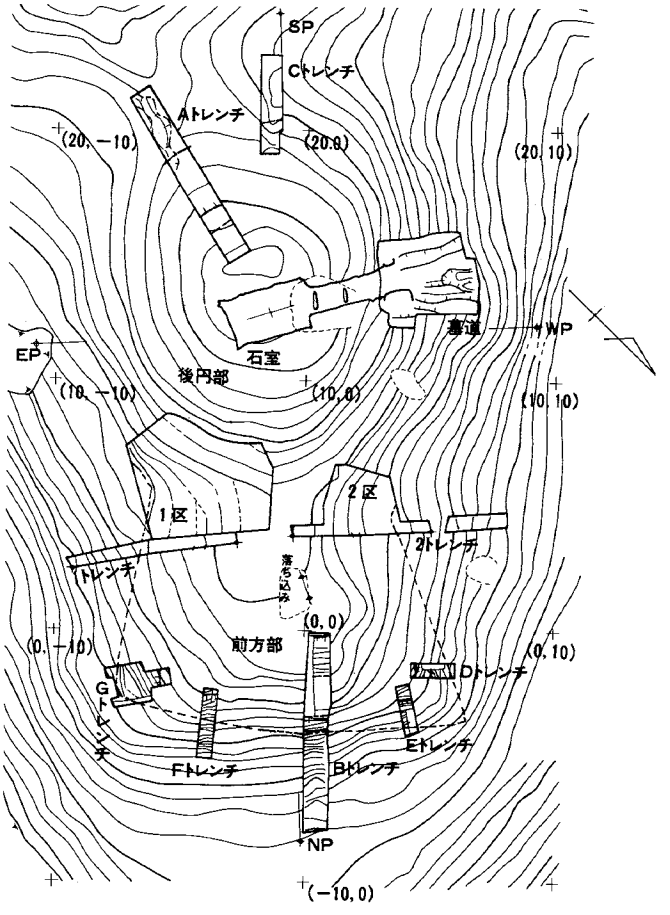


Fig.5　飯氏B-14号墳トレンチ位置図（1/300）

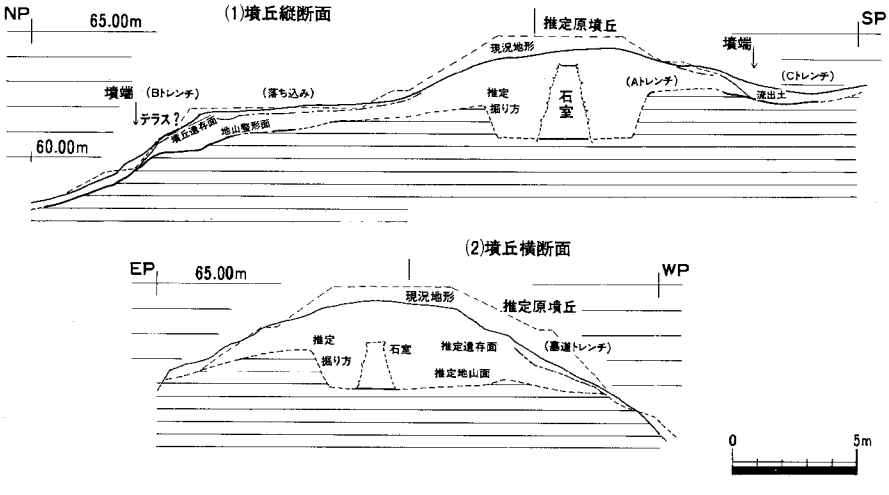


Fig.6　墳丘復元断面図（1/300）

鋤崎古墳群は、長垂山の西側丘陵斜面に立地する。鋤崎古墳の周囲に分布し、２支群17基が確認されている。Ａ群はⅡ期（６世紀前半）より造営を開始する。Ａ群の１～13号墳が調査されている。９号墳から鉄滓が出土したほか、古墳以外に製鉄炉や炭窯が検出されていることが特筆される。

以上でも触れたが、今宿古墳群には14基の前方後円墳があり、古墳時代前期初めから後期まで継続的に造営されており、これは九州では意外と珍しい例であり、その意義は大きい。これらの変遷と内容については、巻末の「Ⅴ 調査の成果と今後の課題」で触れることにしたい。

Ⅲ　調査の記録

１　調査の経過

調査は平成10年３月６日に開始した。まず、昨年度の第１次調査の測量杭を基準として、新たに測量杭を設置し、任意の座標軸を設定した（Fig.4)。次に、墳丘の推定主軸に近い部分にＢ・Ｃトレンチ、尾根上方と墳丘の間の鞍部にＡトレンチを設定し（Fig.5)、これの掘削を行った。これらと並行して、石室入口部分の埋め戻し土の除去と、続けて表土の除去を行い、次いで墓道の検出・掘削を行った。これらの調査区の掘削が一段落ついたところで、新たに前方部の両隅角（コーナー）部の確認のため、Ｄ・Ｅトレンチ、Ｆ・Ｇトレンチの設定・掘削を行った。墓道部については、土量の多さと追葬面の確認から、調査に時間がかかり、墓道部の調査を終えて石室羨道部の完掘と実測の補足を行ったのは調査終盤であった。なお、各墳丘トレンチの調査は、トレンチにより、墳丘遺存面までで掘削を終えたところと、地山面まで下げたところがある。

墓道部、各トレンチともに、調査終了後、現状復旧のための埋め戻しを行った。埋め戻しは、墳丘が流出しないように、土嚢袋を積み重ねたり、突き固めたりしながら行い、最後は表面に腐葉土をかぶせて終了した。また石室については、危険なため、石室入口ならびに石材が動かされ透き間が空いている墳頂部の陥没も合わせて、これらを塞いで埋め戻しを行っている。

以上の作業を行って、調査は平成10年４月３日に終了した。

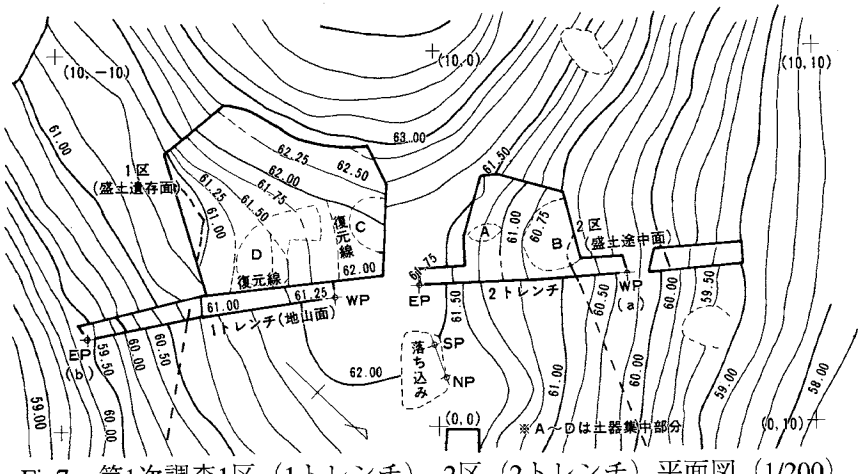
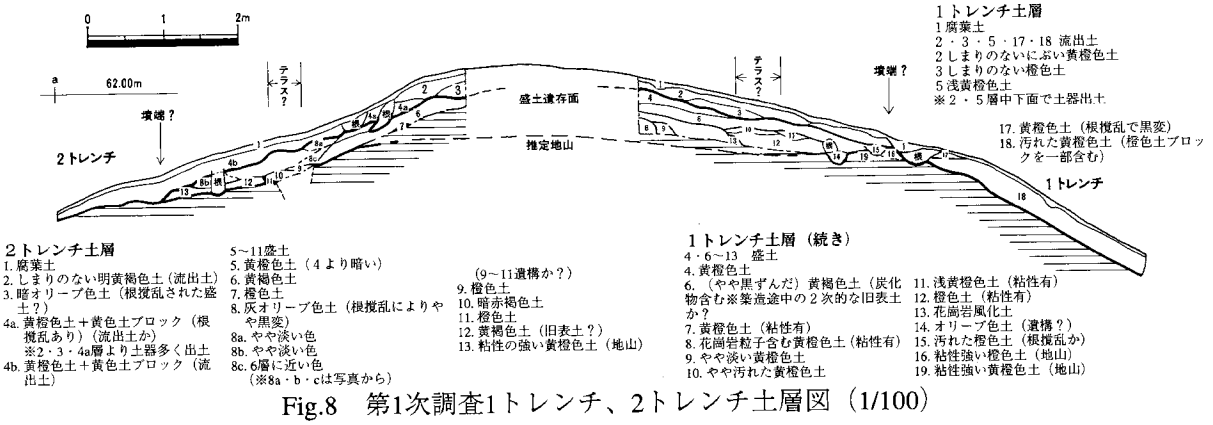


Fig7　第1次調査1区（1トレンチ)、2区（2トレンチ）平面図（1/200）

２　第１次調査の墳丘トレンチについての補足

第２次調査の墳丘トレンチの調査について記す前に、第１次調査の内容について若干触れておきたい。１次調査では、両くびれ部の検出を目的として、東側くびれ部に１トレンチ・１区が、西側くびれ部に２トレンチ・２区が設定・調査されている（Fig.7)。



2トレンチ土層
1. 腐葉土
2. しまりのない明黄褐色土（流出土）
3. 暗オリーブ色土（根撹乱された盛土？）
4a. 黄橙色土＋黄色土ブロック（根撹乱あり）（流出土か）
※2・3・4a層より土器多く出土
4b. 黄橙色土＋黄色土ブロック（流出土）
5～11盛土
5. 黄橙色土（４より暗い）
6. 黄褐色土
7. 橙色土
8. 灰オリーブ色土（根撹乱によりやや黒変）
8a. やや淡い色
8b. やや淡い色
8c. 6層に近い色
（※8a・b・cは写真から）
（9～11遺構か？）
9. 橙色土
10. 暗赤褐色土
11. 橙色土
12. 黄褐色土（旧表土？）
13. 粘性の強い黄橙色土（地山）

1トレンチ土層（続き）
4・6～13　盛土
4. 黄橙色土
6. （やや黒ずんだ）黄褐色土（炭化物含む※築造途中の２次的な旧表土か？
7. 黄橙色土（粘性有）
8. 花崗岩粒子含む黄橙色土（粘性有）
9. やや淡い黄橙色土
10. やや汚れた黄橙色土
11. 浅黄橙色土（粘性有）
12. 橙色土（粘性有）
13. 花崗岩風化土
14. オリーブ色土（遺構？）
15. 汚れた橙色土（根撹乱か）
16. 粘性強い橙色土（地山）
19. 粘性強い黄橙色土（地山）

1トレンチ土層
1. 腐葉土
2・3・5・17・18 流出土
2. しまりのないにぶい黄橙色土
3. しまりのない橙色土
5. 浅黄橙色土
※2・5層中下面で土器出土
17. 黄橙色土（根撹乱で黒変）
18. 汚れた黄橙色土（橙色土ブロックを一部含む）

Fig.8　第1次調査1トレンチ、2トレンチ土層図（1/100）

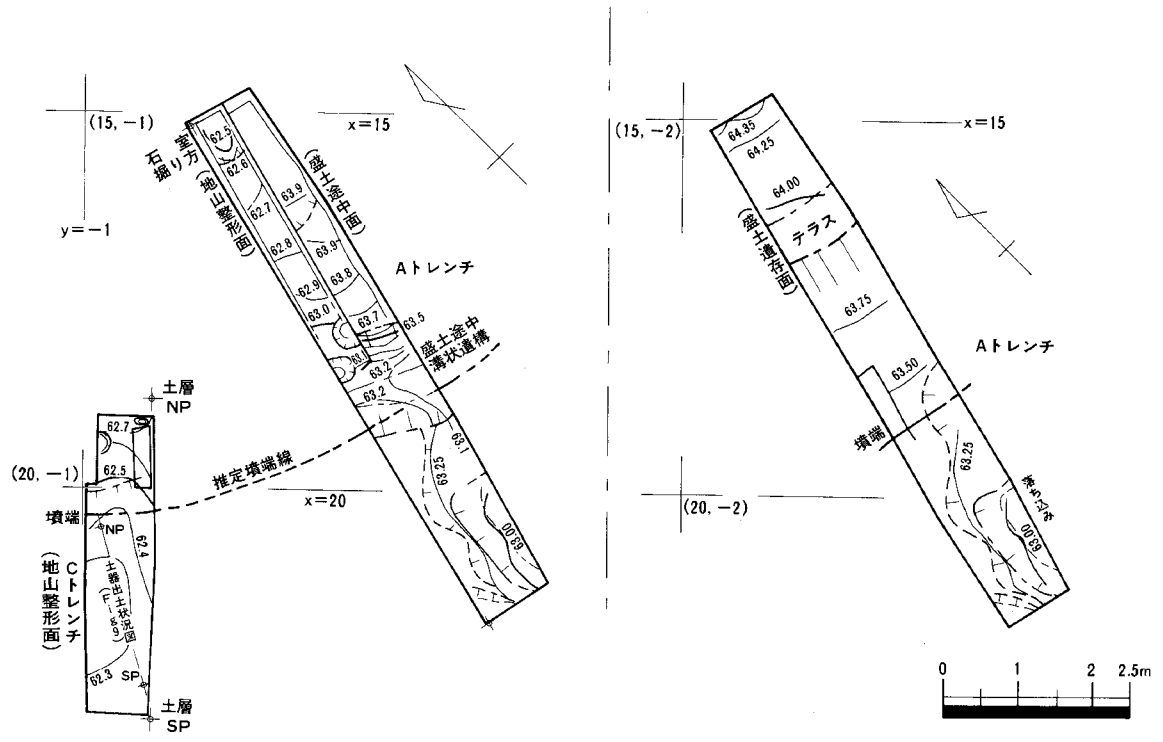


Fig.9　A・Cトレンチ平面図（1/100）

ところが、１次調査の報告書の記述に不備が見られ、また、２次調査の成果により、墳端や盛土の範囲に関して補足・修正する必要がある。平面図（Fig.7)は、撹乱の範囲を取り除いて等高線を表した。１区の調査面は、墳丘遺存面のようであるが、土層図（Fig.8)との対比から、若干掘りすぎが考えられ、一部推定復元等高線を補った。また１トレンチの等高線は地山整形面である。なお１区における墳端線は、報告書では樹木の痕跡で明瞭でないとするが、２次調査のＦ・Ｇトレンチの前方部隅角部との対比から、意外とそのまま残存していると判断できる。２区は、土層図との対比から（２トレンチ８層は盛土と判断する）墳丘遺存面を掘りすぎていると思われ、調査面の等高線は、盛土のある段階の面のものと考えられよう。墳端は、２トレンチの土層図から推定している。１次調査の報告書の墳端線では、今回のＤ・Ｅトレンチの結果と整合しない。なお、２区Ａの部分からは、２・３層にあたる層位から須恵器が多く出土し、前方部頂部平坦面でも後円部斜面裾部に置かれた一群の落下であろう。これは１区Ｃ（「墳頂部土器群」）・Ｄも同様か。一方、２区Ｂは後円部平坦面ないし墳頂部からの落下の可能性もある。

３　墳丘の調査（第２次調査）

(1) A・Cトレンチ (Fig.9)

Ａトレンチは、尾根上方との接続部分で、溝などの区画の有無を確認するべく設定した。また、半分を地山整形面まで掘り下げ、石室構築と盛土の過程を観察することも目的とした。Ｃトレンチは、墳丘の推定主軸上に設定し（樹木の関係で若干ずれている)、墳端を検出し、墳丘全長の確定を目的として調査した。

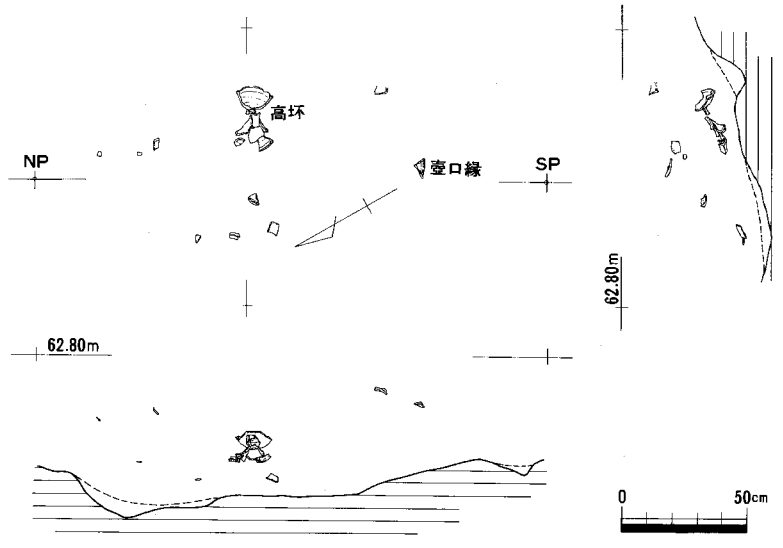
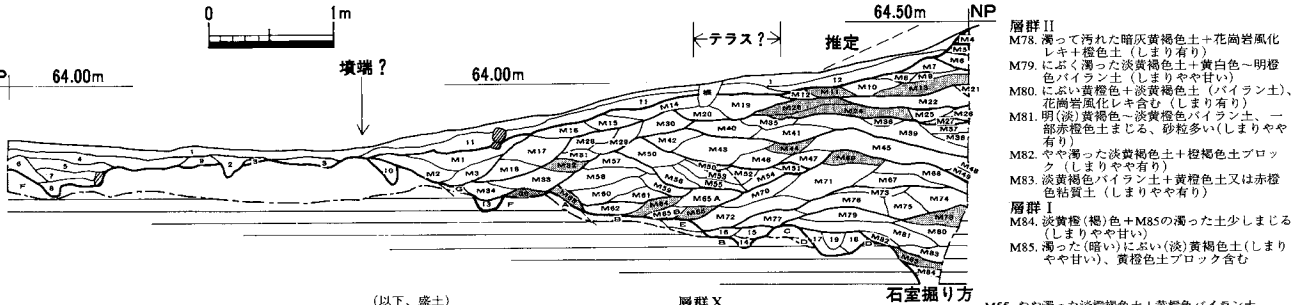


Fig.10　Cトレンチ土器出土状況図（1/30）



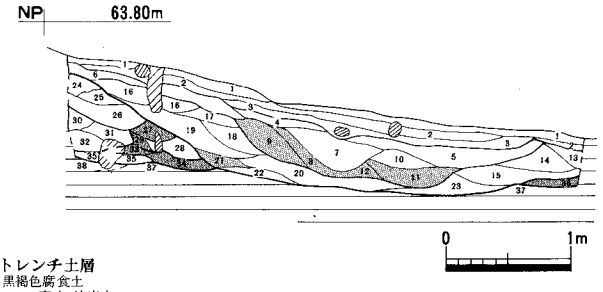
Aトレンチ土層
※M＝盛土
1～12 表土・流出土など
1. 黒褐色腐食土～暗褐灰色表土（しまりなし）
2. （根撹乱）にぶい暗黄橙灰褐色土（しまりなし）
3. 黄褐色土＋花崗岩風化土（バイラン土）（しまりなし）
4. 暗灰褐色土～暗黄（橙）灰褐色土（表土）（しまりなし）
5. 淡明黄褐色土（にぶい色）（しまりやや甘い）
6. 明黄（橙）褐色土（しまりやや有り）
7. にぶい黄（橙）褐色土、花崗岩粒子多い（しまりやや有り）
8. 地山の風化したにぶい黄橙褐色土（しまりやや有り）
9. 濁った黄橙褐色土(風化地山の表土化)（しまり甘い）
10. 濁ったにぶい明（赤）橙色土、やや灰色気味（しまりやや有り）（ビットか）
11. にぶい（やや暗い）黄橙褐色土(表土)（しまり甘い）
12. にぶい（やや暗い）黄（橙）褐色土（しまりやや甘い）（盛土の表土化か）（13，14～16，17～19ビット埋土）
13. 明るいがにぶい黄褐色土、花崗岩粒子多い（しまり甘い）
14. 地山B＋Dのブロック土（しまりやや有り）
15. 黄橙色土＋花崗岩風化粒子（砂粒）（しまりやや有り）
16. にぶい淡黄褐色土（しまりやや甘い）
17. やや白い（明）淡黄橙褐色土（しまりやや甘い）
18. 明（淡）橙褐色土（しまりやや甘い）
19. 少し濁ったにぶい淡黄橙色土（しまりやや甘い）
A～G 地山
A. 橙褐色粘質土
B. 黄橙色～黄白色風化岩盤（軟らかい岩盤）
C. 淡赤橙色～黄白色風化岩盤（軟らかい）
D. 赤橙色粘質土＋花崗岩風化レキブロック（黄白色）
E. 黄橙色バイラン土＋淡黄白色バイラン土
F. Bと同じ
G. 赤橙褐色粘質土＋花崗岩粒子（Dに近い）
20. 旧表土、地山F・Gの風化砂質土（しまり粘性あり）、やや濁る

（以下、盛土）
層群XIV
M1. にぶい明橙色～黄橙褐色土（しまりやや有り）
M2. にぶい（暗）黄橙褐色土（しまりやや有り～やや甘い）
M3. にぶい黄橙褐色土（しまりやや甘い）、花崗岩粒子やや多い
層群XIII
M4. にぶい（汚れた）暗橙褐色土＋黄橙褐色土ブロック（しまりやや有り）
M5. 淡明黄褐色土（しまりやや有り）
M6. 明黄橙褐色土（しまり有り）
M7. 濁ったややにぶい黄橙灰褐色土（しまり有り）
M8. 暗黄灰褐色～暗黄橙色土（しまり有り）
M9. やや濁った黄灰褐色～黄橙灰褐色土（しまり有り）
M10.（明）黄橙褐色土（バイラン土まじり）（しまりやや有り）
M11. 濁った黄灰褐色土＋淡黄橙褐色土（バイラン土多く含む）（しまりやや有り）（M12もバイラン土まじり）
M12. 濁ったにぶい黄灰褐色土＋明黄褐色土ブロック（しまりやや有り）
M13. 黄（灰）褐色～黄橙褐色土（しまりやや有り～やや甘い）
層群XII
M14. 明黄橙褐色土（しまり有り）
M15. にぶい（暗）橙褐色土、黄灰色土ブロック含む（しまりやや甘い）
M16. 黄褐色土（しまり有り）
M17. 黄橙褐色土（しまりやや有り）（M18とほぼ同じ）
M18. 黄褐色～黄橙色土（しまりやや有り）（M3よりやや明るい）
M19. 明黄橙褐色土（しまりやや有り）
M20. にぶい黄橙（灰）褐色土、砂粒（花崗岩粒子）多い（しまり有り）
層群XI
M21. にぶい黄（灰）褐色土（バイラン土まじり）、花崗岩風化レキ含む（しまりやや甘い）
M22. 明黄褐色土（バイラン土まじり）（しまりやあり～やや甘い）
M23. 明黄橙（灰）褐色土＋黄灰褐色土少し、砂粒多い（しまりややあり）
M24. やや濁ったにぶい黄褐色土、黄橙色土・黄灰色土含む（しまりやや甘い）
M25. ややにぶい（明）黄褐色土（しまり甘い）
M26. にぶい（明）黄橙褐色土、赤色土塊・花崗岩粒多い（しまりやや有り）
M27.（赤）橙褐色粘質土（しまりあり）＋黄灰褐色土（しまりやや甘い）

層群X
M28. にぶい橙色土（しまりやや甘い）
M29. にぶい（赤）橙褐色土＋淡橙色土（しまりやや有り～やや甘い）
M30.（淡）黄橙褐色土（しまりやや有り）
M31. にぶい橙褐色土（しまり甘い）
M32.（暗）褐色～（暗）橙褐色土（しまりやや有り）
M33. 黄橙褐色土（しまり有り）
M34. 明黄橙褐色土（しまり・粘性やや有り）
層群IX
M35. 明黄（橙）褐色土、花崗岩バイラン土・砂粒多く含む（しまり有り）
M36. 黄橙褐色土、花崗岩風化レキ・砂粒、赤橙色土塊含む（しまりやや有り）
M37. 明淡黄灰褐色土（淡灰色バイラン土多く粗い）（しまりやや甘い）炭粒あり
M38. 赤橙色粘質土＋明淡黄灰褐色土（バイラン土主体）（しまりやや有り）
M39. 淡明黄橙褐色土（バイラン土・砂粒主体）、淡橙色・黄灰色土含む（しまりやや有り）
M40. にぶい（淡）黄橙（褐）色土（しまり有り）
M41. にぶい淡橙褐色土（しまりやや有り）、花崗岩風化レキ含む
層群VIII
M42. にぶい明橙褐色土（バイラン土含む）（しまり有り）
M43. 明黄橙～にぶい（黄）橙色土（バイラン土塊）＋橙色土塊（しまりやや有り）
M44. やや濁ったにぶい（暗）橙褐色土（バイラン土含む）（しまりやや甘い）
M45. 明黄橙色土（バイラン砂質土）＋花崗岩風化レキ、赤色土塊（しまり有り）
M46. にぶい（明淡）黄橙色土（バイラン土含む）＋淡橙色土（しまりやや有り）
M47. 花崗岩風化レキ・バイラン土（黄白色）＋明黄橙色土（しまりやや有り）
M48. 灰白～浅黄灰褐色バイラン土＋明橙色土若干（しまりやや甘い）
M49. 明橙色土＋浅黄灰色バイラン土（しまりやや有り）
層群VII（M50～M56）
M50. やや濁る赤橙褐色土＋明橙色土若干（バイラン土含む）（しまり有り）
M51. にぶい明黄橙色土、花崗岩風化レキ含む（しまりやや甘い）
M52. にぶい黄橙色土（粗いバイラン土）＋花崗岩風化レキ、橙褐色土小塊含む
M53. にぶい淡（赤）橙褐色土（しまり有り）＋黄橙色バイラン土
M54. 黄橙～淡橙色バイラン土（しまりやや甘い）＋赤橙褐色土塊、花崗岩風化レキ
M55. やや濁った淡橙褐色土＋黄橙色バイラン土（しまり有り）
M56. 明淡橙褐色土＋黄橙褐色土（バイラン土含む）（しまりやや有り）
層群VI
M57. 明橙褐色土（しまりやや甘い）
M58. にぶい淡赤橙褐色土（しまり有り、粘性やや有り）炭粒含む
M59. やや濁った黄橙（灰）色バイラン土＋にぶい明橙褐色土（しまりやや有り）
M60. にぶい（赤）橙褐色土（粗いバイラン土多い）（しまり有り）
M61. 明橙（褐）色土（バイラン土若干含む）（しまり有り、粘性やや有り）
層群V
M62. 浅黄～浅黄橙色バイラン土＋橙色土若干（しまりやや有り）
M63. にぶい淡黄橙褐色～にぶい橙色土（しまりやや甘い）
M64. 濁ったにぶい（暗）黄橙灰褐色土＋黄橙色土（しまりやや有り）
M65A. にぶい黄橙褐色土＋にぶい橙色土（しまりやや有り）
M65B. 明黄橙色バイラン土（しまりやや甘い）＋橙色土小塊
M66. 少し濁った（暗）黄褐色～黄橙褐色土（しまりやや甘い）
層群IV
M67. 淡橙褐色土塊＋淡明黄橙色バイラン土（しまり有り）
M68. 淡黄灰褐色土＋明黄橙色土（バイラン土主体）（しまり有り）
M69. 濁ったにぶい（暗）淡黄橙灰褐色土（バイラン土多い）（しまりやや有り）
M70. 淡明黄橙色バイラン土＋淡黄橙色土塊、（しまり有り）炭粒あり
M71. にぶい（淡）黄橙（灰）色～淡黄褐色バイラン土（しまりやや有り）
M72. にぶい（淡）黄橙色～淡黄褐色バイラン土、橙色土塊若干（しまり有り）
層群III
M73. 赤橙色粘質土＋明黄橙色バイラン土（しまり有り、硬化面状）
M74. 淡明黄褐色（白っぽい）土＋明橙色土（バイラン土）（しまりやや有り）
M75. にぶい明黄橙～橙色土（バイラン土含む）＋赤橙色土塊（しまりやや有り）
M76. 濁った淡黄褐色バイラン土（レキ含む）＋赤色土塊若干（しまりやや有り）
M77. 明淡黄橙色～淡黄褐色バイラン土＋赤橙色土塊（しまり有り）

Fig.11　Aトレンチ西壁土層図（1/60）

Aトレンチは、表土除去直下で盛土遺存面が現れた（Fig.9右、PL.2-7)。尾根上方との間には、特に溝状の施設はなく、墳端から盛土が施されているのみと判断される。これをさらに確認するために、トレンチの墳丘部分をさらに掘り下げた。ある程度下げたところで、全体的にややしまった面が現れたが（盛土のある段階であろう)、この面で墳丘裾部付近に「周溝」状の断面が現れた（Fig.9左、PL.2-11)。この「周溝」は、調査時にはこれを墳端とする意見もあったが、この部分の「覆土」は腐食土層の流入がなく、盛土と同様のしまった土であり（Fig.11、M1～3層)、これを墳端とすると、より明確なCトレンチでの墳端検出位置と整合しないので、盛土の工程の1段階における画期と判断した。盛土工程の確認のために、さらにトレンチの西半分を縦に掘り下げ（PL.2-8)、地山面まで最終的に確認している。地山整形面は、旧表土がほとんど残らないので、尾根の斜面下方に向かって若干地下げしたようである。またトレンチ北端では、石室掘り方の一部と見られる落ち込みを検出している(PL.2-9)。Aトレンチにおける墳丘盛土は、土層工程がIからXIVまで分けられるが(Fig.11)、石室掘り方を埋めた後、石室構築段階に合わせ周囲に盛土し、石室構築後は周囲に土手（堤）状の盛土単位を築きながら、内部を埋め、平坦にし、さらに外側も



Cトレンチ土層
1. 黒褐色腐食土
2～23　表土・流出土
2. 暗黄灰褐色～暗（黄）褐色土（表土）（しまりなし）
3. 濁った黄橙（灰）褐色土（しまり甘い）
4. にぶい黄橙褐色土・暗褐色土まじり（しまりやや甘い）
5. 汚れて濁った橙灰褐色土（しまりやや甘い）（土器出土）
6. 濁った暗黄橙褐色土（しまり甘い）
7. 橙褐色土（しまりやや甘い）（土器出土）
8. やや濁ったにぶい黄橙褐色土（しまりやや甘い～やや有り）（土器出土）
9. 少し濁ったにぶい橙褐色土（しまりややあり）（土器出土）
10. やや濁った橙褐色土（しまりやや甘い）
11. 濁ったやや暗い（赤）橙褐色土（しまり甘い）
12. やや濁った橙褐（灰）色土（しまりやや甘い）
13. 濁った（汚れた）橙褐色土（黄橙灰褐色土）（しまり甘い）
14. やや赤い橙褐色土（しまりやや甘い）
15. 濁った（暗）橙褐色土、花崗岩粒子含む（しまりやや甘い）
16. 濁った（暗）橙褐色土（しまりやや甘い～やや有り）
17. やや濁った橙褐色土（しまりやや有り）
18.（明）橙褐色土（しまりやや甘い）
19. 少し濁ったにぶい（淡）橙褐色土（しまりやや甘い）
20. ややにぶい（明）黄橙褐色土（しまり甘い）（土器出土）
21. にぶい（暗）橙褐色土、炭粒含む（しまり甘い）
22. ややにぶい橙褐色土（しまり甘い）
23. 濁った暗橙褐色～暗褐色土、下部は花崗岩ブロックを含む（しまり甘い）
24～32　盛土
24. にぶい（暗）橙褐色土（しまり・粘性やや有り）
25.（やや明るい）橙褐色土（しまりやや有り）
26. 明橙褐色土（しまり有り・粘性やや有り）
27. 濁ったにぶい橙褐色土（しまり・粘性やや有り～やや甘い）
28. にぶい（赤）橙褐色土（しまりやや有り）
29. やや濁った暗橙褐色土（しまりやや甘い）
30. ややにぶい橙褐色土（しまり・粘性やや有り）
31. 暗（赤）橙褐色土（しまり・粘性やや有り）
32. にぶい橙褐色土（しまり有り、粘性やや甘い）（旧表土？）
33～36　旧表土・地山表層風化土層
33. にぶい橙褐色土・35層よりやや暗い（しまり有り・粘性ふつう）
34. 濁った（暗）橙褐色土（しまり有り・粘性甘い）
35. 明褐色～明橙褐色土、花崗岩ブロック粒子含む（しまりやや有り）
36. 濁った暗橙褐色土（しまりやや甘い）
37・38　地山
37. 花崗岩風化砂質土・風化岩一部粘質土
38. 花崗岩風化岩・砂＋赤褐色粘質土

Fig.12　Cトレンチ東壁土層図（1/60）

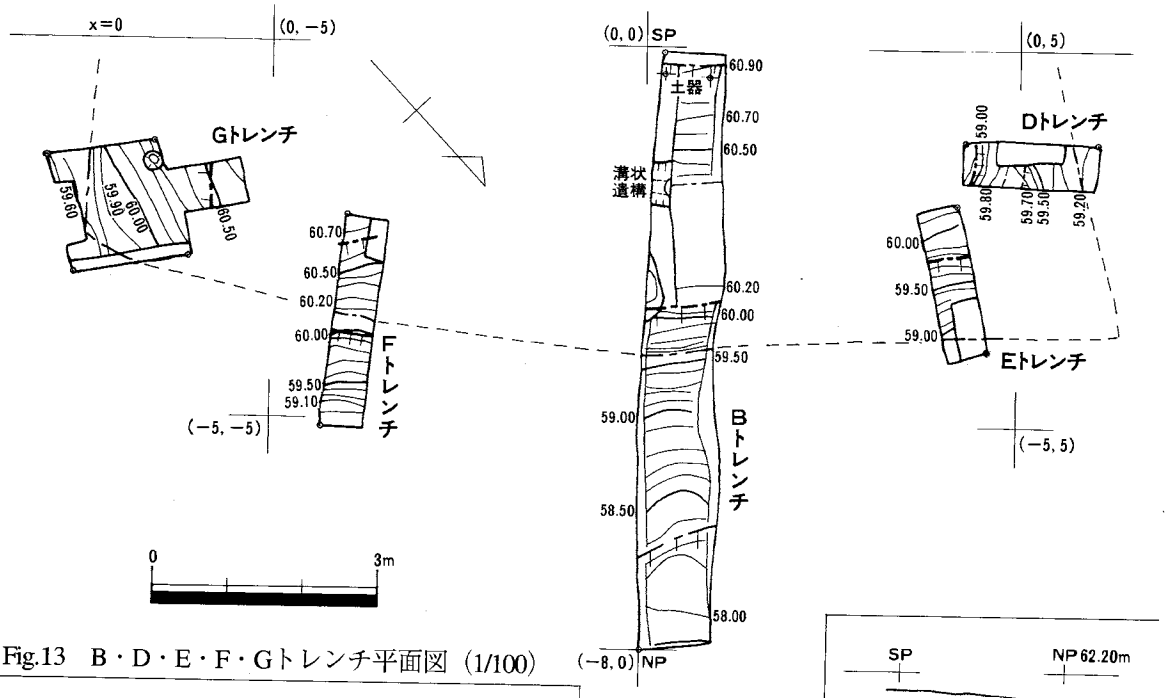


Fig.13　B・D・E・F・Gトレンチ平面図（1/100）

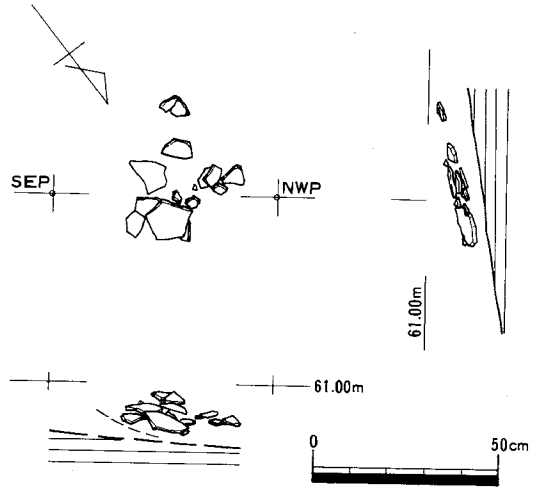


Fig.14　Bトレンチ土器出土状況図（1/20）

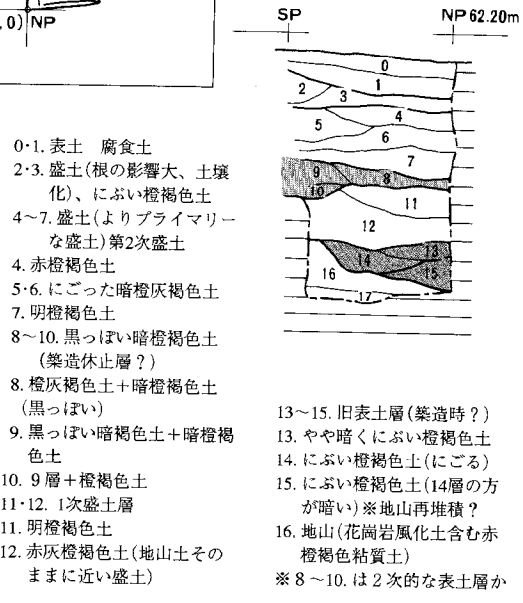


Fig.15　前方部中央落ち込み壁面土層図（1/40）

同様の工程を繰り返すものと観察される。なお最外縁は、先に見たように内側の盛土と外側の地山整形部で「溝状」にしつらえておいてからここを埋めたようである。盛土は下部では地山の花崗岩（バイラン土含む）混じりのものが多く、上部では橙褐色土を多く用いるが、層によっては旧表土起源と思われる汚れた褐色気味の土が入るものもある。なお、Aトレンチにおける墳端線の標高は、63.45m前後である。またAトレンチからは、表土・盛土中より数点の土師器細片と須恵器の甕破片1点が出土しているが、いずれも図化に堪えないものである。

Cトレンチは、掘削途中では流出（堆積）土と盛土の区別が困難であったので、地山整形面まで下げている（Fig. 9左、PL.3-12)。トレンチの中部から南側にかけて、地山面から若干浮いて、高坏1点と、壷の口縁片及び細片からなる須恵器の一群が出土した（Fig.10、PL.3-13)。本トレンチにおける墳端推定線は、トレンチ北壁から1.8m前後南の部分である。地山整形面も若干上向くが、土層の観察では、この部分より旧表土が北側墳丘下部に残り、旧表土の上に盛土が施されている（Fig.12、PL.3-14)。墳端部の裾部には、築造後まもない時期の腐食土を含む堆積土層（21層）がある。なお墳

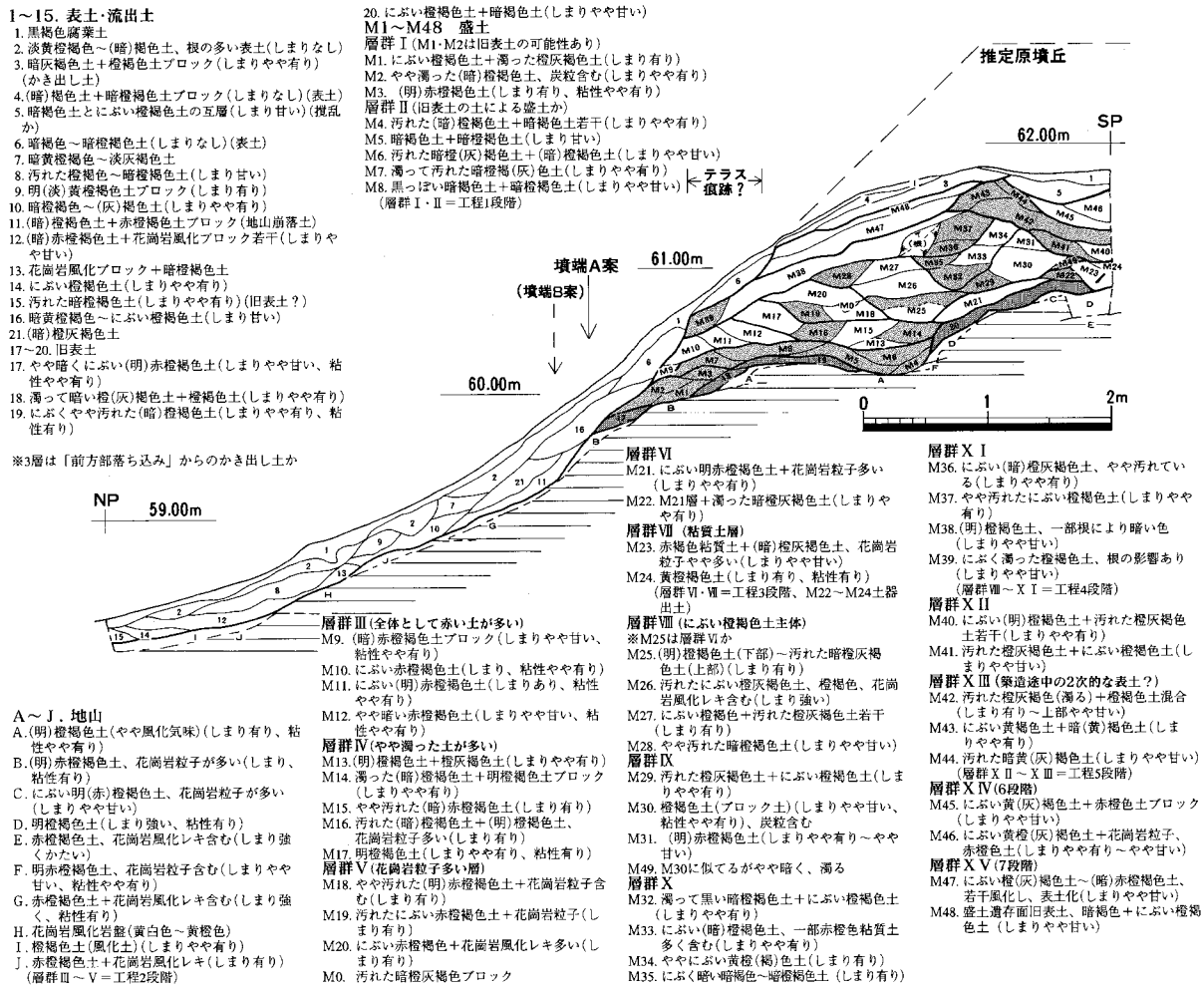


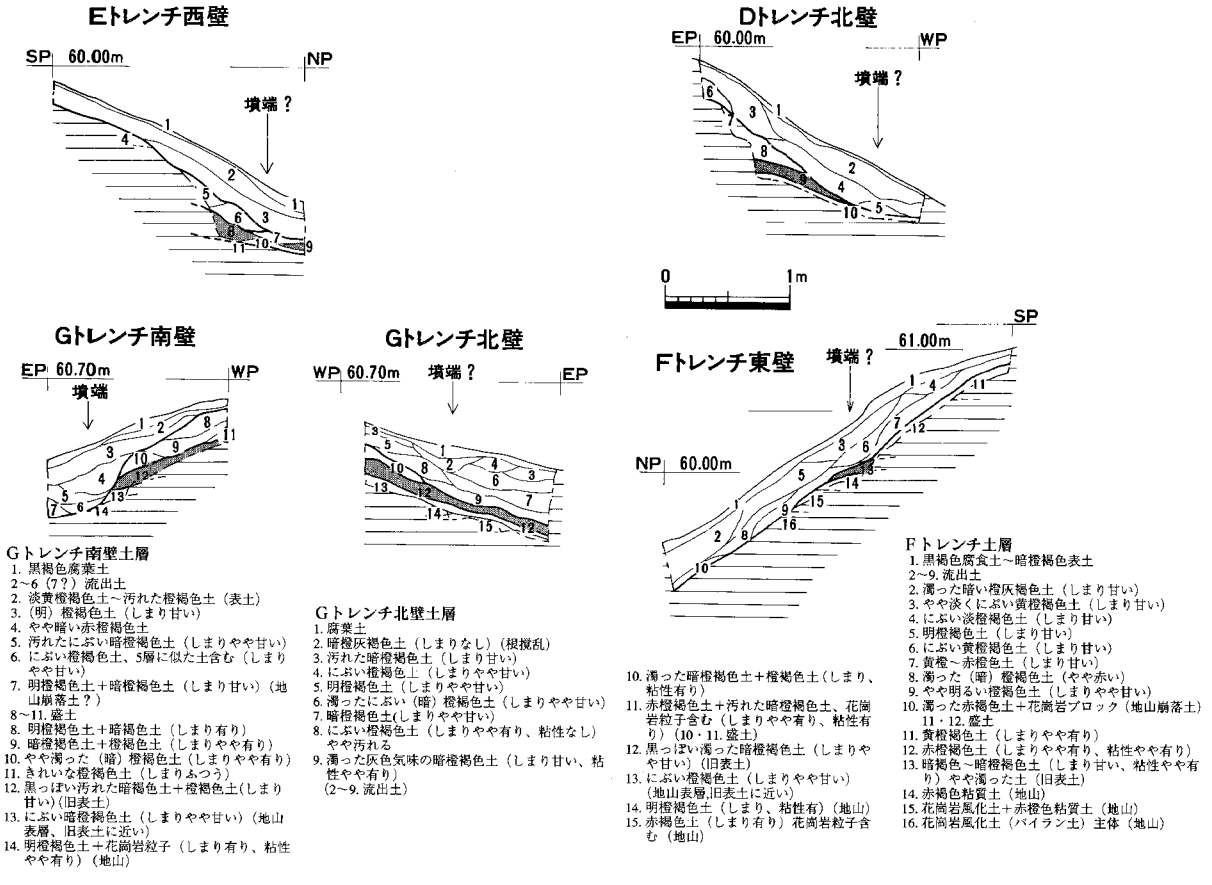
Fig.16　Bトレンチ東壁土層図（1/60）

端線の標高は、62.65m前後である。墳丘の外側は、現在の地形から予想されるように、幅広い溝状の凹みに地山整形してあったと考えられ、地山面には雨が流れたような細かい溝状の凹凸が見られ、一時期風雨にさらされたのだろう。土層の観察からは、この溝状部分は墳丘側からだけでなく、南側の尾根上方からも土が堆積流入している。なおこの幅の広い溝状の地山整形部分は、現況地形も含めて判断すると、尾根頂部をはさんで後円部南側裾部東西にあるが、尾根頂部のＡトレンチのある部分に向かって細くなり、Ａトレンチ前後ではこれがなくなり一見陸橋状を呈するようになると考えられる。なお、Ａトレンチで検出された墳端と、石室をはさんで対角である２区の墳端推定線との間の距離から得られる後円部の径は、約17ｍを測ることになる。

（２）Ｂトレンチ（Ｆｉｇ．13、PL.15～21）

Ｂトレンチは、前方部中央における墳端の決定と、前方部の構築過程を観察する目的で設定・調査した。現状地形から、前方部北側上部は墳丘の流出が大きいと予想され、墳丘盛土遺存面での調査はあまり意味がないと判断し、地山整形面まで掘り下げている（PL.3-15)。

現状地形（Fig.4)においては、前方部の墳端らしき傾斜変化線は、かなり下方の標高58.5m前後にあるが、これは前方部側縁の推定線とレベル的に全く整合せず、妥当でない。Ｂトレンチの調査の結果、築造前の旧表土が残り、盛土が始まる墳端推定部分は、トレンチの中位で確認された（Fig.16の墳端Ａ案、PL.3-17)。ただし下方の地山斜面の状況から、墳端の流失が考えられ、その場合、墳端の痕跡と考えうる傾斜変化点は、やや外側の箇所になる（Fig.16の墳端Ｂ案)。しかし、Ｄ～Ｇトレンチで検出した墳端線からは、前者のほうがより整合する。また、以下に記述するＤ～Ｇトレンチでは、トレンチの上部に平坦面部分を推定できるが、これに対応する可能性のある部分が土層断面において観察できる（Fig.16の６層の下部)。平坦面自体は流失し緩斜面となっており、判断はやや苦しく、可能性を提示するにとどめる。なお、墳端の標高はＡ案では59.70m、Ｂ案では59.35m前後である。



Gトレンチ南壁土層
1. 黒褐色腐葉土
2～6（7？）流出土
2. 淡黄橙褐色土～汚れた橙褐色土（表土）
3.（明）橙褐色土（しまり甘い）
4. やや暗い赤橙褐色土
5. 汚れたにぶい暗橙褐色土（しまりやや甘い）
6. にぶい橙褐色土、5層に似た土含む（しまりやや甘い）
7. 明橙褐色土＋暗橙褐色土（しまり甘い）（地山崩落土？）
8～11. 盛土
8. 明橙褐色土＋暗褐色土（しまり有り）
9. 暗橙褐色土＋橙褐色土（しまりやや有り）
10. やや濁った（暗）橙褐色土（しまりやや有り）
11. きれいな橙褐色土（しまりふつう）
12. 黒っぽい汚れた暗褐色土＋橙褐色土（しまり甘い）（旧表土）
13. にぶい暗橙褐色土（しまりやや甘い）（地山表層、旧表土に近い）
14. 明橙褐色土＋花崗岩粒子（しまり有り、粘性やや有り）（地山）

Gトレンチ北壁土層
1. 腐葉土
2. 暗橙灰褐色土（しまりなし）（根撹乱）
3. 汚れた暗橙褐色土（しまり甘い）
4. にぶい橙褐色土（しまりやや甘い）
5. 明橙褐色土（しまりやや甘い）
6. 濁ったにぶい（暗）橙褐色土（しまりやや甘い）
7. 暗橙褐色土（しまりやや甘い）
8. にぶい橙褐色土（しまりやや有り、粘性なし）やや汚れる
9. 濁った灰色気味の暗橙褐色土（しまり甘い、粘性やや有り）（2～9. 流出土）

Fトレンチ土層
1. 黒褐色腐食土～暗橙褐色表土
2～9. 流出土
2. 濁った暗い橙灰褐色土（しまり甘い）
3. やや淡くにぶい黄橙褐色土（しまり甘い）
4. にぶい淡橙褐色土（しまり甘い）
5. 明橙褐色土（しまり甘い）
6. にぶい黄橙褐色土（しまり甘い）
7. 黄橙～赤橙色土（しまり甘い）
8. 濁った（暗）橙褐色土（やや赤い）
9. やや明るい橙褐色土（しまりやや甘い）
10. 濁った赤褐色土＋花崗岩ブロック（地山崩落土）
11・12. 盛土
11. 黄橙褐色土（しまりやや有り）
12. 赤橙褐色土（しまりやや有り、粘性やや有り）
13. 暗褐色～暗橙褐色土（しまり甘い、粘性やや有り）やや濁った土（旧表土）
14. 赤褐色粘質土（地山）
15. 花崗岩風化土＋赤橙色粘質土（地山）
16. 花崗岩風化土（パイラン土）主体（地山）

10. 濁った暗橙褐色土＋橙褐色土（しまり、粘性有り）
11. 赤橙褐色土＋汚れた暗橙褐色土、花崗岩粒子含む（しまりやや有り、粘性有り）（10・11. 盛土）
12. 黒っぽい濁った暗橙褐色土（しまりやや甘い）（旧表土）
13. にぶい橙褐色土（しまりやや甘い）（地山表層、旧表土に近い）
14. 明橙褐色土（しまり、粘性有）（地山）
15. 赤褐色土（しまり有り）花崗岩粒子含む（地山）

Fig.17　D・E・F・Gトレンチ土層図（1/60）

Bトレンチの掘削は地山整形面までとしたが、正確には、トレンチ上半では東壁際のみ縦断して地山面まで検出し、他は一部旧表土面、または旧表土の直上の盛土層群Ⅱの面まで掘削した（Fig.15・16参照、なおトレンチ下半の墳丘外は地山面まで掘削）。したがって、平面図の等高線はこの面のものである。盛土層群Ⅱは、旧表土に類似した濁った土であったが、他の土層との関係から盛土と判断され、地山整形面途中でトレンチを横断するように検出された「溝状遺構」の埋土にもなっている(PL.4-21)。墳端との関係は異なるが、Aトレンチの「溝状遺構」と同様に、墳丘築造上注目される。

さて壁面の土層の観察からは（Fig.16、巻頭図版1-3)、Bトレンチ内の盛土の土層は14段階（Ⅰ～XIV層群）に分かれ、工程的には6段階が想定できる。後円部の場合は、石室構築と対応して墳丘の内側の盛土を施してから後に、墳丘外縁から盛土してゆく工程を、Aトレンチの観察から推定した。対して前方部の場合は、Bトレンチの観察から、まず外側から土手状に盛土し、内側を埋めて一端平坦とし、またその上に土手状に盛土し、内側を埋め平坦にする、という工程が連続して行われた模様である。中にはその工程の途中で、前の盛土の一部を溝状に掘り込んだように見える土層もある(Fig.16、M32層など)。またこうした工程の途中で、一定期間築造を休止したのではないかと思える部分がある。これは層群XIII段階（M40～M44層）の部分で、土層が全体に濁って汚れたような状況で帯状に続くのがそれにあたり、一つの解釈として築造を休止した間に腐食土層化（表土化）した可能性が考えられる。実はこれに対応する層を、前方部中央の「落ち込み」の土層でも確認している(Fig.15、８～10層、PL.4-22)。これらの層群を表土化したものとすれば、少なくとも前方部の築造は一次休止があると解釈できる。もちろん前方部は、その上部の墳丘が流失しており、より上の層との関係においてこれを明らかにすることができないが、その可能性を提示しておきたい。

Bトレンチでは、若干の遺物が出土した。特に、トレンチ最上部（南端）では、地山整形面直上ないし旧表土中で須恵器の横瓶（甕？）が出土しており（Fig.14、PL.4-19･20)、古墳築造開始に伴う祭祀

の可能性がある。その他、盛土中や流失土中より須恵器の細片が出土している。

（3）D・Eトレンチ（Fig.13、PL.23～25）

D・Eトレンチは、前方部の西側隅角（コーナー）部を検出する目的で、Bトレンチおよび2区の調査結果や、現状の地形から隅角部を予想して設定した。ただし、樹木の制約などがあり、想定した隅角部自体には設定できていない（PL.5-25)。Dトレンチは隅角部に近い、前方部西側側縁線を検出する目的で設定した。トレンチの中位下方で、築造以前の旧表土が途切れる地山の傾斜変換部分を検出し、これが墳端に相当すると考えられる（Fig.17右上参照)。このすぐ上より盛土を施している。この部分の標高は、59.35m前後である。また、トレンチ上部では墳丘遺存面の傾斜が緩くなり、あるいは平坦面の痕跡とも考えられよう。なおDトレンチからは、土師器の甕破片を1点出土している。

Eトレンチは、西側隅角部近くの前方部前端線を検出する目的で、推定隅角部をはさんでDトレンチの東側に設定した。トレンチの下方で、旧表土面が薄くなり傾斜が変換する部分が検出された(Fig.17左上参照) 。この部分より盛土が施され、ここが墳端に相当すると考えられる。標高は59.10m前後を測る。ただし、旧表土と思われる層がさらに下方に続き、盛土は無いが、地山整形の墳端部分が、トレンチのさらに外の下方に位置する可能性もある。これは後述するように、墳形を前方部剣菱形と見るか、片直角形状と見るかということにもかかわるが、今回の調査では必ずしも明らかにすることができなかった。しかし墳丘現状の表面観察では、この部分を墳端として、Dトレンチのそれと繋げるのがもっとも妥当であると考える。またこれが墳端ではないとしても何らかの変換線であり、その場合は平坦面をなすものと考える。またトレンチ上部は緩やかな傾斜となり、Dトレンチと同様に平坦面の痕跡かもしれない。なおEトレンチからは、須恵器の甕の胴部破片をわずかに出土した。

（4）F・Gトレンチ（Fig.13、PL.26～30）

F・Gトレンチは、前方部の東側隅角部を検出する目的で、Bトレンチおよび1区の調査結果や、現状の地形から隅角部を予想して設定した。当初は、樹木の関係から想定隅角部自体には調査区を設定できていないと考えていたが、結果的にはGトレンチで検出している。Fトレンチは、東側隅角部近くの前方部前端線を検出する目的で設定した。トレンチの中位で、旧表土が途切れる地山の傾斜変換部分が検出され、これが墳端になると考えられ、標高は60.05m前後を測る（Fig.17右下参照)。このすぐ上より、盛土が施されている。なお、この墳端と思われる部分のやや下からは急斜面になっているが、本来のものではないだろう。Bトレンチのこれに相当する部分も同様で、現在の地形を反映しており、後世の植林などによるものであろうか。また、Fトレンチ上方の墳丘遺存面は傾斜が緩く、平坦面の痕跡とも考えられる。Fトレンチからは、土師器の微細片が出土したのみである。

Gトレンチは、本来は隅角部近くの東側側縁線を検出する目的で設定したが、トレンチ東端で地山整形の隅角部を検出した(PL.5-28) 。地山整形のみの墳端であり、不確かさは残るが、トレンチ南壁と北壁の土層を検討すると（Fig.17左下・中下)、墳端と考えられる傾斜変換部分が対応して見いだされるので、平面的な判断も大略正しいであろう。いずれもそのすぐ上から盛土が施されている。ただし北壁土層では（PL.6-30)、旧表土と判断される層（12層）がさらに下方に続き、Eトレンチの場合と同様に、トレンチのやや外に真の墳端がある可能性もある。しかしその場合、F・Bトレンチの推定墳端線とやや齟齬をきたすことになる。南壁土層では (PL.6-29)、墳端はより明瞭であり、その7層（Fig.17左下) が地山とすれば、側縁線は溝状に画されていたことになる。このラインは、1区の調査による墳端線とスムースに対応する。なお墳端線の標高は59.65mから59.80m前後を測り、後円部側に向かって微妙に高くなる。またトレンチ西側の墳丘遺存面の傾斜は緩く、D～Fトレンチと同様に平坦面の痕跡であろう。Gトレンチからは、須恵器の甕の破片数点と土師器の小片が出土した。

4　石室羨道・墓道の調査

（1）石室羨道部の調査（Fig.18）

飯氏Ｂ－14号墳は単室両袖の横穴式石室を内部主体とする。第１次調査では調査期間の制約から、横穴式石室の玄室部分のみ床面まで検出し、羨道部については床面未検出で終わってしまった。そのため第２次調査では、羨道部を清掃して床面を検出することが一つの目的であった。以下、羨道について記すが、玄室については第１次報告を参照されたい。

羨道は、両側壁ともに玄門側（ここで玄門とは単に玄室の「門」の意味で、立柱石材の「玄門」は無い）約半分に、高さ60～70cm、長さ２ｍ強の大きな横長の腰石を用いる。この石は羨門に向かって上面が下降する。左右の側壁で積み石の状況が異なるので、以下別に説明する。

左側壁の腰石は、羨門側にさらに２石が用いられる。最後の１石は小振りで、この上により大きな高さ60cm、長さ１ｍ強の塊石が積まれる（Fig.18、Ａの部分)。ここにはもともと天井石が無かったと考えられ、厳密には前庭側壁である。２段目以降は、玄門側では高さ60～80cm、長さ 130cm強の大きな石を載せ、この上に高さ15～25cmの転石を積み、小石を充填して天井石（冠石）を架構する。羨門側半分では、高さ25～50cm、長さ50～80cmの転石を３段ないし４段に積み、間に小石を充填して天井石を載せる。玄室側壁に比し積み方が乱雑であるが、羨道右側壁に比べれば目路は通っている。

右側壁の腰石は、羨門側半分では急に小振りな高さ30cm程度の石となる。さらに羨門側は、未掘部分を残したため（Fig.18、Ｃの部分の下方)、不明確であるが、小振りな腰石を並べたままＢの部分の奥に検出した前庭側壁に至ると考えられる。この上の２段目以降の積み石は、高さ20～40cm、長さ30～70cmの転石ないし塊石をやや乱雑に積み上げ、小石の充填が目立つ。目路は下部ではやや斜めで乱雑であり、玄門側の２段目の転石に対応する高さから、不十分ながら目路を通し、さらに転石・塊石を横に積み、この上に天井石を架構する。なお羨門側天井石の直下では、積石が抜けている部分があり、後世の乱掘の影響と思われるが、Fig.18のＣの部分との関連で、追葬時に崩れた可能性もあろう。羨道床面やや上で検出した落下石材は（PL.6-31)、この右側壁部分の積石の崩落かもしれない。一方、これと対称になる左側壁の天井石直下も抜けている部分があるので、ここの積石であった可能性もある。また羨門付近から前庭右側壁は、追葬時の構築の可能性もある前述のFig.18のＣの部分と（調査時は、これを羨道右側壁が崩落してせり出したものと判断しており、安全のため最後まで取り外さなかった)、後述する追葬時の構築と思われる石列（墓道側壁）に阻まれ、未掘部分を残し、その検出が不十分になってしまった。なお閉塞石については墓道の説明の箇所で後述する。

羨道部の天井石は３石で構成されているが、先に前庭側壁としたFig.18のＡとＢの部分は２段目までしか積石が存在せず、天井石が元来なかったものと判断する。

羨道床面には、玄門部の梱石（第２仕切石）と羨道中央の第１仕切石があり、この間と第１仕切り石の前面に若干の敷石が検出された（PL.6-32)。梱石は、横90cm×幅15～25cmの細長い石１石で、玄室床面からの高さは20cm前後と低いものである。第１仕切石は、２石からなり、横70cm×幅25cmのものと、横30cm×幅20cmのものからなる。羨道床面からの高さは12cm程度しかない。敷石は、いずれも花崗岩の小塊石である。羨道の埋土の最下部は、プライマリーな堆積土と思われたので、敷石が部分的にしか存在しないのは、当初からのものか、もしくは追葬時における片づけかどちらかであろう。羨道の埋土からは、第１仕切石の前面に、床面から15～20cmほど浮いて、約40cm×100cm、厚さ20cm前後の縦長の台形の石材が検出されたが（「落下石材」)、すでに触れたように羨道側壁上部の石材であった可能性が高い。出土レベルは床面に近く、層位はプライマリーな土である可能性が高かった。とすれば、追葬時までに側壁（特に右側壁）が一部崩れた可能性がある。

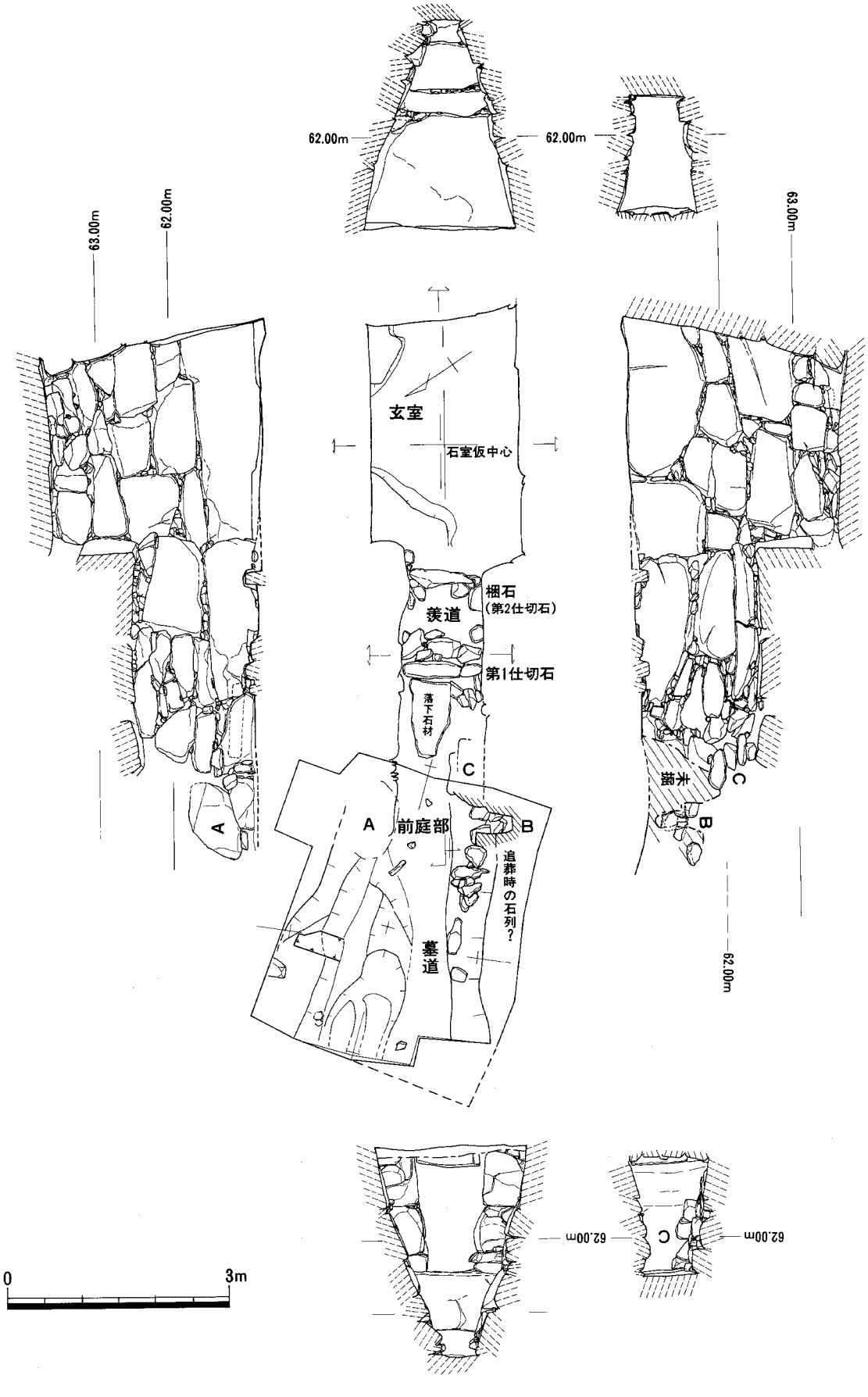


Fig.18　石室・墓道実測図（1/80）

羨道床面は、玄門部では、梱石をはさんで玄室床面より 5cm前後高くなり、羨門に向かって水平に近いもののわずかながらレベルを上げている。このまま前庭部まで平坦に近いが、墓道移行部分で緩斜面となる。なお羨道床面の標高は、玄門付近で60.85m、羨門付近で60.90m前後を測る。また玄室床面は、１次調査において玄門に近い部分がやや掘り足らず、羨道床面とは梱石をはさんでやや段落ちする。その標高は、奥壁下で60.70m、玄門部で60.80mとなる。

今回の羨道部の調査により、石室の計測値に関してより正確な値が得られたので、玄室部分を含めて以下に列記しておく。石室全長は、前庭側壁とした部分まで含めると、右側壁では約7.3m（未掘部分を残し不確定)、左側壁では7.3mを測り、前庭を除いた天井石のある羨道部までの全長は約6.2mとなる。玄室の奥壁幅は2.0m、右側壁長3.34m、左側壁長2.92m、袖部幅は2.02m を測る。玄室の長幅比は右壁で1.67:1、左壁で1.46:1を測る。玄室床面から天井までの高さは 2.8～3.0mを測り、冠石までの高さは 1.65mを測る。羨道の長さは、前庭側壁を含めて、右側壁では3.7m＋α、左側壁は4.36m を測り、前庭部を含まない場合は、右側壁で約3.0m、左側壁では 3.25mを測る。羨道の高さは、梱石手前で1.7m、第１仕切石手前で1.6m、羨門付近で 1.55mを測る。また石室の主軸は、N（磁北）－56°－Wで北西に開口し、古墳の推定主軸とは約73°東に傾いている。

羨道の埋土からは土師器の小破片がやや目立って出土した。さらに埋土を細かく砕いて精査し、鉄製品（鏃・刀子）の破片を少数検出した。また前庭埋土からは、須恵器・土師器の破片が出土した。

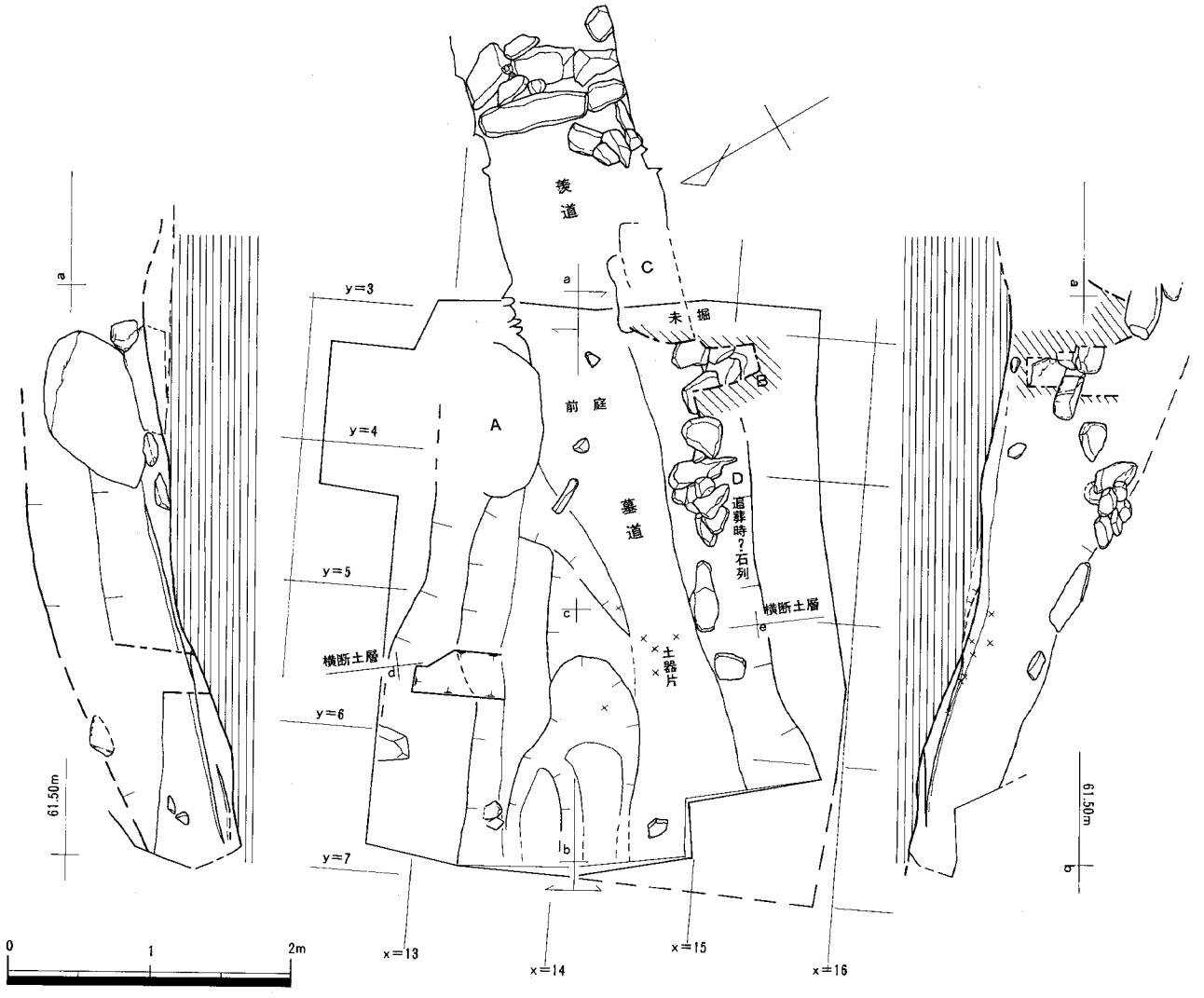


Fig.19　墓道実測図（完掘時）(1/50)　※右壁の石列は追葬時のものと思われ、完掘時には無い

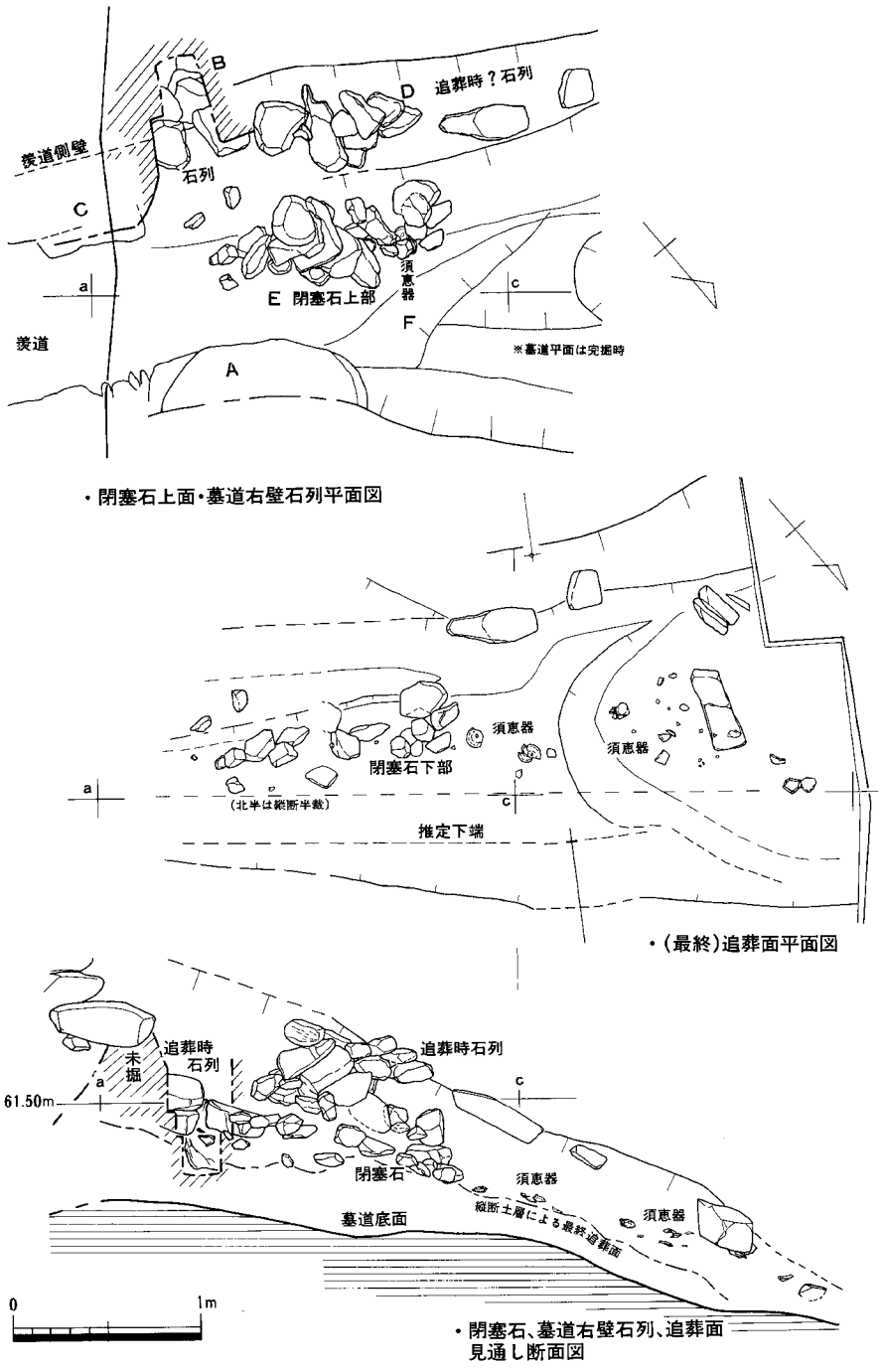
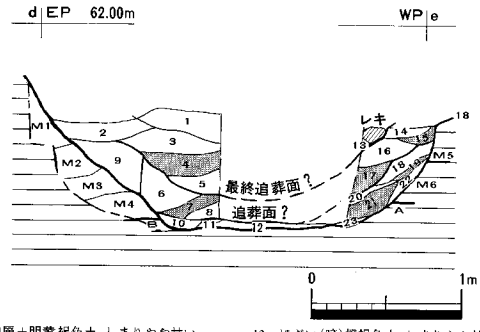


Fig.20　閉塞石・墓道右壁石列平面図（上段）、追葬面平面図（中段）、閉塞石・石列・追葬面見通し断面図（下段）（全て1/40）

（2）墓道部の調査

今回の調査では、石室羨道の精査とともに、石室前庭部から墓道にかけての状況を把握することが目的とされた。墓道の落ち込みは、石室前面の墳丘斜面の表土を下げたところで検出した（PL .2-5）。墓道の残存状況は、開口していた石室入口部（羨門）付近では、特にその中央から左半分にかけては盗掘などにより撹乱されており、閉塞石などは残っていなかった。しかし後述するように、右半分については撹乱を免れ、閉塞石が一部残存していた。

墓道の掘削土量は思いのほか多く、またその壁面の立ち上がりが分かりにくかったので、調査の進行があまりはかどらなかった。これは、墓道の壁面が、床面近くから盛土で構築されていたため（Fig.21参照）、埋土との区別が困難であったことと、追葬面が存在し、一部これを掘り過ごしたり、逆にこれを最終面として止めてしまったりしたためである。しかし、墓道には縦横に土層を検討しながら調査したので（Fig.21･22）、分かりにくいながらも最終的にはつじつまを合わせることができた。完掘された墓道は（Fig.19）、羨道から連結する前庭側壁から広がり、墳丘裾部に向かって下降してゆく（PL.7-35）。底面は途中でゆるい段が認められる。墓道底面の標高は、墳丘裾部に近い調査区北側で60.30m、石室前庭部で61.00m、墓道中位付近の平坦部分で60.80mを測る。墓道の平面プランは墳丘裾部に向かって広がり、裾部まで完全に調査できなかったが、おそらくそのまま広がって墳丘裾部ラインに接続するものと考えられる（Fig.35参照）。墓道の掘り方は、すでに述べたように大半が盛



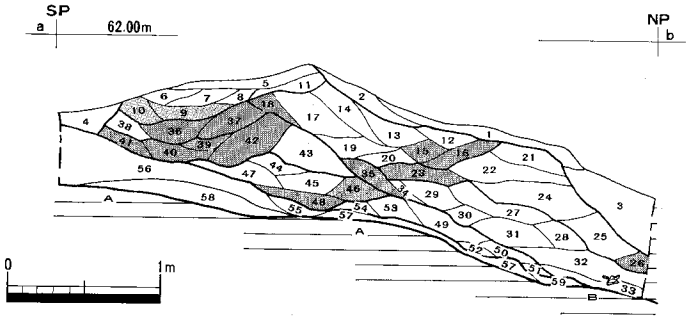
5．4層＋明黄褐色土、しまりやや甘い
6．暗黄褐色土、しまり・粘性やや有り、炭粒有り
7．汚れた暗褐色土＋黄褐色土、しまりやや甘い
8．黄褐色土＋汚れた暗黄褐色土、しまりやや有り
9．黄褐色土（～黄橙褐色土）しまりやや有り
10．暗黄褐色土、少礫・パイラン土含む・しまりやや有り
11．花崗岩風化土＋暗黄褐色土
12．花崗岩風化土＋暗黄褐色土＋赤褐色土

※ M1～M6は盛土
M1 黄褐色土、小礫含む
M2 黄褐色土＋汚れた褐色土
M3 暗褐色土＋暗黄褐色土＋黄褐色土
M4 黄褐色土＋暗黄褐色土
M5（明）橙褐色土、礫含む
M6 暗褐色土＋にぶい橙褐色土

13．にぶい（暗）橙褐色土、しまりやや甘い（石列埋土）
14．赤橙褐色土、少し粘性、しまり有り
15．やや濁ったにぶい橙褐色土、しまりやや甘い
16．暗橙褐色土、少礫含む、しまりやや有り
17．暗赤橙褐色～暗褐色土、しまりやや有り
18．暗褐色土＋にぶい橙褐色土、しまり有り
19．暗褐色土＋暗赤橙褐色土、しまり有り
20．にぶい赤橙褐色土、しまりやや有り
21．暗（赤橙）褐色土、しまりやや甘い、少し粘性
22．21層＋にぶい橙褐色土ブロック、しまり有り
23．（暗）橙褐色土、しまり甘い

A やや濁った（赤）褐色土（旧表土）
B 花崗岩風化土＋赤褐色土（地山）

Fig.21　墓道横断土層図（1/50）



1．黄（橙）褐色土、やや濁った色、しまりやや有り
2．明黄褐（褐）色土、しまりやや甘い
3．橙褐色土（上半が暗い）、根の影響大、しまり甘い
4．明橙褐色土、砂粒含む、しまり有り～やや甘い
5．ややくすんだ（暗）黄橙褐色土、しまり有り
6．暗褐色土～暗橙褐色土、灰褐色土塊含む
7．暗褐色土＋橙褐色土、しまりやや有り
8．暗橙褐色土、6より明るい、少し粘性、均質
9．暗橙褐色土、しまりやや甘い～やや有り、少し粘性
10．暗褐色土＋橙褐色土、炭散あり、しまり甘い
11．ややくすんだ暗橙褐色土、しまりやや甘い
12．やや暗い黄橙褐色土、灰褐色土塊含むしまり甘い
13．（明）橙褐色土、しまりやや有り
14．ややくすんだ橙褐色土、しまりやや甘い
15．橙～黄橙褐色土、14層に似る、しまりやや甘い
16．ややくすんだ橙褐色土、暗灰色土塊含む、しまりやや甘い
17．やや赤い明橙褐色土、しまり・粘性やや有り
18．暗橙褐色土、くすんだ（汚れた）色、しまりやや甘い
19．褐色～暗橙褐色土、しまりやや甘い、粘性やや有り
20．橙褐色土、やや明るい色、しまりやや甘い
21．やや暗い橙褐色土、しまりやや甘い
22．明黄橙褐色土、しまり有り
23．（暗）橙褐色土～褐色土、しまりやや有り～やや甘い
24．赤味ある明褐色土、しまり・粘性やや有り
25．やや赤い（明）橙褐色土、しまり甘い、根の影響有り
26．やや暗い橙褐色土、根の影響大、しまり甘い
27．（明）橙褐色土、しまりやや有り～やや甘い、粘性やや有り
28．明（赤）橙褐色ブロック土、しまりやや有り
29．暗橙褐色土＋橙褐色土塊、しまり有り
30．暗褐色～暗橙褐色土、しまりやや有り、少し粘性
31．橙褐色土～暗橙褐色土、しまりやや甘い、少し粘性
32．（暗）橙褐色～褐色土、しまりやや甘い、下層に遺物
33．暗橙褐色～暗褐色土、しまり・粘性有り、遺物有り
34．橙褐色～褐色土、しまりやや甘い
35．暗褐色土と橙褐色土の混合、しまり甘い
36．黒っぽい暗褐色土＋暗橙褐色土塊、しまり甘い
37．黒っぽい暗褐色土＋暗褐色土、しまり・粘性やや有り
38．暗（橙）褐色土、橙褐色土塊含む、しまりやや甘い
39．黄橙褐色＋暗褐色土、しまりやや甘い、粘性やや有り
40．暗橙褐色土＋暗褐色土、しまりやや甘い、粘性やや有り
41．にぶい（暗）橙褐色土、しまり甘い、ブロック質の土
42．黒っぽい暗褐色土＋暗橙褐色土塊小礫含む、しまりやや有り
43．暗褐色～暗橙褐色土、しまりやや有り～やや甘い
44．暗褐色土＋橙褐色土塊、しまりやや有り、少し粘性
45．暗褐色土＋暗橙褐色土、しまりやや甘い、少し粘性
46．橙褐色土＋暗橙褐色土、しまりやや甘い、粘性やや有り
47．暗褐色土＋橙褐色土塊、小礫・砂含む、しまり甘い
48．暗（橙）褐色土＋橙褐色土塊、小礫含む、しまりやや甘い
49．橙褐色土＋（暗）褐色土、しまりやや甘い～やや有り
50．暗橙褐色土＋橙褐色土、砂礫多い、しまり甘い
51．暗褐色土＋橙褐色土若干、しまり甘い
52．暗橙褐色＋砂粒含む、しまり有り、
53．（暗）橙褐色土＋明橙褐色土塊、しまりやや有り
54．（暗）橙褐色土＋橙褐色土塊多い、しまり有り
55．暗褐色土＋花崗岩風化礫、橙褐色土塊、しまり甘い
56．（明）橙褐色土＋赤褐色粘質土、砂粒含む、しまり有り（上面硬化）
57．橙褐色土、砂粒・小礫多い、しまり有り（上面硬化）
58．57層とほぼ同じ
59．橙褐色土（しまり有り、砂粒含む）＋暗褐色土（しまり甘い）の混合土

A．赤褐色粘質土＋花崗岩パイラン土（砂粒）
B．花崗岩パイラン土＋赤褐色土
※A・B地山
1～3．流出土
4・5．撹乱（盗掘）？
6～11．墓道埋土？（撹乱？）
12～35．最終追葬埋土
36～43．閉塞石構築土層
44～54．追葬（2）埋土
55～57．追葬（1）埋土
58．初葬時埋土

Fig.22　墓道縦断土層図（1/50）

土によって構築されている。これは、各墳丘トレンチの調査から、墳丘が全て裾部から盛土で構築されていると判断できることと対応する。また、墓道の主軸はN－56°－Wで、石室主軸より東に振れ、前庭付近で羨道から折れ曲がっている状況である。

Fig.19には、墓道の右壁部に、石列を図示しているが（D）、これは後述する最終追葬面での前庭側壁と判断され、墓道完掘時にはDの部分は取り除かれている（Fig.20も参照）。墓道左壁には対応する石列は見いだされなかったが、すでに述べたように、石室開口部左半には後世の撹乱があったため、もとから存在しなかったかどうかは不明である。さて追葬時の側壁と考えられるこの石列は（Fig.20上段）、径15～30cmの扁平な石と、50×20cm程度の長い石を1～3段程度、雑に並べ積み重ねたもので、追葬時の墓道右壁に沿って構築されている。これはちょうど閉塞石の部分で終わっている。一方、これと平面的には連続するようにも見えるが、Fig.18・19のBの部分の内側（墓道中心側）で一部検出された石積は、レベル的には最終追葬面より一部下に入り、また別の（より古い追葬時の構築）ものであろう。これは一部の検出で終ったが、Dの石列と同様に20～30cm大の石を雑に並べ積んだものである。このBのトレンチの奥（外側）では、羨道側壁の延長上に位置する石が検出されており、当初の前庭右側壁であろう。

ここで問題なのは、羨道のところで触れた、羨門付近の羨道右側壁にせり出したCの部分（Fig.18・19）の解釈である。トレンチBの状況や、ピンポールでの探査では、未掘のCの部分の奥に、側壁が連続してあるようなので、Cの積石はこれより以後のものである。下部にある堆積した土は、プライマリーなものと観察される。Cの積み石自体、持ち送りがやや急であるが、羨道側壁と同様の石材が丁寧に積まれている。そこでもっとも妥当な判断として、追葬時における側壁の再構築を考えたい。この部分の本来の羨道側壁が一部崩落していることは前述したが（「落下石材」など）、おそらく最終追葬時までのある時点で、羨道右側壁の一部が崩落し、最終追葬時に羨門部分のみ右側壁を新たに構築

したと考える。平面的には、問題のCの部分の石積からなる羨門と、幅を減じた最終追葬時の墓道が対応すると考えられる。

墓道の掘削は、前述のように左半分が撹乱されている部分が多かったので、思いきってこれを縦断半裁し、墓道の縦断土層を検討した（Fig.22、PL.7-39、巻頭図版2-4)。閉塞石は、この検討後に墓道右半分を掘削した際に検出された（Fig.20上段)。閉塞石の構築は、下部に5～25cmの小塊石を乱雑に積む、というよりも盛土に込め（Fig.22縦断土層36～43層、石よりも土が多い)、この上に（その盛土の墓道前面側斜面のみ残存）25～35cm大の石を斜めに積み上げる。Fig.20中段は、閉塞石上部の石積を取り除いた面での状況である（巻頭図版1-1 PL.7-36)。なお追葬面の床面レベルは、調査区北端部では初葬時のものと変わらないが、墓道中位では約30～35cm、羨門付近では約40cm初葬時の床面より高い。この最終追葬の墓道面からは、小田富士雄氏の九州須恵器編年（以下、小田編年とする）のV期の坏蓋と坏身、脚付鉢などが出土した (PL.7-37)。閉塞石中に埋め込まれた模様のFig.20上段のFを除いては、いずれも据え置かれた状況ではなく、追葬床面からやや浮いて、破損しながら流れた状況で出土している（Fig.20下段)。おそらく本来は、閉塞時の祭祀に用いられた須恵器の一群が、祭祀終了後はぞんざいに扱われ、墓道を埋める段階までに元の位置から動いてしまったのだろう。

墓道の土層はFig.21・22に図示した。平面的には、上記のように墓道の右半分について、最終追葬面が把握できたが、縦横に検討した墓道の土層断面からは、腐食土層の不整合や硬化面の存在から、さらに少なくとも1回あるいは2回の追葬面があった可能性を指摘できる。墓道左半分を半裁した時点で、硬化していたため床面と判断した面は（PL.7-39、巻頭図版2-1)、最終的には床面までさらに掘り下げたが、ある時点での追葬面と考えられよう（Fig.21の「追葬面」、Fig.22の55～57層の上面)。これを第2次追葬とする。さらに縦断土層では、初葬時の床面に近似するがやや浮いた部分でもう一面ある可能性が高く（Fig.22の55～57層の下面)、築造時期（小田編年ⅢA期新相か）より下る可能性の高い須恵器の甕の胴部破片（ⅢB～Ⅳ期？）が出土している。これを第1次追葬とする。Fig.19には、第1・2次追葬面における遺物の出土位置を記した（×印)。以上のように推定される追葬の回数は、墳丘出土遺物を含めた出土土器から検討される時期幅に対応すると見られる。なお初葬、および第1・2次追葬時の閉塞石は、最終追葬面よりも下部にあったと推定されるものの残っておらず、おそらく、最終追葬面の閉塞石が前庭側壁にあったのと異なり、羨道内に構築されていたため、盗掘などによる後世の撹乱で失われたものと考えられる。これを裏付けるように、墓道前面の墳丘西側の斜面には、かきだされた土の堆積と思われる盛り上がりがあり、地表面に閉塞石に相応する塊石が多く転がっている（なおこの部分から採集した土師器片は、墓道出土の破片と接合している)。

なお墓道からは、各追葬面から出土した須恵器・土師器の他に、上層の撹乱・流土中からも須恵器・土師器が一定量出土し（総量パンケース1箱程度)、また現地にて可能な限り埋土を細かく砕いて精査した結果、鉄鏃などの鉄製品の残片を少数検出している。

5　出土遺物

（1）第2次調査出土土器（Fig.23～25)

今回の調査では、A～Dの各墳丘トレンチと、墓道から、総量パンケース2箱程度の須恵器・土師器が出土した他、羨道と墓道の埋土から鉄製品の残片が若干出土している。以下これらについて説明するが、須恵器・土師器についての詳細な法量・観察は表1の観察表も参照されたい。

・墳丘出土の土器（Fig.23)、2-1aと2-1bは同一個体と考えられ、Bトレンチ表土および盛土内から出土した須恵器の壷ないし横瓶？である（図中の「2-」は2次調査出土のものであることを示す)。胴部の

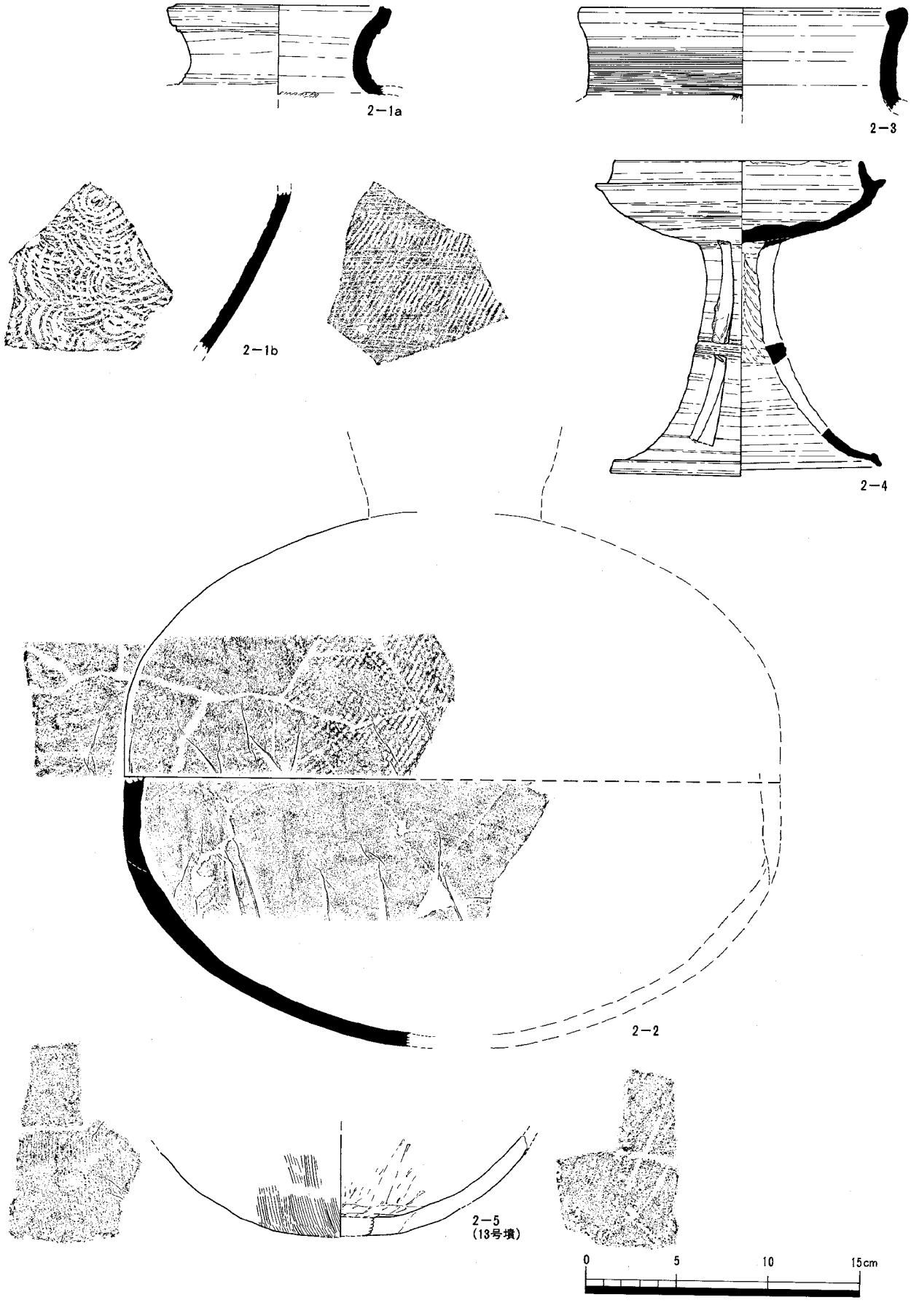


Fig.23　第2次調査出土土器（墳丘他）（1/3）

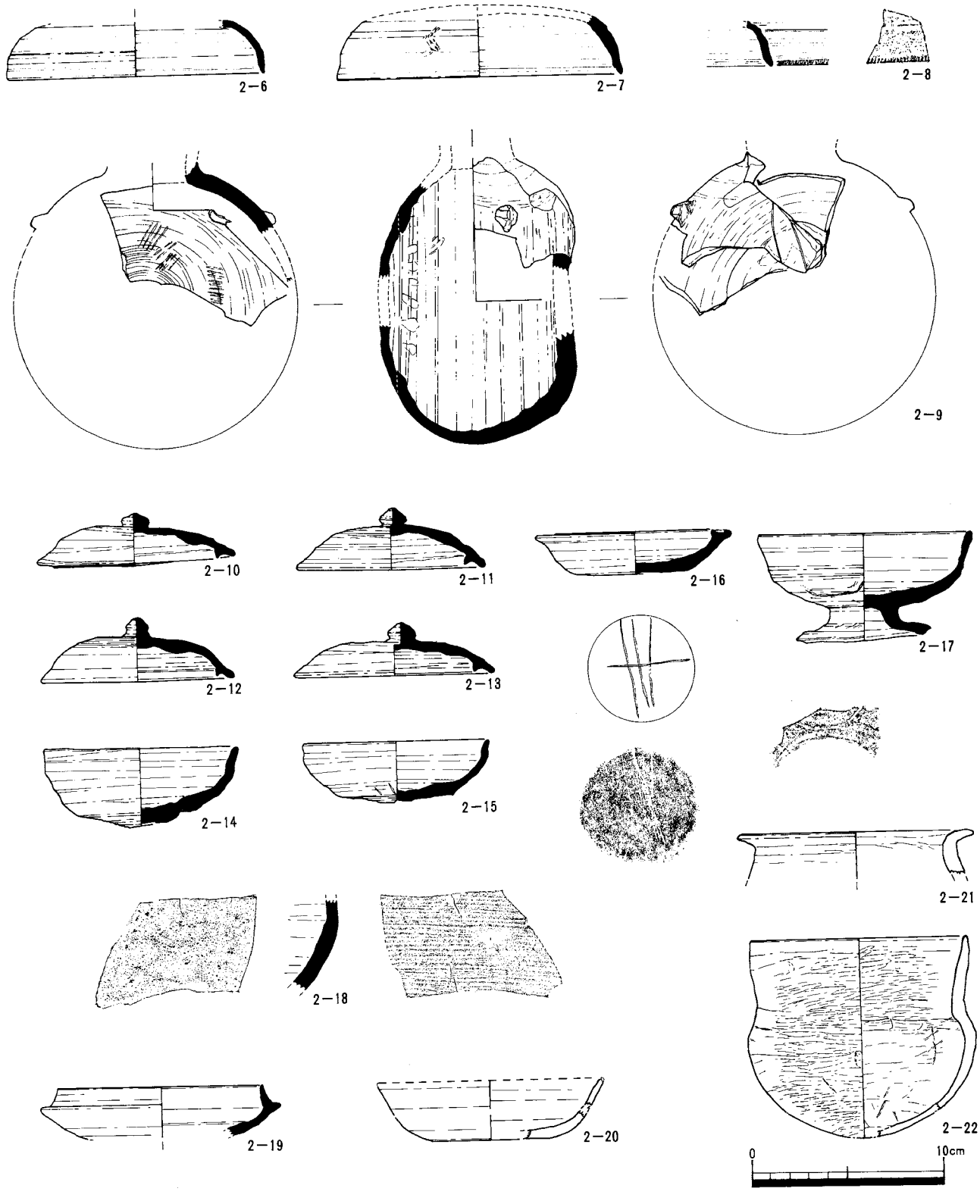


Fig.24　第2次調査出土土器（墓道他）（1/3）

破片は他にも数片あるが、いずれも小片であり接合しない。口縁部上方やや斜めにヨコナデによる面を持ち、肥厚した口縁部外面下部にはシャープな凹線が形成される。横瓶とすれば、口縁部の特徴から類例を拾うと、ⅢA期新相からⅢB期でも古相の範疇であろうか。色調は黄色味の強い灰色を呈し、焼成はやや軟質気味だが、胎土は精良である。2-2は、Bトレンチ上端の地山整形面旧表土中から出土した須恵器の横瓶ないし甕の平底胴部下半である。横瓶として図示した。残存状況が良好で、未掘の

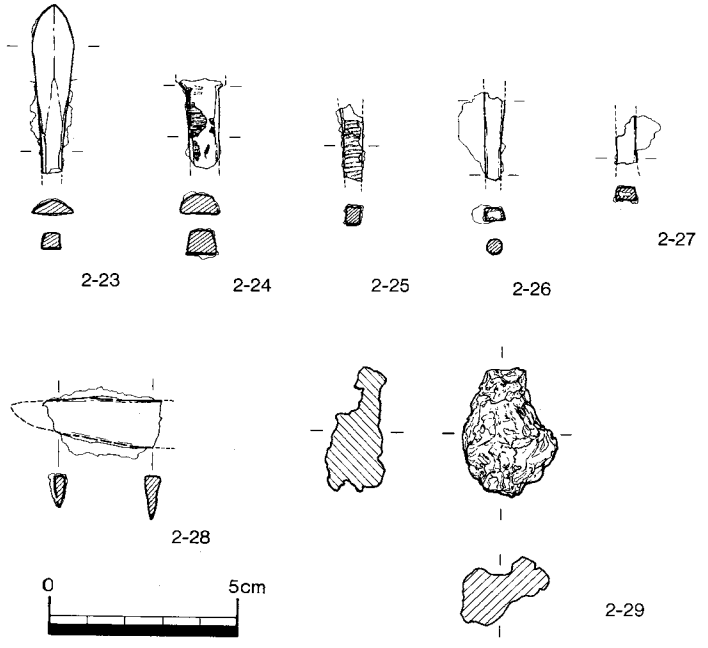


Fig.25　第2次調査出土鉄製品（1/2）

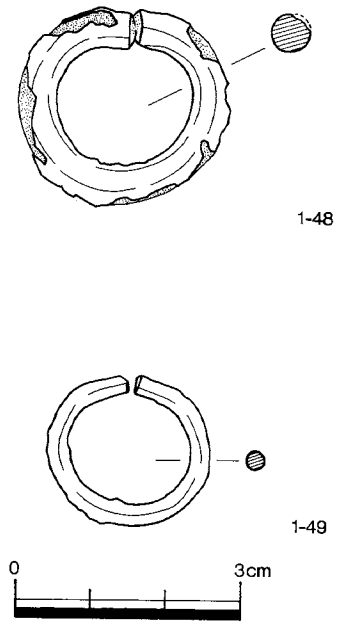


Fig.26　第1次調査出土耳環（1/1）

トレンチ外に残りの部位が埋まっていよう。外面は格子目タタキを施すが、底部付近はナデで磨り消す。内面は無紋（？）のタタキ当て具の痕跡があるが、さらにナデで丁寧に磨り消す。口縁部が不明なので位置付け困難だが、内面の調整から見てⅢＢ期以前、また、焼成がやや軟質で瓦質気味であり、粗砂粒を目立って含み、他の須恵器に比べて違和感がある。色調は灰白色気味の灰オリーヴ色を呈する。あるいは陶質土器の甕の可能性もある（春日市日拝塚例に類似？）。2-3 はＣトレンチ周溝堆積土中層から出土した須恵器の短頸壺の口縁部である。口縁端部上方のヨコナデ面がやや内傾するのが特徴的で、外面に細かいカキメがある。形態的に類例が乏しく、位置付け困難である。2-4 はＢトレンチ周溝下層から出土した須恵器の高坏である。おそらく有蓋のもの。脚部は長脚二段透かしだが（長台形気味の透かし３方向)、長脚化は顕著ではない。二段の透かしの間に２条の沈線に近い凹線がある。口径が13.5cm前後とやや大きく、坏部の体部中位に若干の段を有しこれから下部を丁寧に回転ヘラケズリを施すもので、ⅢＡ期新相に比定できる。脚端部は下方に折れ曲がるもので、ⅢＢ期新相～Ⅳ期に見られるヨコナデによる折り返しはなされない。次に 2-5は、Ｂ－14号墳出土ではなく、周囲を踏査した際に、近くにあるＢ－13号墳の墳丘で表採した土師器の甕である。底部付近の破片であるが、他にも同一個体と判断される小破片が多数ある。５世紀後半頃のものか。Ｂ－13号墳は竪穴系の小石室であり、時期的に整合する。参考までに紹介しておく。

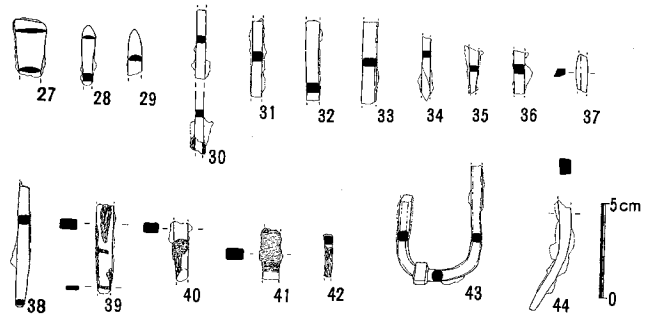


Fig.27　第1次調査出土鉄製品（1/4）
（27～44は第1次報告書と同じ番号）

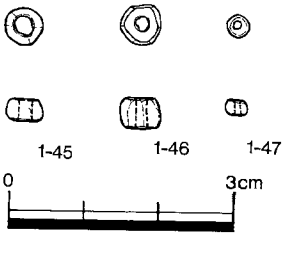


Fig.28　第1次調査出土ガラス小玉（1/1）
（45～47は第1次報告書と同じ番号）

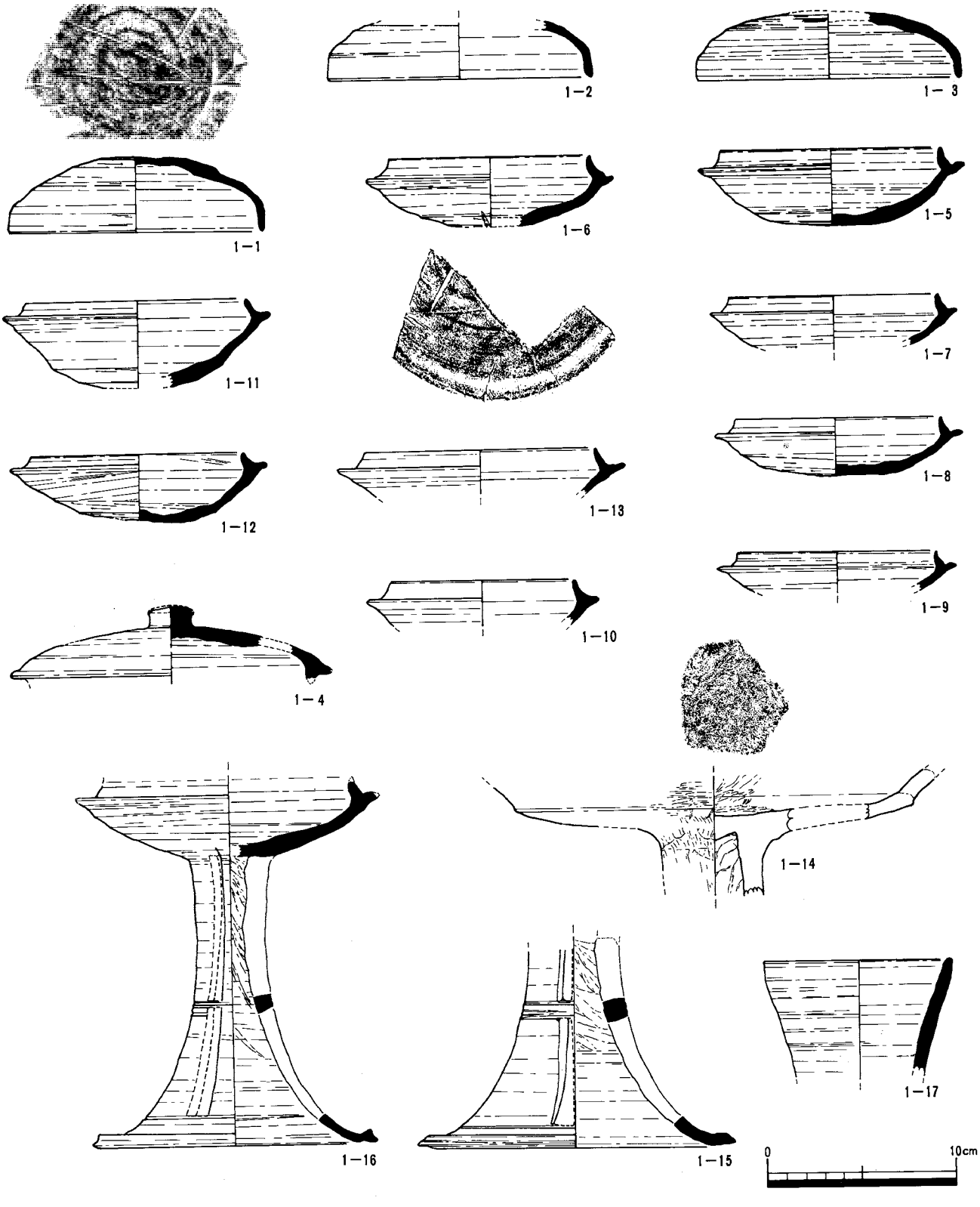


Fig.29　第1次調査出土土器（1）（1/3）

・墓道部出土の土器（Fig24）2-6･7･8は墓道ないし前庭の埋土上層から出土した坏蓋である。6･7の天井部は平坦に近いであろう。口縁部と体部の境には､6には若干の段が､7･8には明瞭な段があり、ⅢA期新相である。初葬に伴い、後に追葬でかきだされたものか。7は高坏の蓋の可能性がある(PL.8-45)。2-9は提瓶の体部上半。復元的に図示した。退化した鍵状把手があり、法量も小さくⅣ期新相に下る。回転ケズリを施した体部の腹部平坦面にヘラ記号がある。第２次追葬面出土。2-10～13は墓道最終追

葬面出土の坏蓋。小さな宝珠つまみを有し、かえりは口縁部より下に出るものと出ないものがある。各々手法に個性があり、胎土・色調も異なる。窯の違いか。2-15は上記に対応する坏。底部近くにヘラ記号？がある。胎土・色調が10に似るも、合致しない。10～13・15はV期の典型的セット。2-14は15の型式組列上であるが、法量がやや大きく、一時期前の椀ないし坏である。Ⅳ期新相で、第2次追葬面出土。2-16は、最終追葬面出土の坏。底面にヘラ記号。蓋とされることが多いが、出土状況からは坏か。同一面では蓋が多すぎ、比率的にも坏としてここでは使用されたと考える。2-17は、墓道最終面出土の脚付鉢（台付椀）。14のタイプの椀に脚部が付く。鉢部（椀部）に一のヘラ記号。16・17もV期の一括。2-20は法量から中世後期（15世紀頃）の土師器の坏。前庭上方の撹乱埋土から出土し、盗掘の時期を示すか。2-21は土師器の鉢な

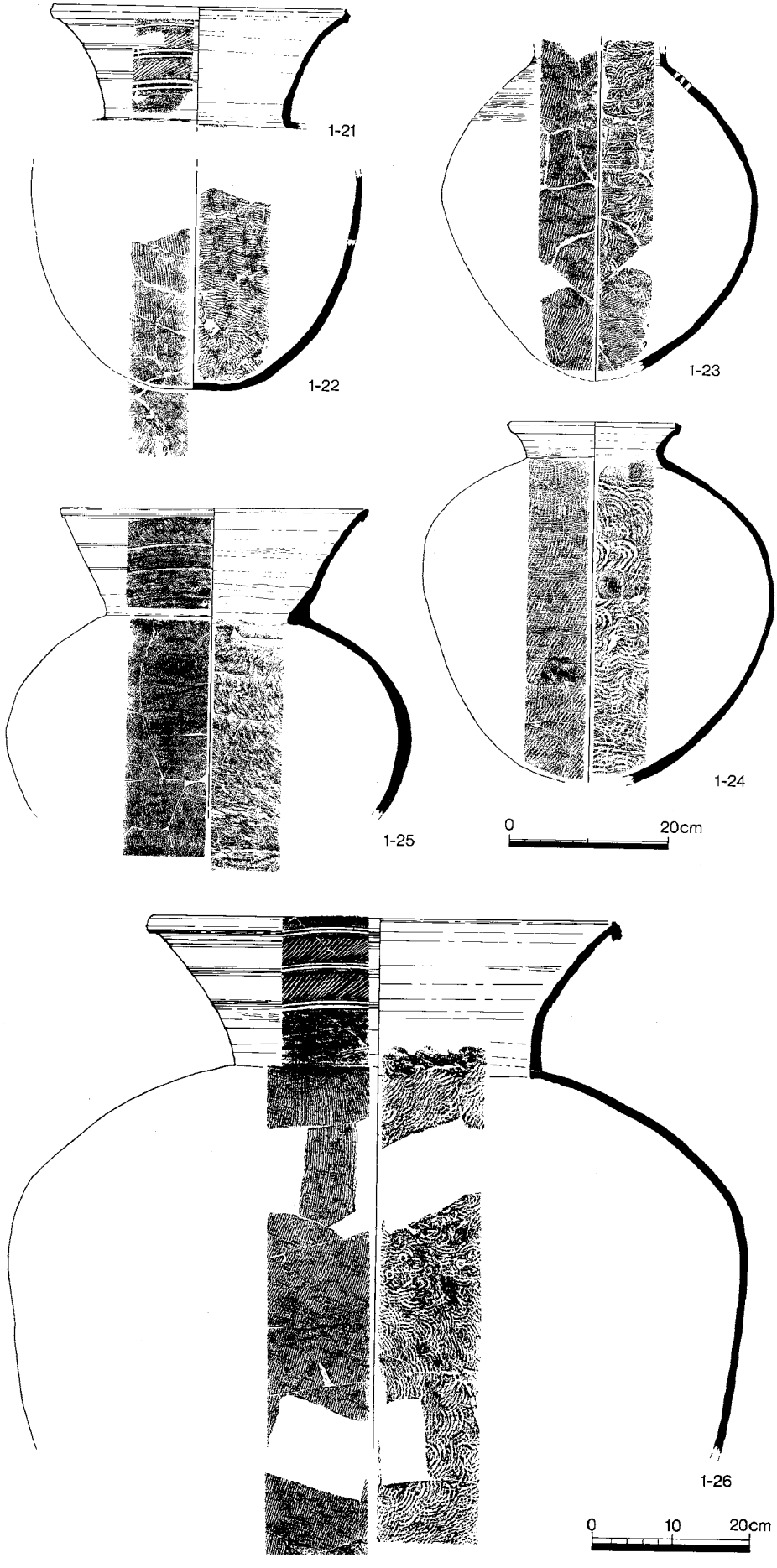


Fig.30　第1次調査出土土器（2）（1/8）

いし坩。口縁部形態は同時期の甕に類似するが、調整は丁寧なナデ、胎土は精良、外面は丹塗。羨道北側（羨門側）下層（レベル的に第１次追葬面か）の埋土中より出土し、初葬に伴い追葬でかきだされたものか。2-22は土師器の丸底の直口坩。墓道上層の破片と、石室・墓道西方の墳丘外斜面の土中からの破片が接合。精良な胎土で、内外丁寧なヘラミガキを施す。21・22は、型式的に初葬に伴う祭

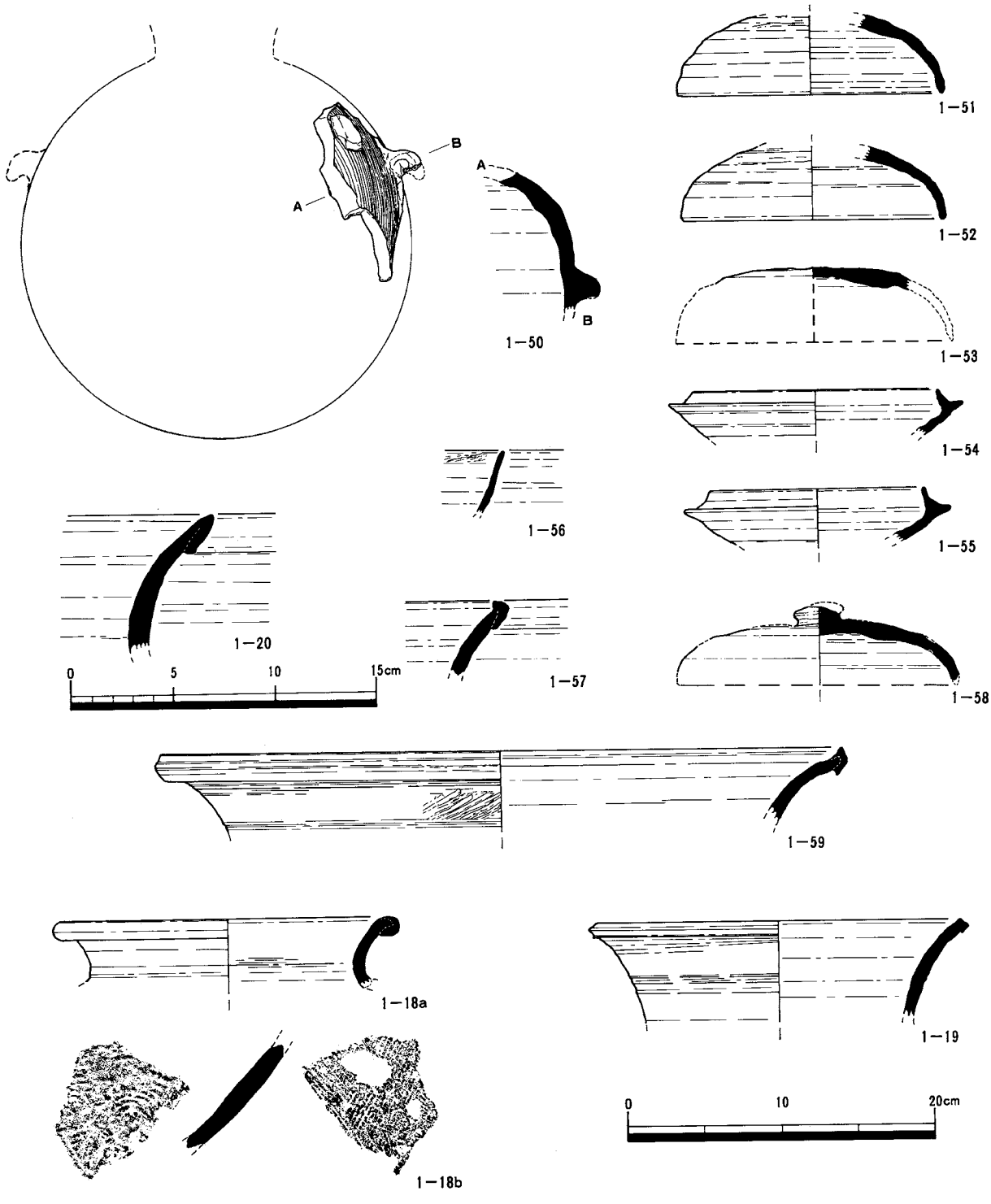


Fig.31　第1次調査出土土器（3）（1/3、1/4）※補遺編
（1-20、18、19は既報告と同じ）

表1：飯氏B-14号墳　第2次調査出土土器観察表

Fig-No.	出土調査区／層位	種類／器種	残存部位／遺存率	口径／最大径／底径／脚裾径／器高（残存高）cm	成形・調整（外面）／（内面）	色　調	胎　土	焼　成	備考（時期）
23-2-1a	Bトレンチ上段／表土・盛土	須恵器／壷or横瓶	口縁部／1/4周	10.1（外径12.7）／—／—／—／（4.9）	ヨコナデ／ヨコナデ、頸部下同心円文当て具痕？	灰色～明黄褐色	精良 砂粒少量	やや軟質	Ⅲ A期新相～Ⅲ B期
23-2-1b	Bトレンチ上段／表土・盛土	須恵器／壷？	胴部破片	—／—／—／—／（8.9）	縦位平行タタキ→粗いカキメ／同心円文当て具痕	同上	同上	同上	他に小片あり、1aと同一か
23-2-2	Bトレンチ上端／旧表土中	須恵器／横瓶or甕	底部～胴部（体部）下半／1/2周	—／横瓶なら36.0前後？／9.4／—／（反転して29.0）	格子目タタキ→底部付近ナデ消し／無紋当て具→ナデ	灰色～灰オリーブ色	花崗石・石英粗粒を含む	やや軟質	Ⅲ A期、甕なら残存高15.8
23-2-3	Cトレンチ周溝／堆積土中層	須恵器／短頸壷？	口縁部／1/4周	17.6／—／—／—／（5.5）	ヨコナデ、細かいカキメ（、頸部以下タタキか）／ヨコナデ	暗灰黄色～暗灰色	精良 砂粒少量	堅緻	表面うすい自然釉状
23-2-4	Cトレンチ周溝／堆積土下層	須恵器／（有蓋）高坏	略完形／脚裾部欠損大	13.5／15.9／—／14.9／17.2	坏部上半ヨコナデ、下半回転ヘラケズリ→ヨコナデ脚部回転ナデ／坏部ヨコナデ、脚部回転ナデ	灰色～暗青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻 やや歪み	二段スカシ3方向、Ⅲ A期新相、脚部上半内面シボリ
23-2-5	飯氏B-13号墳表採	土師器／甕	底部付近／約1/4周（他に胴部片あり）	—／（残存分で20.1）／6.0（ほぼ丸底）／—／（5.6）	タテハケ／ケズリ（上→下）	橙色～黄褐色	花崗岩・長石粒、雲母含む	良好	5C末～6C初め頃か
24-2-6	墓道下半（北側）上層／最終追葬面埋土	須恵器／坏蓋	口縁部～体部／1/4周	13.2／—／天井部10.1？／—／（3.9）	ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ／ヨコナデ、回転ナデ	青灰色～灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	（Ⅲ A期新相～）Ⅲ B期か
24-2-7	墓道北側上層／流出土層	須恵器／坏蓋	口縁部～体部／約1/8周	14.8／—／天井部12.0？／—／（3.1）	ヨコナデ、回転ナデ（天井部ケズリ）／ヨコナデ	青灰色～明青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅲ A期新相 高坏蓋かも
24-2-8	墓道上部（石室前庭）／埋土上層	須恵器／坏蓋	口縁部小片（径復元不可）	—／—／—／—／（2.35）	ヨコナデ、端部刻み目又は木目圧痕／ヨコナデ	青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅲ A期新相
24-2-9	墓道中位～北側／第2次追葬埋土+流土	須恵器／提瓶	体部上半／約1/3周	—／体部径14.8？／—／—／（8.5）（体部幅10.3）	平行タタキ→回転ナデ（被蓋部）、ヘラケズリ／当て具？→回転ナデ	青黒色～青灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻、断面紫色	Ⅳ期、体部片面腹部ヘラ描
24-2-10	墓道最終追葬面	須恵器／坏蓋	完形／完存	10.35／—／—／—／2.75	天井部回転ケズリ、口縁ヨコナデ／回転ナデ→口縁ヨコナデ	暗青灰色～青灰色	緻密、長石・石英含む	堅緻 焼歪み	Ⅴ期（山村B期）小蓋1
24-2-11	墓道最終追葬面	須恵器／坏蓋	完形／完存	9.9／—／—／—／3.25	天井部回転ケズリ、以下回転ナデ、ヨコナデ／回転ナデ→ヨコナデ	灰色～淡緑灰色	長石・石英粗粒目立つ	焼歪み	同上
24-2-12	墓道最終追葬面	須恵器／坏蓋	完形／一部欠損	10.05／—／—／—／3.35	天井部（ケズリ？→）カキメ状、以下ヨコナデ／ヨコナデ	青灰色～紫灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	同上
24-2-13	墓道最終追葬面	須恵器／坏蓋	完形／一部欠損	10.55／—／—／—／2.8	天井部回転ケズリ、以下回転ナデ、ヨコナデ／回転ナデ→ヨコナデ	明青灰色～青灰色	緻密、微砂粒目立つ	堅緻	同上
24-2-14	墓道中位下方／第2次追葬面	須恵器／坏身（蓋）	略完形／約1/3周	10.2／—／—／—／4.2	底部ヘラ切り、体部回転ナデ、ヨコナデ／回転ナデ→ヨコナデ	暗青灰色	緻密 砂粒少量	堅緻 やや歪み	Ⅳ期新相（山村A期）小坏Ⅳ
24-2-15	墓道最終追葬面	須恵器／坏身	完形／一部欠損	9.8／—／6.0／—／3.2	底部ヘラ切り、体部回転ナデ、ヨコナデ／回転ナデ→ヨコナデ	暗青灰色	緻密、長石・石英含む	堅緻 やや歪み	Ⅴ期（山村B期）小坏a1
24-2-16	墓道最終追葬面	須恵器／坏身（蓋？）	完形／一部欠損	8.25／10.25／5.75／—／2.2	底部ヘラ切り→ナデ、回転ナデ、ヨコナデ／回転ナデ→ヨコナデ	淡黄～浅黄灰色	微砂粒や や目立つ	軟質 傷多い	Ⅴ期（山村B～C期）小蓋1
24-2-17	墓道下方（北側）／最終追葬面	須恵器／脚付鉢	略完形／口縁部は一部残存、脚部完存	11.1／—／—／6.0（外径7.05）／6.0	脚部ヨコナデ、鉢部ヨコナデ（下部回転ケズリ）／ヨコナデ	灰色（やや黄色気味）	花崗岩・長石粒目立つ	やや軟質 焼歪み	Ⅴ期、鉢部下半ヘラ描　（台付埦）
24-2-18	墓道下方（北側）／最終追葬面	須恵器／甕or壷	胴部下半破片	—／—／—／—／（4.7）	粗いカキメ／回転ナデ→ナデ	灰色～暗青灰色	緻密 砂粒少量	堅緻	
24-2-19	墓道下方（北西側）／斜面表採※墳丘外	須恵器／坏身	口縁部～体部／約1/10周	10.6／12.5／—／—／（2.6）	ヨコナデ（底部ケズリ？）／ヨコナデ	灰色～青灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	Ⅳ期新相？径復元前後あり
24-2-20	墓道下方（北側）／上層流出土中	土師器／坏（中世）	略完形／小片より復元	11.8（端部欠損）／—／6.2／—／（3.05）	ヨコナデ／ナデ（摩滅し不明瞭）	明黄褐色	精良 砂粒少量	良好	径復元前後あり 15世紀頃か
24-2-21	羨道入口（羨門部）／下層	土師器／鉢or坩	口縁部～頸部／約1/6周	12.4／—／—／—／（2.4）	口縁部ヨコナデ、以下ナデ／ヨコナデ～ナデ	明赤褐色 外面丹塗り	水こし精良 砂粒微量	良好	Ⅲ A～Ⅲ B併行期
24-2-22	墓道上方～中位／上層・撹乱（+墓道下方西斜面）	土師器／丸底直口坩	口縁部～体部、底部片／全体の約1/3周	11.25／12.0／—／—／10.4	口縁ヨコナデ、体部ナデ→ミガキ／口縁ヨコナデ→ミガキ、体部ナデ	明赤褐色	水こし精良 砂粒微量	良好	Ⅲ A～Ⅲ B併行期、かき出し土中

※備考のⅣ・Ⅴ・Ⅵ期の器種分類は、山村信榮1995「八世紀初頭の諸問題」（『太宰府陶磁器研究』森田勉氏追悼論文集）による。
※※編年上の時期は、小田冨士雄氏編年を基本とするが（小田編年）、これを一部改組した。高橋徹・小林昭彦1990「九州須恵器研究の課題」（『古代文化』Vol.42）を参考とし、また上記の山村氏の編年も参照した（山村編年とする）。
※※※上から見て、ラセン状のヨコナデを「回転ナデ」として、水平方向の「ヨコナデ」と区別している。

祀土器であろう。今回の調査では、推定初葬時の土器群が析出され、最終追葬面と第２次追葬面の土器群が検出され、その時期が明らかになった。

なお２次調査では、Fig.23・24以外にも土器片が出土したが、他は小片で図示困難である。

（２）第２次調査出土の鉄製品（Fig.25）

2-23～27は鉄鏃である。23・25・27は羨道埋土、他は墓道埋土上層より出土。23は長三角形系の細根長頸鏃で、鏃身は片丸造。杉山秀宏氏分類（以下、杉山分類）の長頸鏃ＢⅣ形式第２形式で、時期的にTK43併行を下限とし、初葬時のものか（杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８）。現存長（以下、Ａ）45mm、刃部長約21mm?、鏃身幅（Ｂ）10.2mm、頸部幅（Ｃ）5.4mmを測る。24はおそらく方頭鏃などの茎部から関部で、錆で不明確だが両角関か。断面が厚いのがやや不審で、また関部断面は略台形状か。仮に方頭鏃有関とすれば、この時期の北部九州の地域性が表出している。Ａ23mm、Ｃ11mm、茎部幅（Ｄ）7.8mmを測る。茎は樹皮で巻かれているのが残る。25～27は長頸鏃の茎部残片。25は樹皮を巻いたのが残る。25はＡ20mm、Ｄ5.1mm。26はＡ23mm、茎部は先細りで断面方形から円形となり、幅 5.8～4.0mm。27は、Ａ12.8mm、Ｄ 5.1mmを測る。2-28は羨道埋土出土の刀子の破片である。現存長30.9mm、最大幅12.5mm、背幅 2.9～4.3mm。2-29は鉄滓である。墓道上方（南側）西半の埋土中層から出土し、初葬～第２次追葬までの副葬品のかきだしの可能性がある。比較的気泡が少なく、平滑部が僅かな方を上面として図示した。断面不整三角形状を呈する。

表2：飯氏B-14号墳　第1次調査出土土器観察表

Fig-No.	出土調査区／層位	種類／器種	残存部位／遺存率	口径／最大径／底径／脚裾径／器高（残存高）cm	成形・調整（外面）／（内面）	色　調	胎　土	焼　成	備考（時期）
29-1-1	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏蓋	完形／一部欠損	13.5／—／—／—／3.95	天井部回転ヘラケズリ、以下ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	灰白色～明青灰色	精良緻密 砂粒若干	やや堅緻	Ⅳ期古相、蓋Ⅳ1、ヘラ描あり
29-1-2	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏蓋	口縁部～体部／約1/6周	14.0／—／—／—／(3.0)	（天井部回転ケズリ）、ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	明青灰色～青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	ⅢB期か（Ⅳ期古相?）
29-1-3	1区／上層か	須恵器／坏蓋	略完形（天井部欠損）／約1/3周	14.0／—／—／—／(3.50) 推定3.60	天井部回転ヘラケズリ、以下ヨコナデ／ヨコナデ	灰色～浅黄灰色	精良緻密 砂粒微量	やや軟質	ⅢA期新相～ⅢB期
29-1-5	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	ほぼ完形／一部欠損	11.6／14.1／—／—／4.05	底部回転ヘラケズリ、以上ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	(外)暗青灰色 (内)明青灰色	精良緻密 砂粒微量	やや軟質か	Ⅳ期古相 坏Ⅳ1
29-1-6	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	口縁部～底部付近／約1/4周	10.6／13.0／—／—／(3.60) 推定3.70	底部回転ケズリ、以上回転ナデ、ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	青灰色～浅黄灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	Ⅳ期古～中相 ヘラ描、坏Ⅳ1
29-1-7	2区、2トレンチ／流土中	須恵器／坏身	口縁部～体部／約1/5周	11.0／13.0／—／—／(2.65)	底部回転ヘラケズリ、以上ヨコナデ／ヨコナデ	暗青灰色～青灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	Ⅳ期新相（山村A期）坏Ⅳ1
29-1-8	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	略完形／全体の約1/3周	10.8／13.0／—／—／3.0	底部回転ヘラケズリ、以上ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	灰色～青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅳ期中～新相 坏Ⅳ1
29-1-9	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	口縁部～体部／約1/6周	10.5／12.6／—／—／(2.0)	体部回転ナデ、以上ヨコナデ（ケズリなし?）／ヨコナデ	灰色～青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅳ期新相（山村A期）坏Ⅳ2
29-1-11	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	口縁部～底部付近／約1/3周	11.5／14.0／—／—／(4.50) 推定4.60	底部回転ヘラケズリ、以上ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	青灰色～暗青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅳ期古相 坏Ⅳ1
29-1-12	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	完形／ほぼ完存	11.1／13.4／—／—／3.6	底部回転ケズリ、以上回転ナデ、ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	(暗)灰色～青灰色	緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅳ期中～新相 坏Ⅳ1
29-1-13	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	口縁部～体部／約1/6周	12.0／15.0／—／—／(2.45)	（底部不明）回転ナデ、ヨコナデ／ヨコナデ	灰色～明青灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	Ⅳ期古相か
29-1-10	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏身	口縁部～体部／約1/8周	9.6／12.2／—／—／(2.4)	（底部不明）ヨコナデ／ヨコナデ	青灰色	緻密 砂粒若干	堅緻	Ⅳ期新相? 径復元前後あり
29-1-4	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏蓋	略完形（欠損・磨滅著しい）／全体の1/4	推定14.0／16.8／—／—／(3.9) 推定4.3	（天井部ヘラ切り）ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	灰白色～にぶい黄橙色	緻密 砂粒少量	軟質もろい	Ⅵ～Ⅶ期（山村C・D期）蓋1
29-1-16	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／高坏（有蓋?）（長脚二段透かし）	略完形（口縁一部欠損）／約1/3周	推定12.6／推定15.8（端部欠損）／—／14.9／(18.8) 推定19.1	坏部回転ケズリ→回転ナデ、ヨコナデ、脚部ヨコナデ、沈線あり／脚部上半シボリ、他はヨコナデ	暗青灰色 坏部（内）はにぶい橙色	精良緻密 砂粒少量	坏部甘い 脚部堅緻	Ⅵ期古相、坏部断面にぶい橙色
29-1-15	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／高坏	脚部（上部欠損）／約2/3周	—／—／—／16.8／(11.0)	ヨコナデ、沈線あり／ヨコナデ、上半シボリ	灰白色～淡灰黄色	精良緻密 砂粒微量	軟質	ⅢB～Ⅵ期古相 長脚二段
29-1-14	1区墳頂部（「C」）／流土中	土師器／大形高坏	脚部上部～坏部下半（坏屈曲部は小片）	—／20.75（?）／柱状部径5.4／—／(6.4)	坏部ケズリ?→ヘラミガキ、脚部ケズリ→坏部ハケ?→ミガキ、脚部シボリ	赤褐色	水こし精良 砂粒微量	やや良好	ⅢA～ⅢB期 併行
30-1-17	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／提瓶or平瓶	口縁部～体部／約2/3	9.9／—／—／—／(6.0)	ヨコナデ／ヨコナデ	灰色～青灰色	精良緻密 砂粒少量	やや堅緻	ⅢB～Ⅳ期 古相か
30-1-21	2区・2トレンチ／流土中	須恵器／大形甕	口縁部～頸部／約1/3	37.7（外径38.5）／—／—／(15.35)	ヨコナデ→斜線文、沈線、頸部カキメ／回転ナデ→ヨコナデ、胴部同心円文当て具	(外)暗青灰色 (内)灰色	精良 砂粒若干	堅緻、断面紫灰色	Ⅳ期古相か
30-1-22	2区（「B」）・2トレンチ／流土中	須恵器／大形甕	頸部下半～底部／約1/3	—／41.8／8.8（平底）／—／(27.6)	胴部～底部縦位平行タタキ→中位一部ナデ、下位～底部カキメ／横位平行文当て具→一部・底部ナデ	(外)青灰色 (内)灰色	精良 砂粒少量	少し軟質	Ⅳ期、タタキは木目直交平行タタキ
30-1-23	2区（「B」）／流土中	須恵器／中形甕	頸部～胴部（底部は欠失）／約2/3	—／40.2／—／—／(40.4)（頸部径16.7）	全面縦位平行タタキ→上位～中位細かいカキメ／同心円文当て具→下位～底部平行文当て具、上位カキメ?	灰オリーブ色～青灰色	精良 砂粒少量	焼きムラ有、一部淡褐色	Ⅳ期か、内面カキメ?は沈線状、内外下位再タタキ
30-1-24	1区（「D」）／流土中	須恵器／中形甕	ほぼ完形（底部は欠失）約3/4	20.8（外径22.2）／44.6／—／—／(45.5)	口縁部ヨコナデ、頸部カキメ、胴部平行タタキ（縦位～斜位）→カキメ／胴部同心円文当て具、口縁部ヨコナデ	灰色～灰オリーブ色	精良 砂粒少量	堅緻	ⅢA～ⅢB期か タタキは木目直交平行タタキ
30-1-25	1区（「D」）・1トレンチ／流土中	須恵器／大形甕	口縁部～胴部中位／口縁部ほぼ残存 胴部約2/3	38.4（外径39.0）／52.0／—／—／(39.0)	口縁部ヨコナデ→波状文、沈線、胴部平行タタキ（上位縦位、中位横位）／口縁ヨコナデ、胴部同心円文	(外)暗青灰色 (内)灰色	精良、琉紋岩?黒色砂粒（輝石か）含む	焼きムラ有、一部灰褐色気味	ⅢA期か、内外面タタキ後ナデ消し、木目直交タタキ
31-1-26	2区（「B」）・2トレンチ／流土中	須恵器／大形甕	口縁部～胴部中位／口縁部 約2/3、胴部 約1/2	58.2（外径60.1）／93.4／—／—／(67.0)	口縁部ヨコナデ→カキメ→斜線文、沈線、胴部縦位平行タタキ／口縁部ヨコナデ、胴部同心円文当て具	灰オリーブ色～暗青灰色	精良 砂粒若干	堅緻	Ⅳ期古相か、木目直交平行タタキ（擬格子状）
31-1-50	2区、2トレンチ／流土中	須恵器／提瓶	体部上半の一部（他に破片あり）	—／復元19.0／—／—／(8.7)	カキメ、鍵状（退化）把手、溶着片あり／ヨコナデ（回転ナデ）	灰色～青灰色	精良 砂粒微量	堅緻、断面紫灰色	Ⅳ期新相か
31-1-51	1区／流土中	須恵器／坏蓋	口縁部～体部／約1/7周	12.8／—／—／—／(3.9)	天井部回転ヘラケズリ、以下ヨコナデ／ヨコナデ	灰色～灰白色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	Ⅳ期古～中相 蓋Ⅳ1
31-1-52	1区／流土中	須恵器／坏蓋	口縁部～体部／約1/7周	12.7／—／—／—／(3.65)	天井部回転ケズリ、以下回転ナデ、ヨコナデ／ヨコナデ	灰色～青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅳ期古～中相 蓋Ⅳ1
31-1-53	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏蓋	天井部破片	—／—／—（天井部径8.5）／—／(1.2)	天井部回転ケズリ（ヘラ切り残る）／ヨコナデ（→ナデ）	灰色～明緑灰色	精良 砂粒微量	堅緻	Ⅳ期古相か 蓋Ⅳ1
31-1-54	2トレンチ／流土中	須恵器／坏身	口縁部～体部／約1/5周	11.9／14.4／—／—／(2.35)	（底部ケズリ不明）ヨコナデ／ヨコナデ	灰色～暗青灰色	精良緻密 砂粒少量	堅緻	Ⅳ期中～新相 坏Ⅳ2?
31-1-55	1区／流土中	須恵器／坏身	口縁部～体部／約1/8周	10.4／13.1／—／—／(2.7)	底部回転ケズリ?、ヨコナデ／ヨコナデ	青灰色～暗青灰色	精良 砂粒少量	やや堅緻	Ⅳ期新相～Ⅴ期 坏Ⅳ1か
31-1-56	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／塊or脚付鉢	口縁部小破片	—／—／—／—／(3.0)	ヨコナデ／ヨコナデ	暗青灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	Ⅳ期新相～Ⅴ期か
31-1-57	1区梱部（「D」）／流土中	須恵器／甕	口縁部小破片	—／—／—／—／(3.65)	ヨコナデ／ヨコナデ	灰色～青灰色	精良 砂粒少量	堅緻	Ⅳ期か
31-1-58	1区墳頂部（「C」）／流土中	須恵器／坏蓋	略完形（磨滅多く、端部欠損）／全体の1/3	推定13.5／—／—／—／(4.0) 推定4.15	天井部ヘラ切り、以下ヨコナデ／回転ナデ、ヨコナデ	灰色～にぶい黄橙色	精良 砂粒少量	軟質もろい	Ⅶ期（山村D期）蓋2
31-1-20	1次調査表採	須恵器／甕	口縁部小破片	—／—／—／—／(6.7)	ヨコナデ／ヨコナデ	黄灰色～暗灰色	精良 砂粒若干	やや堅緻	Ⅳ期か
31-1-59	2トレンチ／流土中	須恵器／大形甕	口縁部／約1/8周	44.6（外径45.4）／—／—／—／(5.1)	ヨコナデ→斜線文、沈線／ヨコナデ	(外)暗青灰色～(内)灰色	精良、石英長石少量含む	堅緻	Ⅳ期か 径復元前後あり
31-1-18a	1区／流土中	須恵器／甕（壷?）	口縁部～頸部／約1/6周	21.0（外径22.6）／—／—／—／(4.6)	ヨコナデ、口縁部外に肥厚・丸味／ヨコナデ	明黄褐色～浅黄色	精良、長石花崗岩等含む	軟質、土師質気味	Ⅳ～Ⅴ期か
31-1-18b	1区、梱部（「D」）／流土中	同上	胴部小破片（他に破片あり）	—／—／—／—／(6.5)	左上斜位→縦位平行タタキ／同心円文当て具	同上	同上	同上	1-18aと同一個体
31-1-19	1区墳中部（「D」）／流土中	須恵器／中形甕	口縁部／約1/5周	23.7（外径24.8）／—／—／—／(6.7)	ヨコナデ→沈線／回転ナデ、ヨコナデ	(外)暗青灰色 (内)灰色	精良緻密 砂粒微量	堅緻	ⅢB～Ⅳ期

※ⅢA期新相＝宇美町岩長浦1号窯・八女市中尾谷2号窯、ⅢB期＝大野城市野添9号窯・雉ヶ尾2号窯、Ⅳ期古相＝野添12号窯・牛頸小田浦37-Ⅰ号窯・平田D窯、Ⅳ期中相＝牛頸小田浦33-Ⅰ号窯・神ノ前2号窯、Ⅳ期新相＝牛頸小田浦40-Ⅰ号窯・牛頸中通D-2号窯・牛頸後田46-Ⅰ号窯、Ⅴ期（従来のⅣb期含む）＝牛頸小田浦50-Ⅰ号窯・牛頸月ノ浦窯、各時期は以上の窯跡資料を指標としたい。また、従来の年代観と異なり、Ⅳ期新相～Ⅴ期を7世紀中頃～第3四半期と考え（山村信榮1998「7世紀後半の諸問題」『古文化談叢』41）、Ⅳ期の幅が長く、細分可能と判断する。

下面には大小の気泡があり、平滑部を有する。精練滓でも炉外流出滓の可能性が強い（長家伸氏教示)。重量９ｇ、長さ34mm、幅24mm、厚さ1.8mmを測る。

（３）第１次調査出土遺物についての補足と追加報告

１次調査報告書では、遺物の出土位置を書き漏らしているものがあり、また今回の報告に際して再度観察を行った結果、一部に既報告とは異なる観察結果が得られたので、ここに補足・訂正したい。耳環は（Fig.26、巻頭図版2-5･6)、石室埋土から出土した。既報告の図は銹落としが不十分で、今回、48に銀箔鍍金を、49は銀環であることを確認したので、再度観察を記述する。48は銅芯に銀箔を張り、鍍金した耳環である。環体を覆う箔の表面は黒錆が付着し、銹化が著しいが、環体内側に鍍金が残る（巻頭図版2-6)。外径21×28mm、内径15×18mm、断面径5.3mmを測る。49は、銀製の耳環である。外径20×22mm、内径14.5×18mm、断面径2.5mmを測る。銹化が著しく、錆と土に覆われており、本来の断面径は2.0mm前後か。なお以上は肉眼観察によるもので、化学分析を経たものではない。

Fig.27には、鉄製品を掲載した（１次報告書の図のまま、以下法量などについては既報告を参照)。27～37、39～42は石室埋土出土、38・43は１区出土、44は２区土器群Ｂよりの出土である。27～42は鉄鏃である。27は方頭鏃。28・29は長三角形系の細根長頸鏃の鏃身部で、いずれも片丸造。２次調査の同形式（2-23）よりも細みの小さな鏃身であり、やや新相か。30～42のうち、41は幅や断面から方頭鏃などの茎になる可能性があるが、他は長頸鏃の頸部～茎部である。関部が明確でなく、実際に無関のもの（７世紀以降、須恵器Ⅳ期併行以降）が主体と思われるが、40の上部の錆として図示する部分は両角関の可能性が高い。また30は天地逆と思われ、図上段の破片の下部の左右に出た錆部分は、台形関か棘状関であろう。30の図下段は頸部となり、図下方にむかってわずかに幅を大きくするか30・40は初葬に伴う可能性がある。以上のように、２次調査分（Fig.25）も合わせて、型式から初葬・追葬ともに鉄鏃が副葬されたと推測できよう。なお、43・44は鞍金具の鋲具と鞍金具である。

Fig.28は、石室埋土出土のガラス小玉。色は、45はスカイブルー、46は紺色、47はコバルトブルーである。46は、側面がコテを当てたような多角形の面をなし（少し丸みあり)、上下面をカットして研磨している。管切法（管玉を切断）であろう。45・47は気泡が目立ち、全体に丸みを持つが、断面がやや扁平であり巻付け法と考える。外径・内径・厚み（Ａ・Ｂ・Ｃ）は、45はＡ5.1mm、Ｂ2.5mm、Ｃ3.1mm。46はＡ5.4mm、Ｂ 1.6～1.8mm、Ｃ 3.9mm。47はＡ3.15mm、Ｂ 1.1～1.3mm、Ｃ2.3mmを各々測る。

土器については、新たに観察表を作成した（表２、26頁)。既報告で漏れていた出土位置も記入した。また今回の報告では、表現の統一を図るためと再観察から、多くの図について再実測または加筆・改変を行った（Fig.29～31)。番号は既報告を踏襲した(1-1～26。「1-」は１次調査を表す)。またFig.31には、未報告の個体も新たに図化した（1-18b･50～59)。図示できた土器の最も多くは「１区墳頂部」(Fig.7のＣ）から出土しているが、須恵器群の大半がⅣ期古相（ⅢＢ期的様相を残す時期）である。ただし流出土中であり異なる時期も混在する。墓道の調査では、第１次追葬面の時期が不明であったが、このⅣ期古相の多量の土器供献が対応すると考えられる。最新の遺物では、７世紀末～８世紀初頭のⅥ・Ⅶ期の坏蓋があるが(1-4･58)、追葬は伴わないと考える。なおⅢＢ期としたものは量的に少なく、この時期の追葬が明確ではないので、前後の築造初葬時のⅢＡ期新相か、推定第１次追葬のⅣ期古相の型式幅に包含される可能性が考えられる。同様にⅣ期中相（Ⅳ期の典型。従来のⅣａ期主体だが、Ⅳｂ期も共伴）とするものも、Ⅳ期古相か、第２次追葬のⅣ期新相（従来のⅣａ・ｂ期、Ⅴ期的な要素が出現する段階。山村編年のＡ期。牛頸小田浦40-I号窯を指標とする）に包含されるか。また1-14の土師器は大形の高坏で、類例にⅢＢ期の城南区タカバン塚古墳例があるが（福岡市埋文報告第335集)、さらに大きく、おそらく初葬時のⅢＡ期新相であろう。また１・２区から出土した須恵器中形・大形甕は（Fig.30･31)、Ⅳ期古相を主体とするが（1-21～23･26、19･20、57･59)、一部ⅢＡ期新相に比定できよう（1-24･25)。なお、25は胎土から産地不明の地域外からの搬入品であろう。

Ⅳ　飯氏鏡原古墳(仮称)について

飯氏Ｂ－14号墳の周辺では、前述したように、その西方に３基の前方後円墳が存在する。このうち飯氏鏡原古墳（仮称）は未報告であるが、大形古墳の可能性が高く、今宿古墳群の前方後円墳系列の中で、５世紀中頃の空白を埋めるものと思われ、その意義が大きく、ここで紹介したい。

１　試掘調査の概要と墳丘の復元（Fig.32）

飯氏鏡原古墳は福岡市西区の伊都区画整理予定地内の埋蔵文化財試掘調査において発見された古墳である。試掘調査では周溝の一部と埴輪片を検出したに過ぎず、墳丘のほとんどは既に削平・破壊されたとみられた。ここでは、出土した埴輪の紹介と、周辺測量などから推定される現時点での墳丘復元案を示すことで資料紹介としたい。

調査は、1998年２月３日から同年３月31日にかけて、試掘対象地18haに対して72ヶ所の試掘調査区を設定し、実施したものである。全体の調査成果は別の機会にふれるとして、ここでは古墳周溝を検出した第47a･b トレンチについて概要を報告する。この位置は、1989年調査の飯氏遺跡群第３次調査Ⅰ区（報告は第 352集）の南側50m付近であり、飯氏二塚古墳から西にのびる丘陵先端付近の西斜面にあたる。標高11～12mの畑地に二本のトレンチを設けた。いずれも地表下30～50cmで遺構を検出した。検出面上部には包含層があり、弥生時代、古墳時代中～後期、古代の遺物が出土した。遺構は土坑、柱穴、溝を検出した。トレンチ東側で大きな溝状遺構があり、幅約18mを測る。平面では丘陵に沿って南東から北西へ、トレンチ付近で北方に振れる。くびれ部付近の周溝と考えられた。遺構の時期を知るために、溝内①・②の２ヶ所に幅0.5m、長さ1.2m程度の試掘坑を設けたが（Fig.32）、何れも検出面から約60cmで地山に達した（Fig.33)。この埋土の上半部から埴輪・土器の破片が出土している。なお隣接する西側に第48ｂトレンチを設定したが、削平が激しく東端に時期不明の溝（かつての畑境界か）を検出したのみである。ただし、何らかの地形変換線を反映している可能性があろう。

以上の調査成果から見て、この古墳の墳丘復元は容易ではない。第47両トレンチの北西側畑の道路沿いに石室石材と見られる玄武岩板石が数点採集されたことから、この付近に埋葬主体の存在が想定される。また現在住宅のある場所は周囲から 0.5～1.5mほど高く、墳丘の残存の可能性が残る。この住宅に沿った南北の道路は、周囲の畑地とともに旧地形に沿った曲線を描いているとみられる。またこの東～南側の畑地の等高線の廻り方は、周溝の存在を暗示するとみられる。以上の点から、Fig.32に示したような、墳長約85m、後円部径約55mの前方後円墳を推定復元した（数値は周溝検出面上端でのもの)。もちろんこれは古墳としての確認調査を経ていない段階での想定であり、極めて問題の残る図と言わねばならない。今後何らかの形での確認調査を期待し、その成果により古墳の実態の解明と明確な復元を望みたい。（吉留秀敏）

２　試掘調査出土の遺物（Fig.34）

１～16は埴輪で、全て第47ａトレンチから出土した。何れも埋土環境による表面の摩滅や剥落が著しく、調整が全く残らないか、かすかに残るのみである。また、突帯や口縁部などの角が落ちて丸くなっている。１～13は円筒埴輪の破片。１は普通円筒の最上段突帯から口縁部下部で、外面タテハケが残る。突帯の下には円形ないし半円形のスカシの痕跡がある。突帯部分上方での胴部径は、かなり大きく、約43cmに復元できる。２は口縁部で、端部は「コ」字状となる。外方の面は斜めに傾き、調整はヨコナデ。タイプ的には、口縁部先端が急に屈曲するものとは異なる。３～８は突帯のある胴部破片。３は外面タテハケが残る。突帯は断面台形を基本とし、小台形で「コ」字状に近いものや頂部のナデがきつくM字状に近いものもある。突帯突出度指数（器壁からの高さ÷接合部幅×100)は、32～46で平均40前後である。これは畿内のⅣ期前半と後半の間の数値である（天野末喜・松村隆文1992「埴輪の種類と編年１　円筒埴輪　Ｅ　近畿」『古墳時代の研究』９雄山閣)。９は胴部器壁から

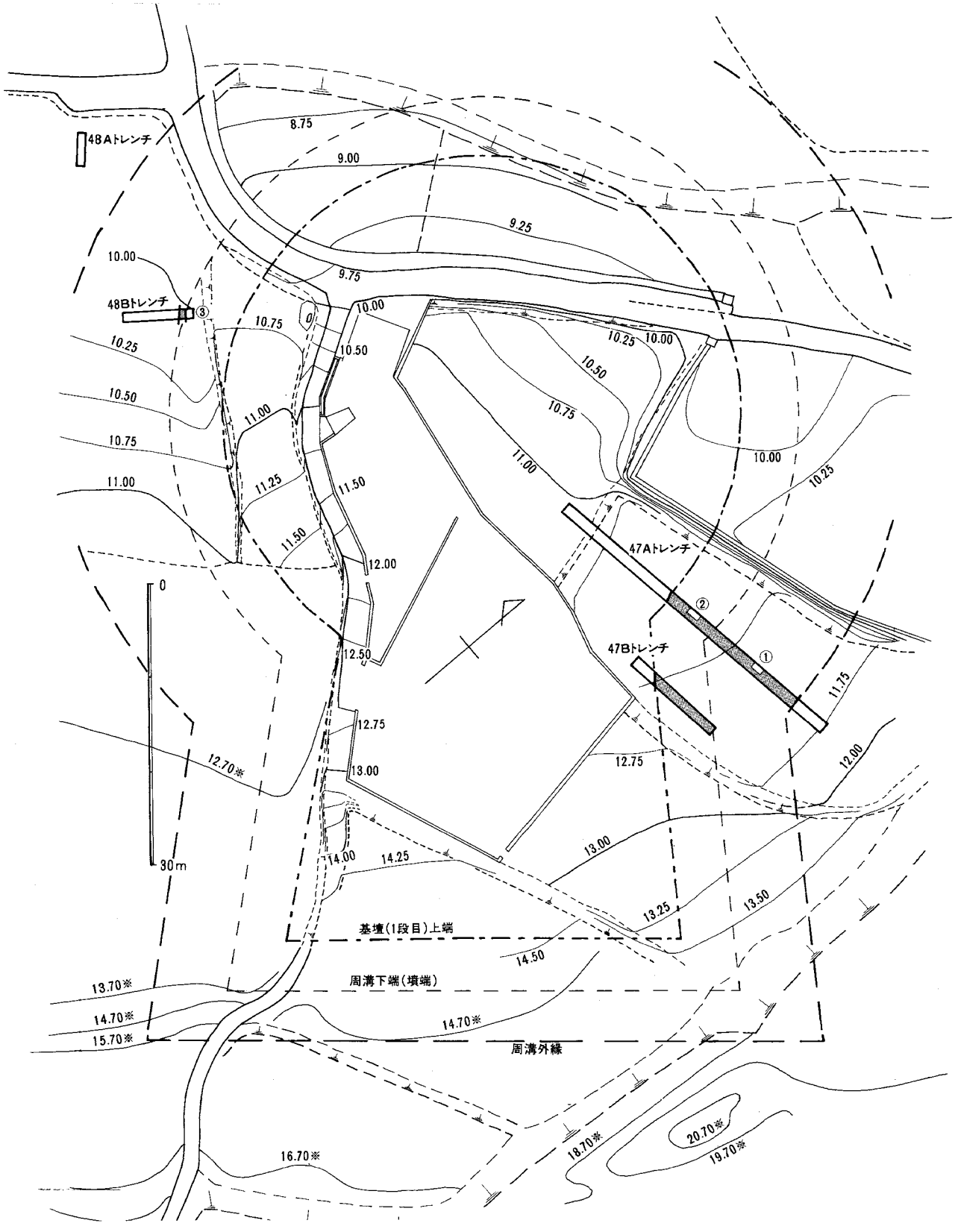
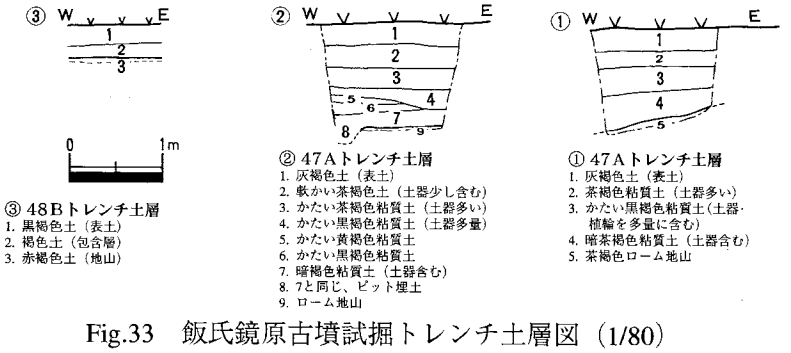


Fig.32　飯氏鏡原古墳（仮称）現況図・想定復元図（1/600）

☆「15.70※」など「※」のある数値は、地形図からのもの（東京湾基準標高-4.3mで博多湾標高に修正している）



③ 48Bトレンチ土層
1. 黒褐色土（表土）
2. 褐色土（包含層）
3. 赤褐色土（地山）

② 47Aトレンチ土層
1. 灰褐色土（表土）
2. 軟かい茶褐色土（土器少し含む）
3. かたい茶褐色粘質土（土器多い）
4. かたい黒褐色粘質土（土器多量）
5. かたい黄褐色粘質土
6. かたい黒褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土（土器含む）
8. 7と同じ、ピット埋土
9. ローム地山

① 47Aトレンチ土層
1. 灰褐色土（表土）
2. 茶褐色粘質土（土器多い）
3. かたい黒褐色粘質土（土器・植輪を多量に含む）
4. 暗茶褐色粘質土（土器含む）
5. 茶褐色ローム地山

Fig.33　飯氏鏡原古墳試掘トレンチ土層図（1/80）

剥離した突帯片で、10は突帯の剥離した胴部片である。11・12は突帯間の胴部片で、11には外面タテハケが、12には内面ヨコハケが残る。13は小片だが基部であろう。14は径が小さく、傾きから

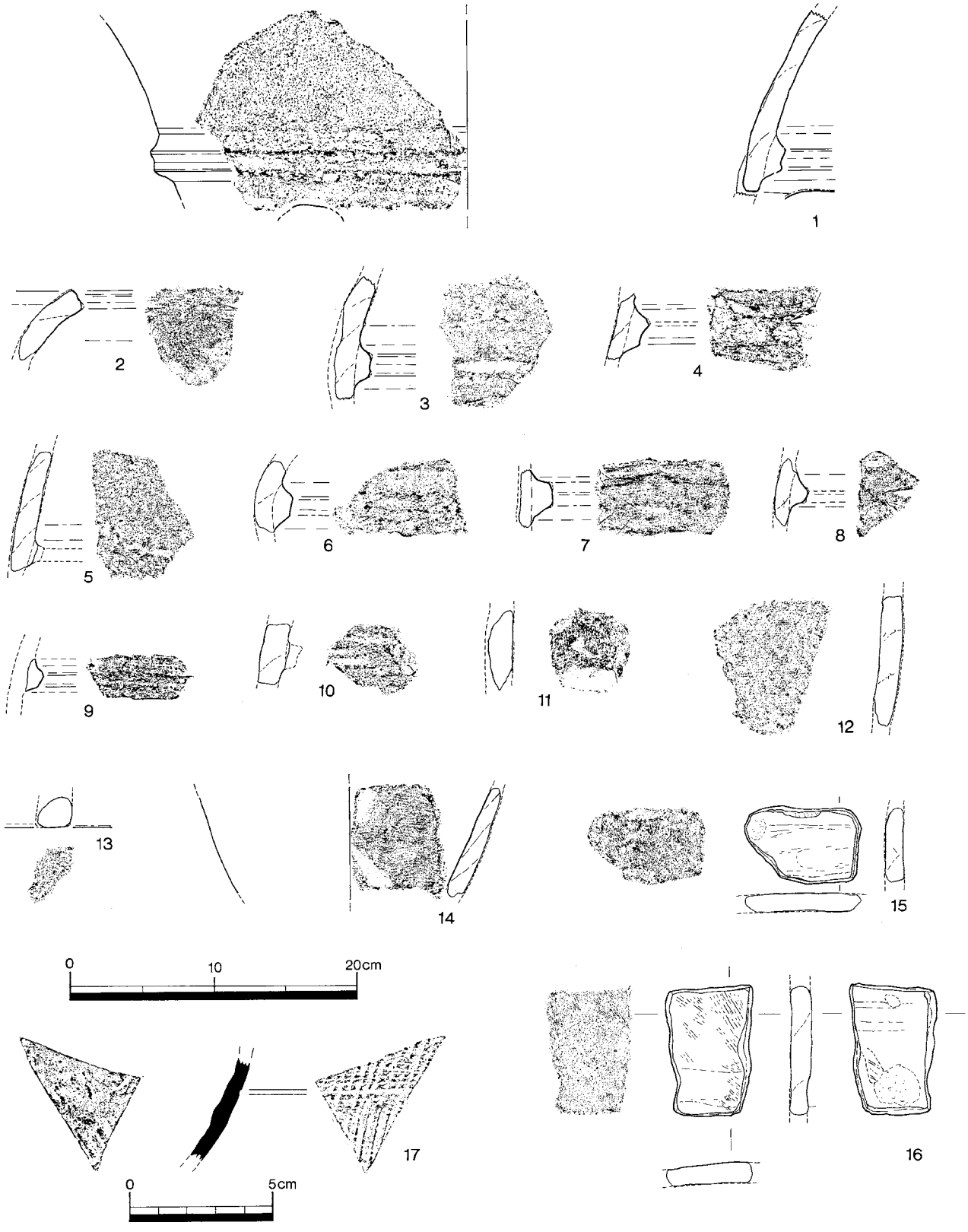


Fig.34　飯氏鏡原古墳出土埴輪（1/4）、須恵器（1/2）

壷形埴輪の胴部下方であろう。内面ヨコハケが残る。丸隈山古墳の報告中の（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 146集)、Fig.28の19は円筒埴輪ではなく、壷形と考えられ、ならばその系譜下になる。15・16は同一個体？の板状破片であり、器財埴輪（家形？）と思われ、突帯が剥離している可能性がある。

表面にハケメが一部残る。以上の埴輪の色調は、1～7・10・12～16が明赤褐色から橙色、8が明褐色～橙色、9が浅黄橙色、11が明黄褐色で一部黄灰褐色を呈する。焼きしまり具合や黒斑の有無・焼きムラのあり方から、1・3～10・12～14は窖窯焼成の可能性がある。2は明赤褐色を呈するが、芯が暗灰色のため、同様に11もくすんだ黄褐色を呈し、芯が灰褐色のため、何れも野焼きと考えられ、15・16も明赤褐色だが大きく黒斑があり野焼きであろう。野焼きと窖窯焼成が共存しており、川西宏幸氏の埴輪編年のⅣ期前半併行であろう（川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2)。ただし外面ヨコハケは確認できない。胎土は、何れも花崗岩起源の長石・石英粒を若干と少量の雲母粒を含む。また多くの個体には微量の角閃石も含む。最後に、17は須恵器の甕の胴部下半小片である。古墳の西側に接する第48ａトレンチ（Fig.32）の包含層からの出土。外面は擬格子（木目直交平行）タタキで、カキメと沈線を施す。内面は彫りの浅い同心円文当具痕で、これをナデ消す。器壁が薄く、全体に丁寧な作りで、沈線の存在などからⅠ期（Ⅰ型式）の範疇であろう。埴輪の年代観に近く、参考までに図示した。以上の飯氏鏡原古墳の埴輪は、この地域の窖窯焼成導入期のものであり、また径が大きく大形古墳に相応すると思われ、今後注目されるところである。古墳自体も、Fig.32の案がある程度妥当ならば、墳丘下端での全長は90m以上となり、今宿古墳群最大かつ同時期の玄界灘沿岸で最大となりその意義は少なくない。

Ⅴ 調査の成果と今後の課題－今宿古墳群をめぐって－

1　飯氏Ｂ－14号墳の墳丘の復元（案）(Fig.35)

Fig.35に墳丘の復元案を示す（断面図は Fig.6を参照)。全長約24.5m、後円部径17.0m、前方部幅14.2m、くびれ部幅9.8mを測る。１・２区、Ａ・Ｃトレンチの成果から後円部径を求めたが、どうしても中心点は石室から外れた位置になる。これは高低差のある狭い尾根上の築造のために、当初の墳丘プランと実際の石室造営位置に齟齬を生じたためであろう。一方、石室を造営して上に盛土すれば、墳頂部は当然石室の上になるだろう(Fig.35)。丘陵尾根は墳丘南側に高く、結果的にバランスが良い（Fig.6)。後円部中段平坦面は、Ａトレンチの状況や後円部斜面の現況から推測した。問題は前方部で、主軸をＣトレンチ西壁からＢトレンチ東壁付近を通るものとし、Ｂトレンチ中央付近を頂点とした剣菱形に復元した。小形前方後円墳の類例に那珂川町観音山古墳群中原Ｉ－１号墳や西区羽根戸南古墳群Ｆ－２号墳がある。しかしＥトレンチの成果の評価によっては異なる復元もありうる。１区やＧ・Ｆトレンチから前方部東半墳端はほぼ直角であり、片直角の前方部の可能性も残る。前方部中段平坦面は、１・２トレンチの土層断面やＤ～Ｇトレンチの上部の状況から推定される。とすれば、やはり後円部にもバランス上存在したと考えうる。前方部墳頂平坦面は１区の成果や現況から標高62m前後となるだろう。なお後円部平坦面は、存在すれば尾根上方側に高く同一平面をなさないものとなる。墳丘は裾部より盛土で構築され、見た目以上の土木量である。最後に、墳丘の高さは後円部の東西と前方部でそれぞれ異なり、Fig.6 を参照されたい。

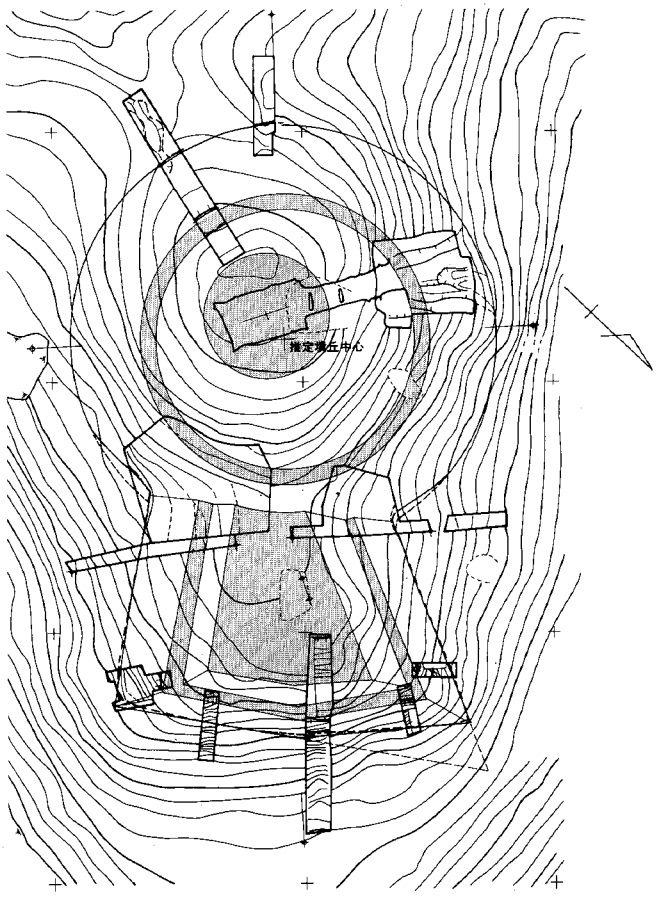


Fig.35　飯氏 B14号墳 墳丘復元平面図（1/300）

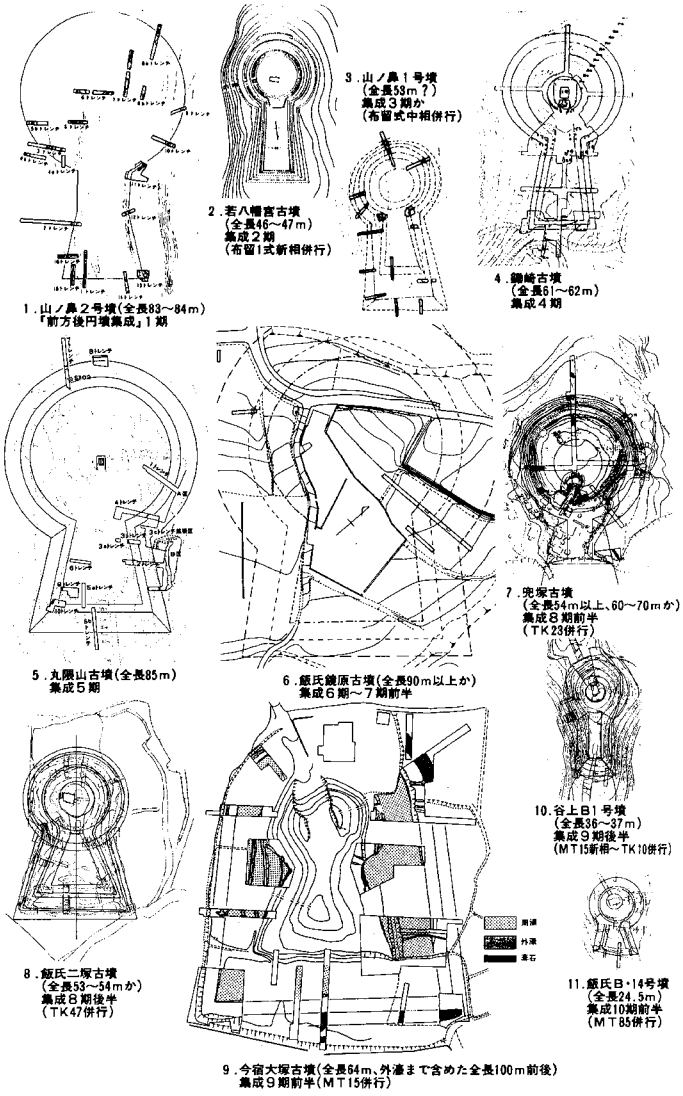


Fig.36　今宿平野の前方後円墳（1/2,000）

※各報告書・概報より引用、一部改変（3・8は報告書の図をもとに新たに作図）

※※全長は墳丘下端での全長である。

2 築造と追葬の時期について

今回の調査では、ⅢA期新相の土器群が析出され、また1次調査出土の大甕の一部等も同時期であり、これが築造・初葬時期になる。既報告で検討されているように、石室型式（柳沢一男氏のⅡ類型の範疇）の類例はⅢB期に多いが（西区徳永アラタ6号、前原市神在上ノ山、城南区タカバン塚など)、一時期古いことになる。これは前方後円墳＝首長墓ゆえに最新の石室が築かれたものと解釈したい。追葬は、墓道の調査から最低3回なされたと考えられる。最終追葬面がV期、第2次追葬がⅣ期新相であり、第1次追葬は墳丘遺物の多いⅣ期古相と解釈したい。築造がⅢA期新相＝6世紀第3四半期から、V期＝7世紀第3四半期までの百年間、埋葬に使用されたことになる。なお以上の成果に至るには、墓道土層の検討がなくしてはありえなかった。墓道土層の精査・検討は調査上の重要項目と言えよう。

3 今宿古墳群の前方後円墳の変遷と今後の課題

飯氏B－14号墳は2回の調査により石室・墳丘の状況や時期が明確になった。調査されたものでは今宿古墳群の前方後円墳の中で最も新しくなった。最後に、以下で今宿古墳群の前方後円墳の変遷について考えたい。Fig.36には調査された前方後円墳を掲げた。なお各古墳の概要や文献については谷上古墳の報告でまとめられており（福岡市埋文報告第499 集)、参照されたい。古墳の時期は『前方後円墳集成』（近藤義郎編1992ほか）の編年を基準とし、筆者の編年観で修正した。

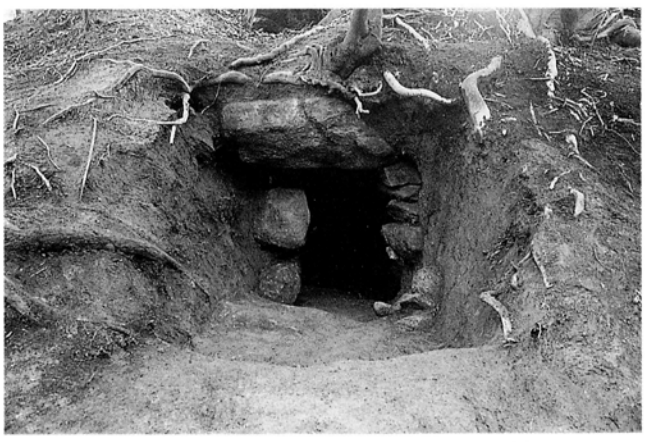
山ノ鼻2号は遺物がないが、博多区那珂八幡古墳と同形同大の可能性があり、1期であろう。若八幡宮は型式が古相の方形板革綴短甲を有し（橋本達也1996「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』考察編)、鼓形器台や小形丸底壷は布留Ⅰ式新相併行と考える。ただし鉄鏃はやや新相か。山ノ鼻2号との間にもう1基あろう。山ノ鼻1号墳は報告の墳形復元は疑問で、別の復元(Fig.36)も可能である。前方部から若八幡宮より新相で、鼓形器台は頸部がしまり、雑な作りで布留式中相に下る。鋤崎・丸隈山は、土器・埴輪・副葬品・石室から4～5期で問題ない。飯氏鏡原は埴輪から川西編年Ⅳ期前半から中頃併行で、北部九州での窖窯焼成埴輪の出現はTK216期であり、6期新相～7期古相となる。兜塚は、石室形態と埴輪（川西編年V期古相）および須恵器高坏脚部からTK23期か。飯氏二塚は、石室形態や須恵器の有蓋脚付壷の型式からTK47期か。なお墳端の認定に問題が残り（主軸方向のトレンチが短い)、報告よりも規模が大きい可能性があり、周辺の平坦地形は周溝の存在が示唆される。今宿大塚は未報告だが、埴輪からV期中相と考えられ、MT15の須恵器が出土しているという。谷上B-1号墳は須恵器からTK10期であるが、石室などからわずかに古い可能性がある。その他、女原C－14号墳や削平された前方後円墳が3基あるが(Fig.2参照)、何れも10期の古墳と想定される。削平された古墳も含め（墳丘基底部の残存も考えられる)、今後の確認が望まれる。また墳形復元に問題を残すなど、調査がやや不十分なものは、今回のように追加の確認調査を実施する必要があろう。

1. 飯氏B-14号墳遠景（西から）

2. 前方部西側コーナーから後円部現況（南西から）

3. 後円部から尾根上方現況（北東から）

4. 尾根上方西斜面から後円部現況（南西から）



5. 墓道部表土除去検出状況（北から）

6. A・Cトレンチ掘削状況（北から）

7. Aトレンチ盛土遺存面検出状況（南から）

8. Aトレンチ盛土途中面掘削状況（南から）

9. Aトレンチ北側壁面土層状況・石室掘方検出状況（南から）

10. Aトレンチ西壁中部土層状況（東から）

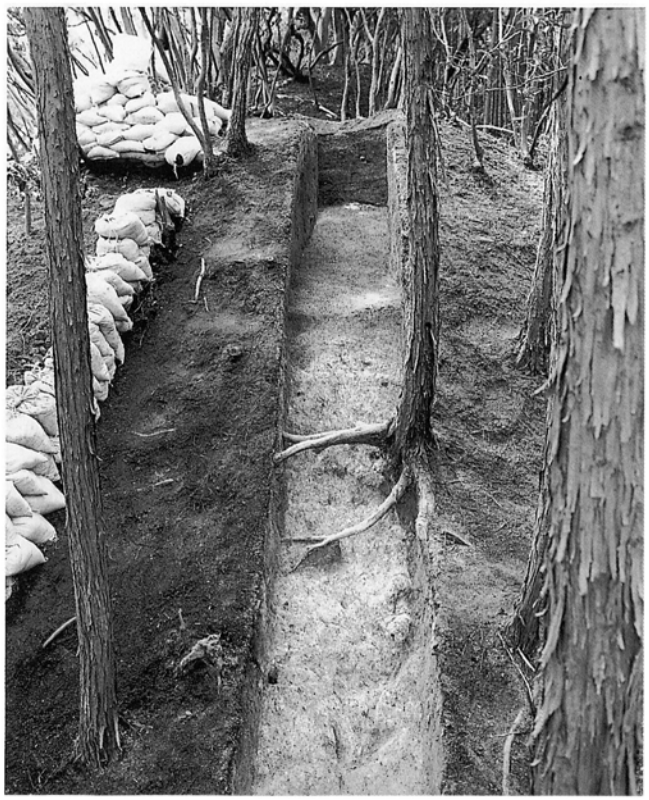
11. Aトレンチ東壁中部土層状況（盛土途中溝状部、西から）

13. Cトレンチ土器出土状況（北西から）

12. Cトレンチ掘削状況（地山整形面、西から）

14. Cトレンチ東壁北半土層（北西から）

16. Bトレンチ東壁最上部土層状況（北から）

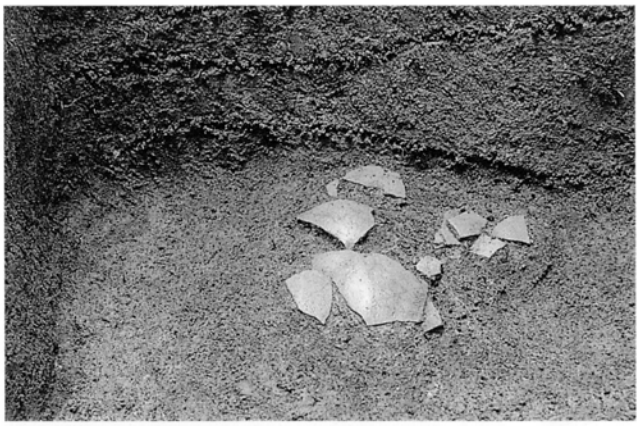


15. Bトレンチ地山整形面確認状況（北東から）

17. Bトレンチ東壁中部土層状況（墳端付近、北西から）

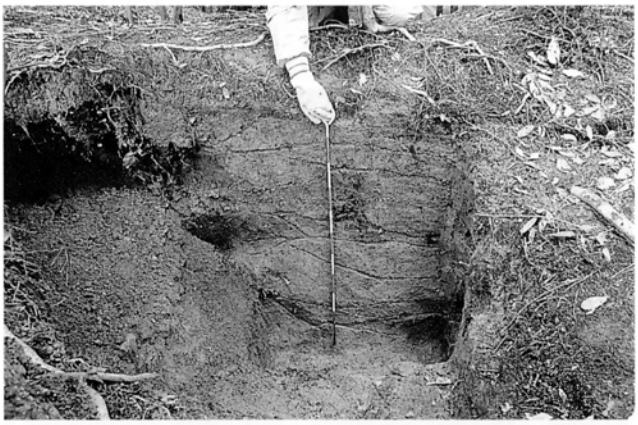
18. Bトレンチ地山整形面完掘状況（南西から）

19. Bトレンチ上部南・東壁面土層状況、土器出土状況（北から）



20. Bトレンチ上部地山整形面土器出土状況（北東から）

21. Bトレンチ東壁上部土層状況（溝状遺構、北から）



22. 前方部落ち込み西壁土層状況（東から）

23. Dトレンチ南壁土層状況（北東から）

24. Eトレンチ西壁土層状況（東から）

25. D（左）・E（右）トレンチ掘削状況（南から）

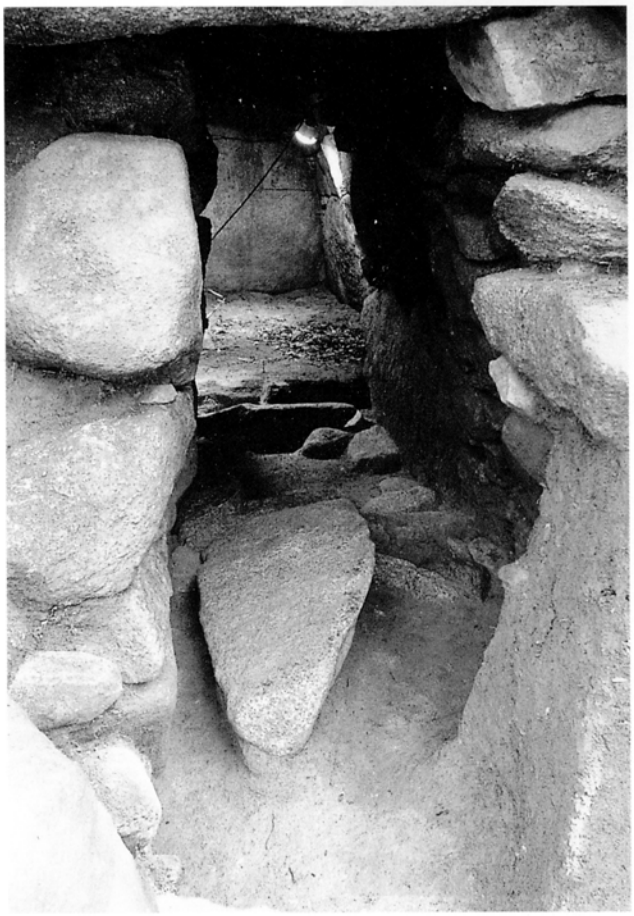
26. F（左）・G（右）トレンチ掘削状況（西から）

27. Fトレンチ東壁土層状況（西から）

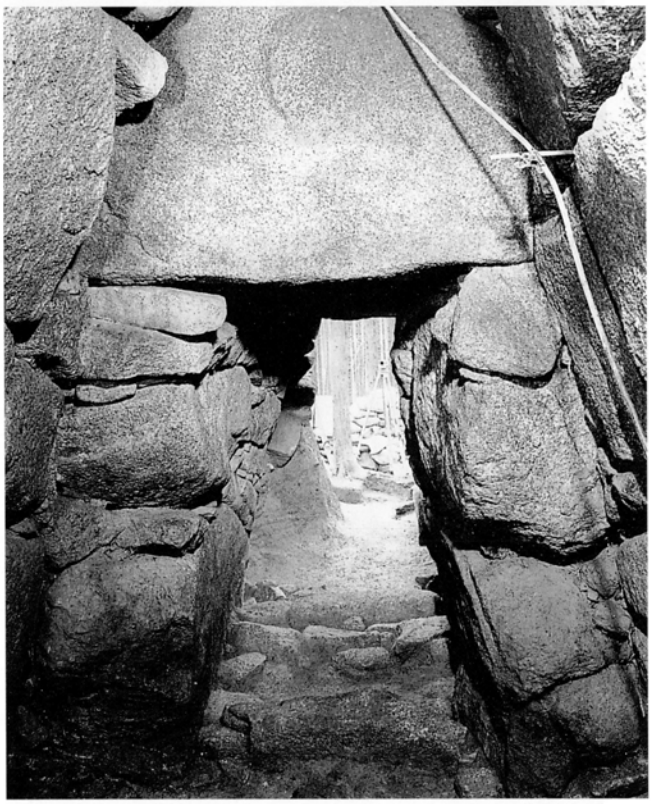
28. Gトレンチ掘削状況（東から）

29.　Gトレンチ南壁土層状況（北東から）

30.　Gトレンチ北壁土層状況（南西から）

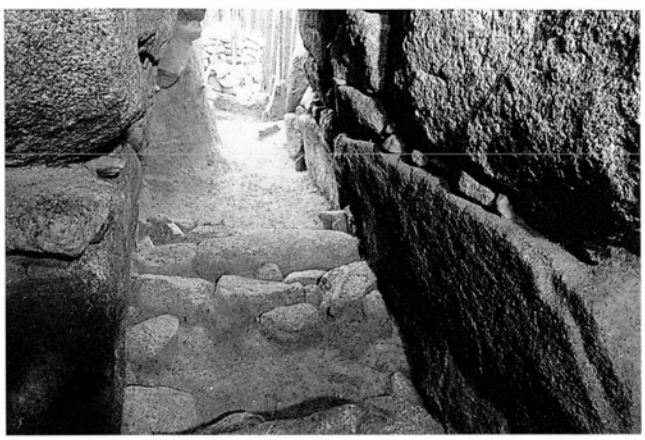


31.　羨道部転落石材出土状況（墓道から、北西から）



32.　石室羨道部完掘状況・床面敷石出土状況
（玄室から、南東から）

33.　羨道部右壁完掘状況（玄室から）



34.　羨道部左壁完掘状況（玄室から）

35.　墓道完掘状況（北西から）

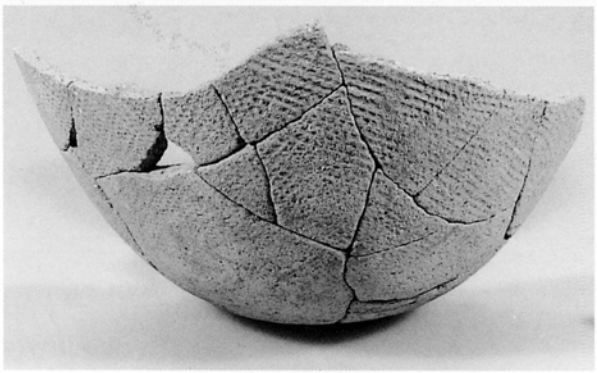
36.　墓道追葬面（右半）出土状況（北西から）

37.　墓道追葬面下半土器出土状況（南西から）

38.　墓道横断土層北半状況（西から）

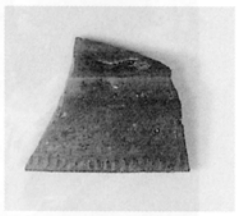
39.　墓道縦断土層東半状況（北から）

40.　墓道追葬面出土須恵器一括（10～17）

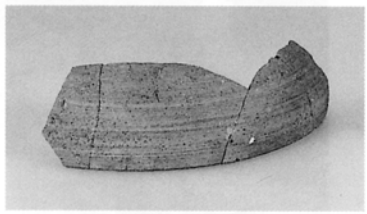


41. Bトレンチ出土須恵器甕？（横瓶？）（4）

42. 墓道出土須恵器坏蓋（7）



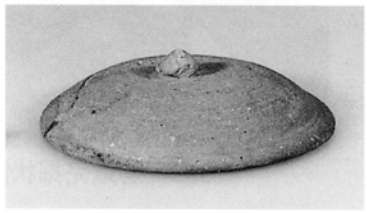
43. 墓道出土須恵器坏蓋（8）



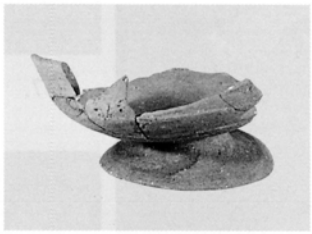
51. 墓道出土須恵器坏蓋（6）

44. Cトレンチ出土須恵器高坏（3）

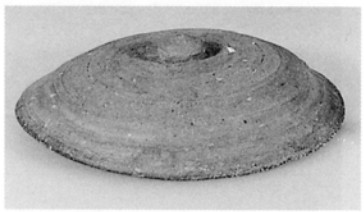
45. 42(7)+44(3)



52. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（13）



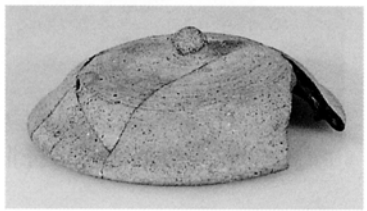
46. 墓道追葬面出土脚付鉢（17）



53. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（10）

47. 墓道出土土師器坩形土器外面（22）

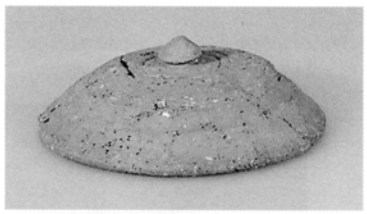
48. 坩形土器（47に同じ）内面（22）



54. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（12）

49. 墓道出土須恵器提瓶体部腹部ヘラ記号（9）

50. 堤瓶（49に同じ）体部被蓋部外面（9）



55. 墓道追葬面出土須恵器坏蓋（11）

56. 墓道追葬面出土須恵器坏身（15）

57. 墓道出土鉄製品（23・24・25・28）

58. 墓道出土鉄滓上面（29）

59. 鉄滓（58に同じ）下面（29）

60. 作業（埋め戻し）風景

飯氏古墳群Ｂ群第14号墳調査報告書(2)

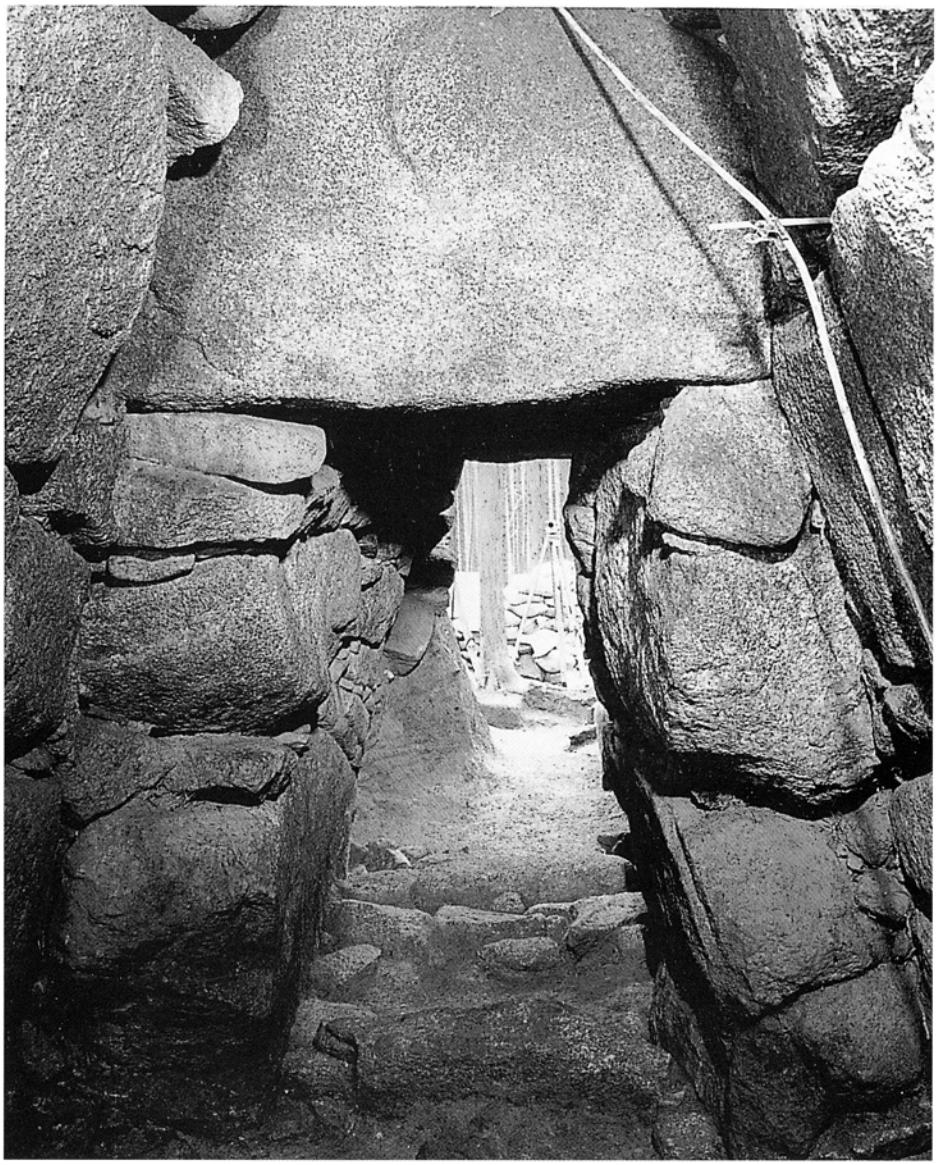
福岡市西区飯氏所在前方後円墳の第2次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集

1999年（平成11年）3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 大同印刷株式会社

福岡市中央区今泉1-13-30